

柏原市

大県郡条里遺跡 2

寝屋川水系改良事業（一般河川恩智川法善寺多目的遊水地）に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書

二〇一五年七月

2015年7月

公益財団法人 大阪府文化財センター

柏原市

大県郡条里遺跡2

寝屋川水系改良事業（一般河川恩智川法善寺多目的遊水地）に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書

2015年7月

公益財団法人 大阪府文化財センター

序 文

大県郡条里遺跡は、大阪府柏原市の北端に位置しています。平成14年度および15年度に行われた確認調査により、弥生時代にさかのぼる遺跡として新たに周知された遺跡で、古代に定められたこの地域の地名「大県郡」と、周辺の地割がこの頃に整えられた「条里制」の姿を残している可能性があることから名づけられました。

大県郡条里遺跡の周辺は、生駒山の丘陵地から眼下に河内平野を一望できる好立地であること、また旧大和川と石川の合流地を有する交通の要所であることから、これまでにも数多くの遺跡が確認されました。生駒山の裾を通る東高野街道沿いに多くの遺跡があり、弥生時代屈指の拠点集落と推定される恩智遺跡や、古代寺院として名高い河内六寺などは、著名な遺跡として知られています。また近年では、隣接する大県遺跡において、畿内屈指の製鉄工房が営まれていたことが明らかとなりました。古代史の表舞台である河内と大和をつなぐ中間点でもあるこの地域は、先進文化が花開く、活気ある景観を呈していたと考えられます。

今回の発掘調査地は、生駒山扇状地から沖積低地への変化点付近にあたります。平成23年度に行われた大県郡条里遺跡発掘調査（その1）の東側に隣接することから、その成果とともに各時代の遺構面の広がりを捉えることができました。（その1）調査時に加えて遺物が多種出土しており、遺跡の性格を知る上で重要な手がかりになると考えられます。遺跡の発掘調査によって蓄積された知見が、地域のさらなる発展に寄与することを願ってやみません。

最後に、調査にあたってご助力、ご協力をいただきました関係諸機関・地元関係者各位、また埋蔵文化財の調査に対してご理解とご教示をいただきました地域のみなさまに、深く謝意を表します。

これからも、変わらぬご理解とご支援を賜りますよう、よろしくお願い申し上げます。

平成27年7月

公益財団法人 大阪府文化財センター
理 事 長 田邊 征夫

例　　言

1. 本書は、大阪府柏原市法善寺4丁目地内に所在する大県郡条里遺跡で「大県郡条里遺跡12-1」として行われた調査の発掘調査報告書である。
2. 発掘調査は、「寝屋川水系改良事業（一級河川恩智川法善寺多目的遊水地）に伴う大県郡条里遺跡発掘調査（その2）」として、大阪府八尾土木事務所と公益財團法人大阪府文化財センターとの間で、平成24年12月3日付けて委託契約を締結し、同日から平成26年10月31日の委託期間で、平成25年4月10日から平成26年9月30日まで現地調査を行った。
遺物整理事業は、寝屋川水系改良事業（一級河川恩智川法善寺多目的遊水地）に伴う大県郡条里遺跡発掘調査（その2）遺物整理」として平成26年9月1日に委託契約を締結し、同日から平成27年7月31日の委託期間で、平成26年10月1日から平成27年4月30日まで行い、平成27年7月の本報告書刊行をもって作業を完了した。
3. 調査以下の体制で実施した。

【発掘調査】 平成24年度：調査部長 江浦 洋、調整課長 岡本茂史、調査課長 岡戸哲紀、
主査（南部総括） 西村 歩、主査 駒井正明

平成25年度：事務局次長 江浦 洋、調整課長 岡本茂史、
調査課長 岡戸哲紀、調査第二課長補佐 市本芳三、
主査 駒井正明、副主査 黒須亜希子

平成26年度：事務局次長 江浦 洋、調整課長 岡本茂史、
調査課長 岡戸哲紀、調査第一課長補佐 三好孝一、
主査 佐伯博光、副主査 黒須亜希子

【遺物整理】 平成26年度：事務局次長 江浦 洋、調整課長 岡本茂史、
調査課長 岡戸哲紀、調査第一課長補佐 三好孝一、
副主査 黒須亜希子

専門員 片山彰一（写真室）、山口誠治（保存室）

平成27年度：事務局次長 江浦 洋、調整課長 岡本茂史、
調査課長 岡戸哲紀、調査課長補佐 金光正裕、技師 福佐美智子
専門員 片山彰一（写真室）、山口誠治（保存室）

4. 本書で用いた現場写真是調査担当者が撮影し、遺物写真是写真室が担当した。
5. 本調査において出土した木質遺物の樹種同定は保存室がおこなった。
6. 本調査の実施にあたっては、柏原市教育委員会、大阪府教育委員会、大阪府八尾土木事務所のご指導、ご協力を賜った。
7. 調査にあたっては、以下の委託分析を実施した。その成果は本書第4章に所収した。
花粉分析……文化財コンサルタント株式会社 植物珪酸体分析……株式会社古環境研究所
8. 本書の執筆および編集は、黒須・福佐が行った。
9. 調査に関わる資料は、公益財團法人大阪府文化財センターにおいて保管している。広く利用されることを希望する。

凡　　例

1. 本書で用いる標高は、東京湾平均海面（T.P.）を使用した。また、単位はmで表記している。
2. 本書に掲載した全体図・遺構図等の座標は全て世界測地系に基づく平面直角座標系第VI系を使用している。
3. 方位は全て座標北で表示する。真北は座標北より西に $6^{\circ} 47'$ 、真北は東に $0^{\circ} 12'$ 振る。
4. 土層や土器胎土の色調については、小山正忠・竹原秀雄編『新版標準土色帖』2006年版 農林水産省農林水産技術会議事務局監修・財団法人日本色彩研究所色票監修を使用して識別した。
5. 発掘調査および遺物整理については、『遺跡調査基本マニュアル』に準拠した。
6. 遺構番号は基本的に現地調査において付番したものを踏襲した。現地調査では、遺構の種類に関係なく1から通し番号を配し、遺構の種類の前にアラビア数字の番号を付けて「1清」のように表記した。なお本書では、作図の都合上、ピットの遺構名を省略し、番号のみで示したものがある。
7. 掃図の縮尺は、基本全体図が800分の1、遺構平面図が $200 \cdot 40 \cdot 25$ 分の1、遺物は4分の1・2分の1である。
8. 掲載した遺物には、すべて通し番号を付した。従って、実測図・写真図版・観察表に付された遺物の個体番号は一致する。なお、観察表は、土器、金属器、石器、木器の種別に作成した。遺物の詳細は、観察表を参照されたい。
9. 遺物実測図のうち、陶磁器になされた絵付けや文字の書き込み、漆皮膜、炭化物の付着、木製品の炭化部位についてはアミカケを施した。その詳細は、解説文中において記述した。
10. 本書文中において引用した文献は、【引用・参考文献】として、各章末に列挙した。

目 次

序 文
例 言
凡 例
目 次

第1章 調査に至る経緯と経過	1
第1節 調査に至る経緯と経過	1
第2節 調査・整理の方法	2
第2章 調査地周辺の位置と環境	6
第1節 調査地周辺の地形と遺跡分布	6
第2節 既往の調査成果	8
第3章 調査成果	9
第1節 基本層序	9
第2節 遺構と遺物	18
第4章 自然科学分析	56
第1節 分析の目的と内容	56
第2節 花粉分析	(文化財コンサルタント株式会社) 57
第3節 植物珪酸体分析	(株式会社古環境研究所) 64
第5章 まとめ	68
遺物観察表	
写真図版	
抄録	

挿 図 目 次

図1 大阪府条里遺跡調査位置図	1	図26 第9面 全体図	36
図2 調査区地区割図・配置図	3	図27 第9面 遺構平面断面図(1)	37
図3 周辺の遺跡分布図	7	図28 第9面 遺構平面断面図(2)	38
図4 基本層序模式図	10	図29 第9面 遺構平面断面図(3)	39
図5 調査区東西方向壁断面図	11・12	図30 第9面 遺構平面断面図(4)	40
図6 調査区南北方向壁断面図	15・16	図31 第9面 遺構平面断面図(5)	41
図7 第1面 全体図	18	図32 第9面 遺構平面断面図(6)	42
図8 第1面・第0層・第1層 出土遺物実測図	19	図33 第9面 遺構平面断面図(7)	43
図9 第2面 全体図	20	図34 第9面 遺構平面断面図(8)	44
図10 第2面・第2層 出土遺物実測図	20	図35 第9面 遺構平面断面図(9)	45
図11 第3面 全体図	21	図36 第9面 遺構平面断面図(10)	46
図12 第3面・第3層 出土遺物実測図	22	図37 第9面 遺構平面断面図(11)	47
図13 第4面 全体図	23	図38 第9面 遺構平面断面図(12)	48
図14 第4面・第4層 出土遺物実測図	24	図39 第9面 遺構平面断面図(13)	49
図15 第5面 全体図	25	図40 第9面 遺構平面断面図(14)	50
図16 第5面・第5層 出土遺物実測図	26	図41 第9面 遺構平面断面図(15)	51
図17 第6面 全体図	27	図42 第9面 遺構平面断面図(16)	52
図18 第6面・第6層 出土遺物実測図	28	図43 第9面 遺構平面断面図(17)	53
図19 第7面 全体図	29	図44 第9-2面 遺構平面断面図	54
図20 第7面・第7層 出土遺物実測図	30	図45 第9面・第9層・第9-2面 出土遺物実測図	55
図21 第8面 全体図	31	図46 分析試料採取地点位置図	56
図22 第8面 遺構平面断面図(1)	32	図47 花粉分析ダイヤグラム	59・60
図23 第8面 遺構平面断面図(2)	33	図48 植物珪酸体分析検出グラフ	66
図24 第8面 遺構断面図	34	図49 遺構変遷図(1)	68
図25 第8面・第8層 出土遺物実測図	35	図50 遺構変遷図(2)	69

写 真 目 次

写真1 現地公開開催状況	2	写真6 出土遺物の取上げ	5
写真2 体験学習実施状況	2	写真7 遺構実測	5
写真3 機械掘削	5	写真8 大阪府教育委員会立会	5
写真4 人力掘削	5	写真9 遺物登録・注記	5
写真5 遺構面検出	5	写真10 報告書作成	5

表 目 次

表1 採取試料の微化石含有概況	57	表4 遺物観察表(石器)	84
表2 植物珪酸体分析結果	65	表5 遺物観察表(木器)	85
表3 遺物観察表(土器)	70	表6 遺物観察表(金属器)	86

図版目次

図版1 第1面	1. 1区 第1面 全景	図版12 第9面	1. 1区 第9面 全景
	2. 2区 第1面 全景		2. 1区 第9面 穴穴建物1検出状況
図版2 第1面・第2面	1. 3区 第1面 全景		3. 1区 第9面 穴穴建物2完掘状況
	2. 1区 第2面 全景		4. 1区 第9面 穴穴建物1完掘状況
図版3 第2面	1. 2区 第2面 全景		5. 1区 第9面 穴穴建物1 遺物出土状況
	2. 2区 第2面 敷間完掘状況	図版13 第9面	1. 1区 第9面 91土器群 遺物出土状況
	3. 3区 第2面 全景		2. 1区 第9面 101土坑・102土坑 完掘状況
図版4 第3面	1. 1区 第3面 全景		3. 2区 第9面 ピット群検出状況
	2. 2区 第3面 全景		4. 2区 第9面 ピット群・ 溝検出状況
	3. 3区 第3面 全景		
	4. 3区 第3面 404土坑完掘状況		5. 2区 第9面 溝群完掘状況
図版5 第4面	1. 1区 第4面 全景	図版14 第9面・第9-2面	1. 2区 第9面 全景
	2. 2区 第4面 全景		2. 3区 第9面 全景
	3. 3区 第4面 全景		3. 2区 第9-2面 360土坑 遺物出土状況
	4. 3区 第4面 全景		4. 3区 第9-2面 全景
図版6 第5面	1. 1区 第5面 全景	図版15 第0層・第1面・第1層・第2面・第2層 出土遺物(土器・石器・金属器)	
	2. 2区 第5面 全景		1. 第0層・第1面・第1層 出土遺物 (土器・石器)
	3. 3区 第5面 全景		2. 第2層 出土遺物(土器・金属器)
	4. 3区 第5面 全景	図版16 第3面・第3層 出土遺物(土器・石器)	
図版7 第6面	1. 1区 第6面 全景		1. 第3面・第3層 出土遺物 (土器・石器)
	2. 1区 第6面 全景		2. 第3層 出土遺物(土器)
図版8 第6面	1. 2区 第6面 全景	図版17 第4面・第4層 出土遺物(土器・金属器)	
	2. 3区 第6面 畦畔検出状況		1. 第4面・第4層 出土遺物(土器)
	3. 3区 第6層 耳環出土状況		2. 第4層 出土遺物(土器・金属器)
	4. 3区 第6面 全景	図版18 第5面・第5層 出土遺物(土器・金属器)	
図版9 第7面	1. 1区 第7面 全景		1. 第5面・第5層 出土遺物 (土器・金属器)
	2. 2区 第7面 全景	図版19 第5層 出土遺物(土器)	
	3. 2区 第7層 土器師环出土状況		1. 第5層 出土遺物(土器)
	4. 2区 第7面 和同開跡出土状況		2. 第5層 出土遺物(土器)
図版10 第7面・第8面	1. 3区 第7面 全景	図版20 第6面・第6層 出土遺物(土器)	
	2. 1区 第8面 全景		1. 第6面・第6層 出土遺物(土器)
図版11 第8面	1. 2区 第8面 溝群完掘状況		2. 第6面・第6層 出土遺物(土器)
	2. 3区 第8面 全景	図版21 第6層・第7面 出土遺物(土器)	
			1. 第6層・第7面 出土遺物(土器)

図版22 第6層・第7面・第7層 出土遺物
(土器・金属器)

1. 第6層・第7面 出土遺物
(土器・金属器)
2. 第7層 出土遺物(土器)

図版23 第7層・第8面・第8層 出土遺物(土器)

1. 第7層 出土遺物(土器)
2. 第7層・第8面 出土遺物(土器)
3. 第8層 出土遺物(土器)

図版24 第8面・第8層・第9面 出土遺物(土器)

1. 第8面・第8層 出土遺物(土器)
2. 第9面 出土遺物(土器)

図版25 第9面・第9層・第9-2面 出土遺物
(土器)・第3層~第8層 出土遺物(石器)

1. 第9面 出土遺物(土器)
2. 第3層~第8層 出土遺物(石器)
3. 第9層・第9-2面 出土遺物
(土器)

図版26 第0層~第5層 出土遺物(木器)

1. 第0層~第5層 出土遺物(木器)
2. 第1層~第5層 出土遺物(木器)

第1章 調査に至る経緯と経過

第1節 調査に至る経緯と経過

調査の原因 本調査は、寝屋川系改良事業（一級河川恩智川法善寺多目的遊水地）に伴う大阪府条里遺跡の発掘調査である。事業の計画範囲は、柏原市法善寺と八尾市神宮寺にわたる11.4ヘクタールに及んでおり、今回の調査地はその北西の一角にあたる（図1）。多目的遊水地の設営は、寝屋川流域における総合治水対策事業の一環として行われており、恩智川右岸に越流堤を設けることにより、豪雨時に洪水を一時貯留して下流域への流量を調整することを目的とする。

平成14・15年度、大阪府教育委員会は、事業予定地を対象として確認調査を実施した。その結果、ほぼ全城において古墳時代～中世の遺構を確認し、さらに下層において古い遺構や遺物が存在する可能性を指摘した。この成果に基づき、「大県郡条里遺跡発掘調査（その1）」が、平成23年6月1日より平成24年11月30日まで、面積1,980 m²を対象として実施された。調査は、事業主体である大阪府八尾土木事務所より公益財団法人大阪府文化財センター（以下、当センター）が委託を受け、大阪府教育委員会指導の下、実施した。

この調査では、縄文時代後期～晩期中葉に形成された河川跡のほか、縄文時代晩期～古代の集落跡、古代～中世までの水田跡が検出された。また、残存状態が良好な縄文土器のほか、「博」と記された奈良時代の墨書き土器など特筆すべき遺物の出土も報告されており、これまで不明であった遺跡の性格が周知されることとなった。この成果は、『公益財団法人大阪府文化財センター調査報告書 第241集 柏



図1 大県郡条里遺跡調査位置図

原市 大県郡条里遺跡』として、平成25年10月に報告された。

本調査の開始と経過 今回の調査は、(その1)調査区の東側に隣接する範囲において、大県郡条里遺跡発掘調査(その2)として実施した。現地調査は、平成25年4月10日より平成26年9月30日までの期間で、対象面積は5.694 m²である。

調査は、対象範囲を3分割して実施した(次節詳述)。はじめに1区に着手し、その後2区の掘削を実施した。また、2区の人力掘削完了後、3区の掘削に着手した。

なお、(その1)調査区の成果により自然河川の堆積であることが判明したT.P.+10.5m以下については、大阪府教育委員会の指示に基づき職員立会の下、機械を用いて慎重に掘削を行った。この作業は、すべての人力掘削が完了した後、新たに重機を搬入して行った。

このほか調査期間中に、地元住民を対象とした現地公開を2回、近接する柏原市立堅下北小学校の6年生および4年生、関係保護者を対象として、発掘調査体験学習の実施を2回開催した(写真1・2)。



写真1 現地公開開催状況



写真2 体験学習実施状況

第2節 調査・整理の方法

調査区の設定 調査範囲は南北最大長約90m、東西最大幅約60mを測る不整四辺形を呈しており、調査区はこの範囲をT字形に3分割し、それぞれ1区、2区、3区として設定した(図2下段)。このため(その1)調査区の一部は、1区に入り込む形となる。

調査地の現地盤高はT.P.+13.5m前後、造成により周辺地(耕作地)より僅かに高い標高値を示す。なお今回の調査区内には、大阪府教育委員会によって実施された確認トレチが2か所含まれている。

調査深度の設定 調査深度の設定は、(その1)の調査成果と、確認調査成果によって計画された。

当初計画の調査深度は、遊水地池床部の影響範囲までで、調査区北東から南西へ向かい階段状に下がる構造となる。①の範囲については、後に予定される本体工等により地下に残存する埋蔵文化財への影響が懸念されたため、T.P.+10.5mまで掘削を行い、②の範囲では、①同様にT.P.+10.5mまで人力掘削を行い、以下を床付面のT.P.+9.0mまで、機械掘削で行うこととなった。

調査区の地区割方法 現地調査では、調査区を世界測地系(測地成果2000)の平面直角座標系(第VI系)に基づく地区割を用いて分割し、検出遺構や出土遺物の管理に用いた。各調査区とともに人力掘削の開始と平行して、XY座標点および水準点を設置し、これを測量基準点として一辺10mの座標グリッドを設定した(図2上段)。

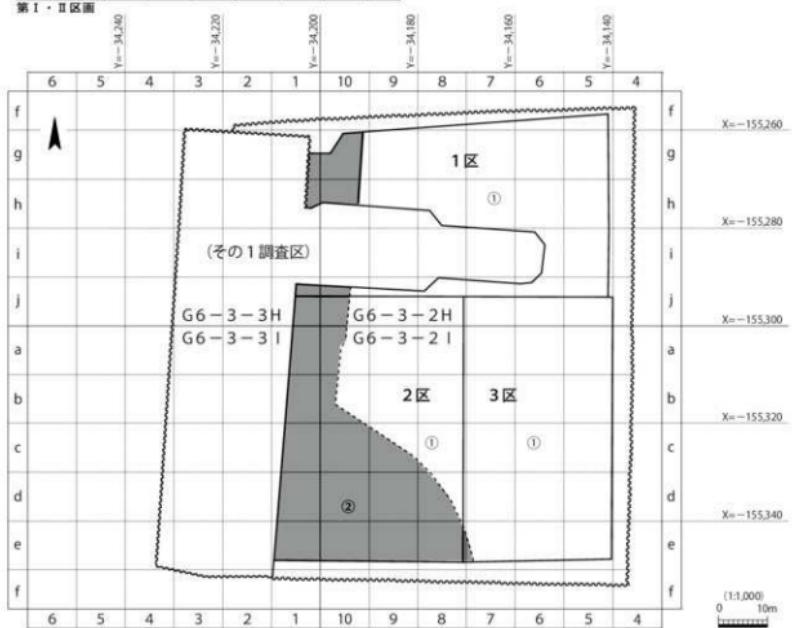
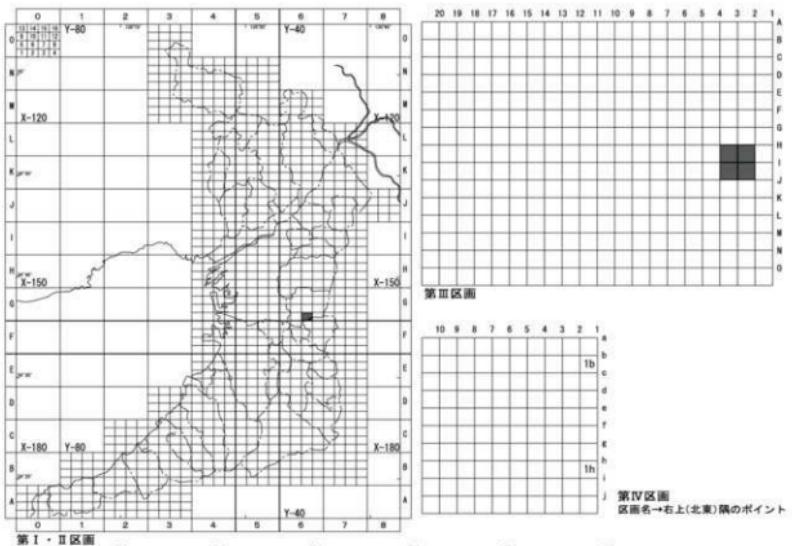


図2 調査区地区割図・配置図

設定されたグリッドでは、第Ⅰ区画から徐々に細分された第Ⅴ区画までを定めている。第Ⅰ区画とは、大阪府の南西端X=-192.000m、Y=-88.000mの交点を基準として、南北6km、東西8kmの面積で府域を62分割した区画をいう。このうちの1区画をさらに南北1.5km、東西2.0kmの範囲で各々4分割し、計16区画としたもののひとつを第Ⅱ区画とする。さらにこの第Ⅱ区画を南北に15分割、東西に20分割した一辺100mの範囲を第Ⅲ区画とし、これを東西、南北ともに10分割した一辺10mの範囲を第Ⅳ区画とする。第Ⅴ区画は、第Ⅳ区画を5m単位で分割した区画である。

今回の調査地は、第Ⅰ区画が「G 6」、第Ⅱ区画が、「3」に、第Ⅲ区画が、「2・3H」「2・3I」であり、第Ⅳ区画はそれぞれ分割した区画名称が該当する。なお今回の調査では、第Ⅳ区画までを使用し、第Ⅴ区画は適用していない。出土遺物は、このグリッドごとに第Ⅲ区画・第Ⅳ区画および出土遺構や層位、遺構面などを記入したラベルとともに取り上げ、登録番号を付した。また、検出遺構の実測図作成時には、グリッド名を明記した。

現地調査の方法 現地調査の方法は、以下のとおりである。はじめに、表土、盛土、近現代の耕作土をバックホウを後進させながら掘削し（写真3）、続く人力掘削では、層序ごとに掘削を進めた。

掘削作業にはショベルやジョレン、ツルハシ等を用い、土砂の排出には主としてベルトコンベアを利用した（写真4）。さらに、層相の変化ごとに遺構面の検出に努めた（写真5）。遺構を検出した際には、個別に掘削を行い、その性格の把握に努めた。

なお、遺物の出土に際しては、ヘラや小型ショベル等を用いて、慎重に取り上げ作業を行った（写真6）。

各遺構面では、全景の撮影や検出遺構の個別写真撮影、平面図や断面図の作成、標高値の計測、遺構実測（写真7）等、一連の記録作業を行った。また、特に重要な遺構面では、空中写真測量を行った。

今回の調査では、1-1区の第1遺構面、第8遺構面、第9遺構面、1-2区および1-3区では、第1遺構面、第9遺構面において、写真測量を実施している。なお、遺構の性格を判断する手段のひとつとして、土壤の自然科学分析（花粉分析・植物珪酸体分析）を行った。

さらに、遺跡の公開時、主要な遺構面の検出時、調査終了時には、大阪府教育委員会の立会を受け、調査指導を仰いだ（写真8）。

そのほか現地では、詰所内において基礎整理作業を行った。内容は、遺物の洗浄作業、遺物片に登録番号を記入する注記作業（写真9）、出土遺物を台帳に記入する登録作業等である。また、調査現場において撮影したフィルムは適宜整理し、撮影台帳を作成した。

遺物整理の方法 整理作業は、当センター南部調査事務所（堺市竹城台）において実施した。各作業の内容は、以下の通りである。今回の調査ではコンテナバット（60×40×15cm）24箱分の遺物が出土した。これらの遺物は、報告書に掲載するものを抽出した後、接合・復元、遺物実測（写真10）、写真撮影を行った。その後、遺物挿図として版組し、トレースを行った。また、この作業とは別に、現地調査時に作成した遺構図等を精査し、トレースを行い、挿図を作成した。以上の作業によって得られた情報を基礎として文章を執筆し、調査報告書（本書）を作成した。

【参考文献】

- （公財）大阪府文化財センター 2013 『公益財團法人 大阪府文化財センター調査報告書第241集 大阪府条里遺跡 寝屋川水系改良事業（一級河川恩智川法善寺多目的遊水地）に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書』



写真3 機械掘削



写真4 人力掘削



写真5 遺構面検出



写真6 出土遺物の取上げ



写真7 遺構実測



写真8 大阪府教育委員会立会



写真9 遺物登録・注記



写真10 報告書作成

第2章 調査地周辺の位置と環境

第1節 調査地周辺の地形と遺跡分布

遺跡周辺の地形と地質 大県郡条里遺跡は、大阪府柏原市の北端に位置している。現在の行政名称では柏原市法善寺2・4丁目および、平野1丁目に含まれており、その北限は八尾市に接している(図3)。遺跡の東には生駒山が横臥し、その麓をかつての東高野街道(調査区付近では国道旧170号と重複)が通る。また西には恩智川が北流する。

地形および地質を見ると、調査地西方の土壤は、西に位置する旧大和川(現在の長瀬川・玉串川)の影響を受けるため、総じて砂質で形成された自然堤防である。一方、東方からは生駒山から派生する扇状地形がのがており、その裾野に温潤な谷地が櫛の歯状に入り込む様相をみせる。今回の調査区は、扇状地より低地に近い箇所にあたるため土壤は軟弱で、粗砂を主体とする地盤の上に粘質土が堆積する状況にある。

上記のような地形により、旧来の遺跡は硬質な地盤を保つ東方(山側)と、旧大和川を隔てた西岸に集中する。以下、時代ごとに記述する。

縄文時代 調査地より南東へ800mを隔てた場所に位置する柏原市大県遺跡では、縄文時代早期に遡る押型文土器や石器のほか、縄文時代後期の石廻い遺構が確認されている。また、東高野街道に近接する調査地点では、縄文時代後期～晩期の土坑、溝等が検出されている。これらのうち、特に、晩期前半の土器群は、大阪府における「滋賀里Ⅲa式」の好例として示される。

このほか、調査の北東に位置する八尾市恩智遺跡では、縄文時代後期～晩期前半の土坑や溝が検出されている。また河川からの出土であるが、大県郡条里遺跡(その1)調査時には縄文時代晩期中葉の土器がほぼ完形で出土しており、当該時期には、調査地東側の微高地上に人々が集住した可能性が極めて高いと考えられる。

弥生時代 弥生時代になると、遺跡の分布範囲は低地に向かって拡大する。調査区の北に位置する八尾市神宮寺遺跡では、弥生時代中期の土器棺墓や弥生時代後期の集落が確認されている。東に接する柏原市山ノ井遺跡、同市平野遺跡でも遺物が採集されており、拠点集落として位置付けられる恩智遺跡を中心として、生駒山西麓に小集落が点在する様相が認められる。

一方、旧大和川を隔てた沖積低地でも、大規模な集落が展開する。調査地より南西へ1.4km隔てた柏原市本郷遺跡では、弥生時代後期後半に周溝墓を有する集落が検出されており、溝内からは小型の銅鏹が出土している。その南に位置する藤井寺市船橋遺跡は、弥生時代前期～後期の土器が採集された遺跡として著名で、特に竈の図案を刻んだ絵画土器(弥生時代後期前半)は、希少な例として注目されている。

古墳時代 続く古墳時代には、大県遺跡が最盛期を迎えるなど、この地域特有の動きが見られる。大県遺跡では、渡来技術の受容を顯著に示す鍛冶関連遺構が多数検出されており、鉄器生産に関わる集落が存在したことがわかる。遺跡内からは韓式土器出土の報告があること、また、生駒山斜面地に展開する平尾山古墳群のうち、大県遺跡に近い平野・大県支群には、釦子やミニチュア土製品など、渡来系遺物の副葬が認められること等から、渡来人が定住したことが窺える。

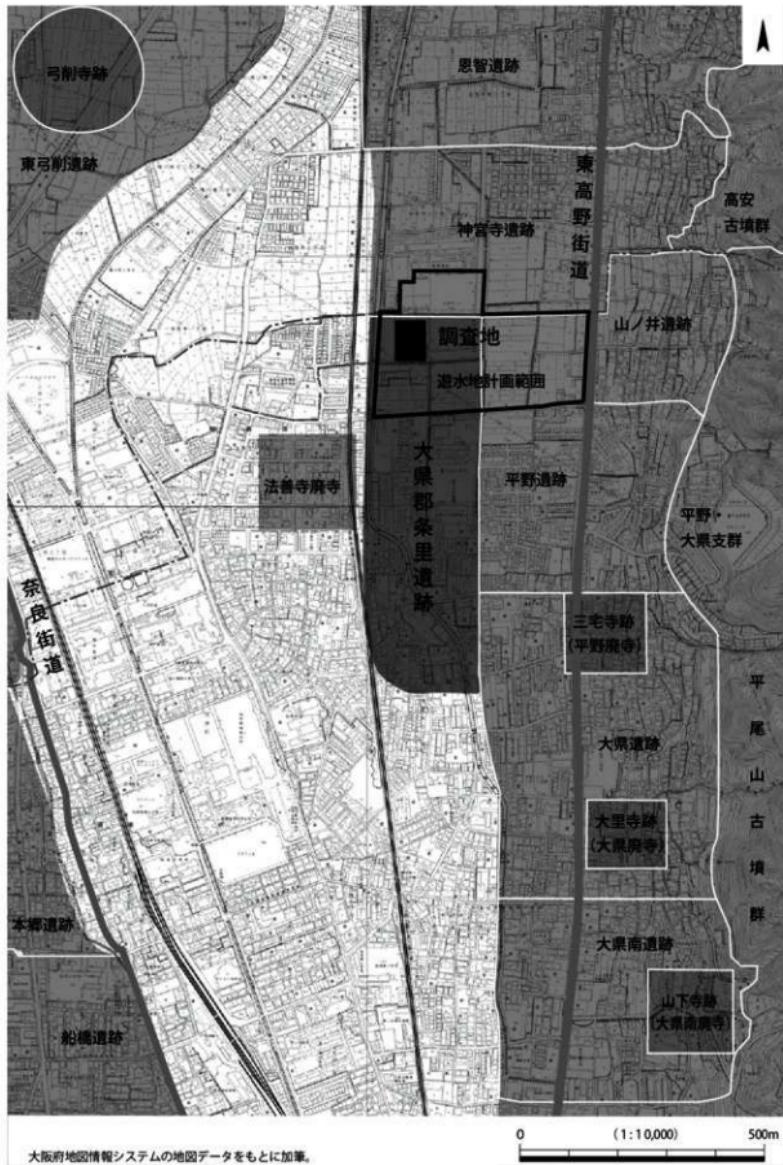


図3 周辺の遺跡分布図

古代 奈良時代になると集落はさらに拡充し、有力な氏族の台頭が想起されるようになる。東高野街道沿いに寺院が建立され、「河内六寺」と呼称される。これに付随して、奈良時代～平安時代の出土遺物も散見されている。特に、大県遺跡やその南に広がる大県南遺跡では、「大里寺」「山下脊川」等の墨書き土器や、官人の服飾品である石製丸柄が出土しており、寺院や地方官衙に関わる識字層の起居が想起される。

旧大和川の対岸では、船橋遺跡からガラス小玉の鋳型（飛鳥時代）や漆壺が出土しており、古代の工房跡が存在したと認識されている。また東弓削遺跡では、奈良時代の火葬墓や土葬墓があり、「卍」を線刻した須恵器小壺の副葬が確認されている。

中世 調査地周辺では、集落の検出例は減少するものの、水田などの生産遺跡が多く報告されるようになる。神宮寺遺跡では、鎌倉時代の耕作地跡や、室町時代の井戸やピットが確認されている。山ノ井遺跡では、整地層の存在が確認されており、斜面地における耕地開拓の痕跡をとどめている。なお、当調査区を含めた法善寺多目的遊水地の確認調査では、全域において中世の遺物の出土が報告されていることから、新たに集落および生産域が発見される可能性は高い。

第2節 既往の調査成果

大阪府教育委員会による確認調査 次に、調査地を含む近接地においてこれまでに実施された調査成果について述べる。平成14・15年に、本調査に先立って実施された確認調査では、事業予定地内に13カ所のトレンチを開削し、数枚の遺構面が確認されている。この調査により、平安時代以後の中世遺物は事業対象地のほぼ全域に確認できること、大県郡条里遺跡内では石器、縄文土器、弥生土器が採取されたことから、縄文時代晚期～弥生時代前期の遺構が存在する可能性が示された。また、山ノ井遺跡内では、中世の溝や土坑などの遺構が顕著であるとともに、須恵器、土師器、瓦器、瓦などの遺物が集中することから、屋敷地の存在が推測された。

大県郡条里遺跡（その1）調査 （その1）調査では、包含層は計14層とこれに対応する遺構面が報告されている。第1層・第2層は近世～近代の耕作土で、顕著な遺構面としては、第3面（中世末期水田）、第4面（中世後期水田）、第10面（平安時代水田）、第12a面（古代？）、第12b面（縄文時代晩期末～古墳時代集落縁辺部）が報告されている。また第14層は縄文時代後期の河川堆積であることが報告されている。

出土遺物としては、中世包含層からは土師器や瓦器が、古代包含層からは須恵器、土師器、黒色土器のほか、鉄製鎌、砥石等が出土したことが報告されている。須恵器の中には墨書き土器が含まれており、特に、「博」の字を記した須恵器の杯蓋は、人名または官位名を記したものとして注目される。

また、縄文時代の河川から出土した植物遺体について放射性炭素年代測定を行い、縄文時代晩期後期末～晩期中葉までの年代が得られている。この年代値は、出土土器の年代観とも調和的であり、旧大和川の動態と当該地域の古環境復元を行う上で、有用な情報となるものである。

【参考文献】

大阪府教育委員会 2005 『大県郡条里遺跡確認調査概要－恩智川（法善寺）多目的遊水地予定地の調査－』

第3章 調査成果

第1節 基本層序

今回の調査では、縄文時代後期から中世末期までの計12層を確認した（図4参照）。また、これに伴う遺構面を計10面検出した。以下、先述した（その1）調査時において確認された層序との対応とともに、各層の特徴を記述する（図5）。

第0層（近世以後） 今回の調査では、現地表面より人力掘削までの堆積層（現代の整地土、近世から近代の耕作土、氾濫堆積層、島畠の盛土、攪乱等）を重機によって除去した。下位は主に氾濫堆積層で、随所に軟弱なシルトを介在させる。近世陶磁器類のほか、土師器、須恵器、瓦器などの下層より巻き上げられた遺物を含む。（その1）調査において報告された、第1層、第2層に相当する。

第1層（中世後期以降） 第1-1層・第1-2層の2層に分けられる。第1-1層はオリーブ黒色から灰色粘土質シルトを主体とし、随所に灰オリーブ色微砂ブロックを含む。上面はシルトから粗砂の氾濫堆積層と近世耕作土に覆われており、軟質で剥離しやすい。踏込みや流水による擾乱を受ける箇所が多いため、砂の混入が顕著である。植物遺体（木片）やカルシウム塊、炭化物の混入も多い。

層内からは、土師器、須恵器、瓦器、瓦質土器、陶磁器、瓦のほか、砥石、金属製品、漆器椀等が出土した。中世後期以降に形成された耕作土と考えられる。第1-2層は灰色微砂混じりシルトから細砂の氾濫堆積層である。第1層は（その1）調査において報告された第3層に相当する。

第2層（中世後期） オリーブ黒色微砂混じり粘土～粘土質シルトを主体とする。上面は第1-2層の氾濫堆積層に覆われており、上面からの踏込みが残る。その傾向は調査区南部において顕著である。調査区北半部では、白色砂礫の混入が認められる。上層に比べてしまりが良い。層の下位は暗色味が強く、炭化物を多く含む傾向にある。

層内からは、土師器、須恵器、土師質土器、瓦器、陶磁器のほか、木製部材や漆器椀、鉄製の馬鍐の歯などの金属器が出土した。中世後期に形成された耕作土層である。（その1）調査において報告された第4層に対応する。

第3層（中世中期） 第3-1層・第3-2層の2層に分けられる。第3-1層はオリーブ黒色から暗オリーブ灰色微砂混じり粘土や暗緑灰色微砂混じり粘土質シルトで構成されており、上層に比べてやや緑味の強い粘土質シルトを主体とする。カルシウム塊を多く含む点に特徴がある。上層に比べてしまりが良い。調査区南部では、灰色微砂からシルトや細砂混じりシルトブロックが混在する。

層内からは、土師器、須恵器、土師質土器、瓦器、瓦質土器、陶磁器類のほか、砥石、金属製品、木製曲物・下駄等が出土した。中世中期に形成された耕作土層である。第3-2層は灰オリーブ色微砂にオリーブ黒色微砂混じり粘土ブロックが入る氾濫堆積層である。調査区南半の一部に残存する。第3層は（その1）調査において報告された第5層に相当する。

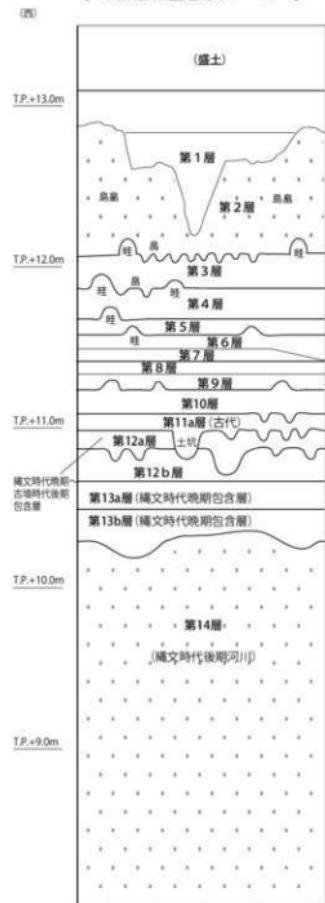
第4層（中世前期） オリーブ黒色微砂混じり粘土質シルトを主体とし、上下層に比べて黒色味が強い。下位は地震のため下層とマーブル状に混交する。部分的に径0.2cm未満の礫を少量含む。調査区南半の一部では、灰オリーブ色微砂の氾濫堆積層に覆われる。

層内からは、土師器、須恵器、黑色土器、瓦器、製塙土器、磁器、瓦のほか、鍬の刃先とみられる金

属製品が出土した。中世前期に形成された耕作土層と認識される。(その1)調査において報告された第6層・第7層に対応する。(その1)調査での第7層に該当する層は、(その2)調査においては砂層を僅かに確認したが、分別が困難であることから、同一層として認識した。

第5層(中世前期) 灰色微砂混じりシルトを主体とし、堆積の厚い北東半部では、上下層に細分できる。総じて上層は砂質でしまりが悪く、下層は粘性が強い。ただし、北端中央一部の最下層には微砂から細砂の氾濫堆積層がある。その一部には下層ブロックの巻き上げが認められる。層内からは、土師器、須恵器、土師質土器、黒色土器、瓦器、砥石、金属器、木製下駄等が出土した。平安時代から中世

【 大県郡条里遺跡(11-1) 】



【 大県郡条里遺跡(12-1) 】

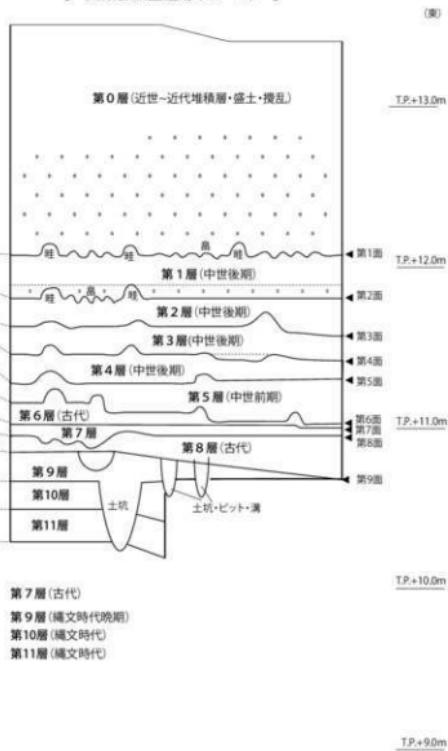


図4 基本層序模式図

【東西方向壁断面 X=155,260 m ライン】

- 1) 2.5Y4/1 オリーブ灰 シルト質細砂 ブロック 2.5YS/2 咬嘴 黄 希 リット質細砂 ブロック 2% 程度入る 少いラミナ・複数堆積層あり（第0層）
 - 2) 7.5Y4/1 黑 粗砂混じり粘土質シルト 2.5YS/4 黄褐 粗砂～粗砂ブロック 30% 程度入る 径 0.5 cm未満の礫少量入る（第0層 槌作土）
 - 3) 5Y4/1 黑 粗砂混じり粘土質シルト 10Y4/1 堀灰 粗砂ブロック 30% 程度入る やや軟質、少し硬い（第0層 槌作土）
 - 4) 2.5GY3/1 黑 地オーリーブ灰 微砂混じりシルト 2.5GY4/1 堀オーリーブ灰 粗砂ブロック 20% 程度入る しまり悪い 軟質（第0層 槌作土）
 - 5) 2.5YS/1-1/3 黄灰 細砂 2.5Y4/1 黄灰 希 リット质状に入る 径 0.5 cm未満の礫少量入る（第0層 島島）
 - 6) 2.5Y7/1-1/6 黑白ヘニ・ぶい黄 粗砂～粗砂 径 0.5 cm未満の礫少量入る（第0層 島島）
 - 7) 7.5Y3/2 オリーブ灰 細砂混じり粘土質シルト 2.5YS/3 黄褐 微砂ブロック 1% 程度入る 軟質、しまり悪い（第0層 槌作土）
 - 8) 2.5Y6/2 黑灰 細砂～粗砂 径 0.5 cm未満の礫少量入る しまり悪い（第0層）
 - 9) 5Y4/1 黑 粗砂混じり粘土質シルト 10Y5/6 黄褐 粗砂～粗砂ブロック 40% 程度入る 上層からの踏込・複数堆積層（第0層 槌作土）
 - 10) 10Y5/6 黄褐 地オーリーブ灰 5Y4/2 黑オーリーブ灰 黃灰 2.5YS/1 黑 粗砂の互層 希 ラミナを形成 しまり悪い（第0層 槌作土）
 - 11) 2.5YS/1-1/4 黄灰～黄褐 細砂～粗砂 下位粘土ブロック 10% 程度入る 哺 うらを形成 しまり悪い（第0層 島島堆積層）
 - 12) 7.5Y4/1-1/5 黑 粗砂混じる互層 7.5Y6/1 黑 粗砂下位に陥入 ラミナを形成（第0層 島島堆積層）
 - 13) 5Y3/2 オリーブ灰 シルトと 5Y4/1 黑オーリーブ 粗砂の互層 軟質 しまり悪い ラミナを形成（第0層 島島堆積層）
 - 14) 7.5Y4/1 黑 粗砂混じり粘土質シルト 基礎下位に陥入 ややしまり悪い（第1-1 層 槌作土）
 - 15) 7.5Y5/1 黑 粗砂混じりシルト～微砂 ラミナを形成 軟質 しまり悪い（第1-1 層 槌作土）
 - 16) 10Y3/1 オリーブ灰 微砂混じり粘土～粘土質シルト 軟質 ややしまり悪い（第2 层 槌作土）
 - 17) 5Y3/1 オリーブ灰 微砂混じり粘土質シルト 脱分沈着 はぼはぼ質（第2 层 槌作土）
 - 18) 2.5GY3/1 黑 地オーリーブ灰 微砂混じり粘土 上位にカルシウム塊入る やや軟質 しまり悪い（第3-1 層 槌作土）
 - 19) 7.5Y3/1 オリーブ灰 地オーリーブ灰 微砂混じり粘土質シルト 5Y4/1 黑 粗砂ブロック 20% 程度入る 径 0.2 cm未満の礫少量入る（第4 层 槌作土）
 - 20) 7.5Y3/1 オリーブ灰 粘土質シルト 7.5Y4/1 黑 微砂混じりシルトブロック 40% 程度マーブル状に入る 径 0.2 cm未満の礫微量入る 脱分沈着（造構埋土）
 - 21) 5Y4/1 黑 微砂混じりシルト 5Y5/2 地オーリーブ灰 粗砂ブロック 10% 程度入る 脱分沈着 上位に礫乱れあり やしりしまり悪い（第5 层 槌作土）
 - 22) 5Y4/1 黑 微砂混じりシルト 5Y5/3 地オーリーブ 粗砂ブロック下位に 30% 程度入る 脱分沈着（第5 层 槌作土）
 - 23) 5Y5/3 黑 オリーブ灰 地オーリーブ灰（第5 层 槌作土）
 - 24) 7.5Y4/1 黑 粗砂混じり粘土質シルト 5Y6/3 オリーブ灰 微砂ブロック 20% 程度入る 径 0.2 cm未満の礫、マンガニ酸微量入る 脱分沈着 上位から の結晶層（第6 层 槌作土）
 - 25) 5G4/1 黑 粗砂混じり粘土質シルト 5Y3 cm未満の角礁疊少量入る マンガニ酸入る 脱分沈着 やや軟質 しまりいや悪（第7 层 槌作土）
 - 26) 2.5GY3/1 黑 地オーリーブ灰 粘土質シルト 5GY5/1 オリーブ灰 粘土ブロック 1% 程度入る 径 0.3 cm未満の白色角礁、炭化物微量入る 軟質 しまりや悪い（第8-1 层）
 - 27) 7.5Y3/1 オリーブ灰 地オーリーブ灰 微砂混じり粘土質シルト 7.5Y4/1 黑 粗砂ブロック 10% 程度入る 径 0.2 cm未満の礫少量入る 软質（12.5t）
 - 28) 2.5GY3/1 地オーリーブ灰 微砂混じり粘土質シルト 2.5GY5/1 オリーブ灰 黑土ブロック 30% 程度入る 軟質（15 层）
 - 29) 10Y3/1 オリーブ灰 微砂混じり粘土質シルト 10Y5/2 オリーブ灰 微砂ブロック 10% 程度入る 径 0.2 cm未満の礫少量入る 黏土（33 层）
 - 30) 5GY4/1 黑 地オーリーブ灰 黒土 5GY5/1 オリーブ灰 粘土ブロック 30% 程度入る 軟質（20 层）
 - 31) 5GY3/1 黑 オリーブ灰 黑土と 7.5YS/1 黑 微砂混じりシルトブロックの互層（32 层）
 - 32) 2.5GY3/1 地オーリーブ灰 黑土シルト 2.5GY5/1 オリーブ灰 黑土ブロック 10% 程度入る 塵化物微量入る やや軟質（30 层）
 - 33) 2.5GY3/1 地オーリーブ灰 微砂混じり粘土質シルト 2.5GY5/1 オリーブ灰 微砂混じりシルトブロック 10% 程度入る 径 0.2 cm未満の礫微量入る 塘化物微量入る やや軟質（40 层）
 - 34) 7.5Y2/2 オリーブ灰 微砂混じり粘土質シルトブロックと 10Y4/1 黑 微砂混じり粘土質シルトブロックの互層 織かい炭化物少量入る 脱分沈着 やや軟質（54 土層）
 - 35) 2.5GY4/1 地オーリーブ灰 粘土質シルト 5Y3/2 オリーブ灰 黑土ブロック 20% 程度入る 径 0.2 cm未満の礫少量入る 炭化物少量入（43 层）
 - 36) 7.5GY4/1 黑 地オーリーブ灰 黑土シルト 2.5GY3/1 黑 地オーリーブ灰 黑土質シルト 30% 程度マーブル状に入る 黏土分沈着 地オーリーブ灰 微砂ブロック 20% 程度入る 脱分沈着 混化物顯著入る 軟質（46 层）
 - 37) 10Y2/1 黑 微砂混じり粘土質シルト 10Y4/2 オリーブ灰 微砂ブロック 5% 程度入る 10Y4/1 黑 地オーリーブ灰 粘土質シルト 10Y2/1 黑 シルトブロック 10% 程度入る 径 0.2 cm未満の礫少量入る しまりや悪い（第9 层）
 - 38) 10Y4/1 黑 微砂混じり粘土質シルト 10Y2/1 黑 黑土質シルトブロック 40% 程度入る 脱分沈着 やや軟質 ややしまる
 - 39) 7.5GY4/1 堀地緑灰 粘土質シルト 2.5GY3/1 堀オーリーブ灰 黑土質シルト 40% 程度マーブル状に入る 軟質 やしらまる（第9 层）
 - 40) 10Y5/1 黑 微砂混じり粘土質シルト 7.5GY4/1 堀灰 黑土質シルト 30% 程度入る 植物基盤・生産、死産あり やや軟質 しまり良い（第9 層）
- 【東西方向壁断面 X=155,340 m ライン】
- 1) 5Y4/2 黑 地オーリーブ 粗砂混じり粘土質シルト 5Y6/2 黑 地オーリーブ 微砂ブロック 20% 程度下位に入る 塵化物入る 脱分沈着 やや軟質（第1-1 层 槌作土）
 - 2) 7.5YS/1 黑 滅砂混じる粘土質シルト 7.5YS/2 黑 地オーリーブ 微砂マーブル状入る（第2 层 槌作土）
 - 3) 7.5Y3/2 オリーブ灰 微砂混じり粘土質シルト 7.5YS/2 黑 オリーブ灰 微砂ブロック 10% 程度入る 径 0.2 m未満の礫微量入る 脱分沈着 やや軟質 やしらり悪い（第2 层 槌作土）
 - 5) 5Y4/2 黑 地オーリーブ シルト 10Y3/1 オリーブ灰 黑土質シルトブロック 40% 程度入る 5Y4/3 黑 地オーリーブ 微砂混じり粘土質シルトブロック 40% と 7.5Y3/1 オリーブ灰 黑土質ブロック 10% の混合層 径 0.2 cm未満の礫少量入る 軟質 しまり悪い（404 层み）
 - 6) 2.5GY4/1 黑 地オーリーブ 粗砂混じり粘土質シルトブロック 40% と 7.5GY3/1 黑 地オーリーブ 黃褐色混じる粘土質シルトブロック 40% と 7.5Y3/1 オリーブ灰 黑土質ブロック 30% の混合層 徒然質 しまり悪い（404 层み）
 - 7) 2.5Y5/1 黑 堀地 畜糞混じり粘土質ブロック 40% と 10Y4/1 黑 地オーリーブ 粗砂混じり粘土質シルトブロック 30% と 7.5Y3/1 オリーブ灰 黑土質ブロック 10% の混合層 脱分沈着 やしらり悪い（404 层み）
 - 8) 10Y3/1 黑 オリーブ灰 微砂混じり粘土質シルトブロック 40% と 10Y4/1 黑 地オーリーブ 黃褐色混じる粘土質シルトブロック 40% と 7.5Y3/1 オリーブ灰 黑土質ブロック 30% の混合層 しまり悪い（404 层み）
 - 11) 7.5YS/1 黑 オリーブ灰 地オーリーブ 黃褐色混じり粘土質シルト 径 0.2 cm未満の礫微量入る やや軟質 しまる（第4 层 槌作土）
 - 12) 7.5YS/1 黑 オリーブ灰 地オーリーブ 黃褐色混じり粘土質シルト 径 0.2 cm未満の礫微量入る やや軟質 しまる（地盤構成土）
 - 13) 7.5Y4/1 黑 地 微砂混じりシルト 7.5Y4/2 黑 オリーブ灰 微砂ブロック 5% 程度入る 径 0.1 cm未満の礫少量入る 脱分沈着 しまり悪い（第5 层 槌作土）
 - 14) 7.5Y3/2 黑 オリーブ灰 地オーリーブ 黃褐色混じり粘土質シルト 径 0.1 cm未満の礫微量入る やや軟質 しまり悪い（第5 层 槌作土）
 - 15) 7.5Y4/1 黑 地 微砂混じりシルト 7.5Y3/2 オリーブ灰 黑 地 微砂混じり粘土質シルトブロック 5% 程度マーブル状に入る 径 0.2 cm未満の礫微量入る 上位より踏込あり やしらり悪い（第5 层 槌作土）
 - 16) 10Y4/1 黑 地 微砂混じりシルト 7.5Y4/1 黑 地 微砂混じりシルトブロック 40% 程度マーブル状に入る 径 0.2 cm未満の礫微量入る 脱分沈着（造構埋土）
 - 17) 10Y4/1 黑 地 微砂混じり粘土質シルト 10Y5/1 黑 地 黑土質ブロック 10% 程度入る 径 0.2 cm未満の礫少量入る 脱分沈着 しまり悪い（第5 层 槌作土）
 - 18) 10Y5/1 黑 地 微砂混じり粘土質シルト 10Y4/1 黑 地 黑土質シルトブロック 30% 程度マーブル状に入る やや軟質 しまり悪い（第5 层 槌作土）
 - 19) 7.5Y3/1 黑 オリーブ灰 相砂混じり粘土質シルト 7.5Y4/1 黑 地 微砂ブロック 10% 程度入る 径 0.2 cm未満の礫少量入る 脱分沈着 しまり悪い（第6 层 槌作土）
 - 20) 7.5Y2/1 黑 オリーブ灰 相砂混じり粘土質シルト 径 0.1 cm未満の礫微量入る 上位より踏込あり やしらり悪い（第6 层 槌作土）
 - 21) 7.5Y4/1-1/4 黑 地 黄褐色混じる粘土質シルト 径 0.2 cm未満の白色角礁少量入る やや軟質 やしらる（第6 层 槌作土）
 - 22) 10Y4/1 黑 地 微砂混じり粘土質シルト 径 0.2 cm未満の礫少量入る やや軟質 しまり悪い（第6 层 槌作土）
 - 23) 7.5GY4/1 黑 地 微砂混じり粘土質シルト 径 0.2 cm未満の礫少量入る 脱分沈着 やしらり悪い（第6 层 槌作土）
 - 24) 10Y2/1 黑 地 微砂混じり粘土質シルト 7.5Y4/2 黑 地オーリーブ 微砂ブロック 10% 程度入る 脱分沈着
 - 25) 2.5GY3/1 地オーリーブ灰 黑土質シルト 2.5GY4/1 黑 オリーブ灰 黑土質シルトブロックの互層（7 层）
 - 26) 2.5GY3/1 地オーリーブ灰 黑土質シルト 2.5GY4/1 黑 オリーブ灰 黑土質シルトブロック 10% 程度入る（第7 层 槌作土）
 - 27) 5GY3/1 黑 地オーリーブ灰 黑土質シルト 2.5GY4/1 黑 地オーリーブ 黑土質シルトブロック 30% 程度入る 径 0.2 cm未満の礫少量入る 黄褐色混じる炭化物少量入る やや軟質 やしらる（第7 层 槌作土）
 - 28) 7.5GY4/1 黑 地オーリーブ灰 黑土質シルト 2.5GY5/1 黑 地オーリーブ 黑土質シルトブロック 30% 程度入る 径 0.2 cm未満の白色角礁少量入る 黄褐色混じる炭化物少量入る やや軟質 やしらる（第7 层 槌作土）
 - 29) 5GY3/1 黑 地オーリーブ灰 黑土質シルト 2.5GY4/1 黑 地オーリーブ 黄褐色混じり粘土質シルト 2.5GY5/1 黑 地オーリーブ 黑土質シルトブロック 10% 程度入る 径 0.2 cm未満の礫少量入る 黄褐色混じる炭化物入る しまり悪い（第7 层 槌作土）
 - 30) 10Y4/1 黑 地 微砂混じり粘土質シルト 10Y2/1 黑 地 シルトブロック 10% 程度入る 径 0.2 cm未満の礫少量入る 上位に径 0.2 cm未満の礫少量入る 黄褐色混じる炭化物入る しまり悪い（第7 层 槌作土）
 - 31) 5GY3/1 黑 地オーリーブ灰 黄褐色混じり粘土質シルト 5GY4/1 黑 地オーリーブ 黑土質シルトブロック 10% 程度入る 径 0.1 cm未満の礫少量入る 黄褐色混じる炭化物入る しまり悪い（第7 层 槌作土）

- 32) 7.5Y4/1 黒 滅砂混じり粘土質シルト 7.5Y2/1 黒 粘土ブロック 30% 程度
入る 7.5Y5/2 黒 オリーブグ 磨砂ブロック 5% 程度入る 径 0.2 cm未満の白色
砂微量入る やや軟質 (第7層 種子土)
- 33) 7.5Y3/1 オリーブ灰 滅砂混じり粘土質シルト 7.5Y4/2 黒 オリーブグ 滅砂
ブロック 40% 程度微量入る (303箇)
- 34) 2.5GY3/1 噴オリーブ灰 粗砂混じり粘土質シルト 2.5GY5/1 オリーブ灰
滅砂混じりシルトブロック 10% 程度入る 径 0.2 cm未満の種少量入る 上位に
細砂の流入あり しまりやしまり悪い (第7層 種子土)
- 35) 10Y3/1 オリーブ灰 粘土質シルト 10Y4/1 黑 シルト 粘土質ブロック
30% 程度入る 径 0.1 cm未満の種少量入る 廉化物微量入る マンガん粒入
る やや軟質 ややしまる (第7層 種子土)
- 36) 10Y3/1 オリーブ灰 粘土質シルト 2.5Y3/1 黒褐 粘土質シルトブロック
30% 程度入る 10Y4/1 黑 磨砂ブロック 5% 程度入る 10Y2/1 黑 粘土
ブロック 5% 程度入る (第7層 種子土)
- 37) 5GY4/1 噴オリーブ灰 粗砂混じりシルト 5GY3/1 噴オリーブ灰 滅砂
シルトブロック入る 軟質 (105箇)
- 38) N4N/1 黑 滅砂混じり粘土質シルト 2.5GY3/1 噴オリーブ灰 黏土ブロック
30% 程度入る 径 0.2 cm未満の種微量入る (257箇)
- 39) SY2/1 黑 粗砂混じり粘土質シルト 2.5GY4/1 噴オリーブ灰 シルトブロ
ック 5% 程度入る 5GY4/1 噴オリーブ灰 黏土質シルトブロック 30% 程度
入る 径 0.2 cm未満の種少量入る やや軟質 ややしまる (第8 - 1層)
- 40) 2.5GY3/1 噴オリーブ灰 粗砂混じり粘土質シルト 7.5Y4/2 黒 オリーブ
シルトブロック 30% 程度入る 径 0.2 cm未満の種少量入る 廉化物入る
やや軟質 ややしまる (第8 - 1層)
- 41) 7.5GY3/1 明緑灰 粗砂混じり粘土質シルト 5GY4/1 噴オリーブ灰 シル
トブロック 30% 程度入る 径 0.2 cm未満の種少量入る 廉化物入る しまり悪
い (第8 - 1層)
- 42) SG3/1 噴オリーブ灰 粗砂混じり粘土質シルト 10Y4/2 オリーブ灰 シ
ルトブロック 40% 程度入る 径 0.2 cm未満の種微量入る やや軟質
(第8 - 1層)
- 43) 10Y3/1 オリーブ灰 粗砂混じり粘土質シルト 2.5GY4/1 噴オリーブ灰 滅
砂混じり粘土質シルトブロック 30% 程度入る 廉化物微量入る (第8 - 1層)
- 44) 7.5Y3/1 オリーブ灰 粗砂混じり粘土質シルト 10Y4/1 黑 粘土ブロック 30%
程度細かく入る 廉化物少量入る 軟質 (第8 - 1層)
- 45) 10Y4/1 黑 粘土質シルト 10Y3/1 オリーブ灰 粘土質シルトブロック
30% 程度入る しまりや悪い (第8 - 1層)
- 46) 7.5Y3/1 オリーブ灰 滅砂混じり粘土質シルト 7.5Y4/1 明緑灰 粘土質
シルトブロック 30% 程度入る 径 0.1 cm未満の種少量入る 軟質 ややしま
り悪い (第8 - 1層)
- 47) 2.5GY3/1 噴オリーブ灰 粗砂混じり粘土質シルト 径 0.2 cm未満の種多量
入る やや軟質 ややしまり悪い (第8 - 1層)
- 48) 7.5GY3/1 明緑灰 滅砂混じり粘土質シルト 7.5Y4/2 黒 オリーブ灰 滅砂
混じりシルトブロック 10% 程度入る 径 0.2 cm未満の種少量入る 廉化物微
量入る 軟質 ややしまり悪い (432箇数)
- 49) SG3/1 噴オリーブ灰 滅砂混じりシルト 7.5Y4/2 黒 オリーブ
シルトブロック 30% 程度入る 径 0.1 cm未満の種少量入る 軟質 ややしま
り悪い (第8 - 1層)
- 50) SG3/1 噴オリーブ灰 滅砂混じりシルト 7.5Y4/2 黒 オリーブ灰
シルトブロック 20% 程度入る 径 0.2 cm未満の種少量入る 軟質 ややしま
り悪い (第8 - 2層)
- 51) SG3/1 噴オリーブ灰 滅砂混じりシルト 7.5Y4/2 黒 オリーブ灰
シルトブロック 20% 程度入る 径 0.1 cm未満の種少量入る 軟質 ややしま
り悪い (第8 - 2層)
- 52) SG3/1 噴オリーブ灰 滅砂混じりシルト 7.5Y4/2 黒 オリーブ灰
シルトブロック 30% 程度入る 径 0.1 cm未満の種少量入る 軟質 や
やしまり悪い (第8 - 2層)
- 53) 7.5Y3/1 オリーブ灰 粗砂混じりシルトブロックと 7.5Y3/1 オリーブ灰
粗砂混じりシルトブロックの混合層 やや軟質 しまり悪い (523箇)
- 54) SG2/1 黑 粗砂 滅砂混じり粘土質シルト 5GY4/1 噴オリーブ灰 滅砂
ブロック 5% 程度入る 10Y2/1 黑 滅砂混じり粘土質シルトブロック 30%
程度入る 径 0.2 cm未満の種微量入る 廉化物多量入る (525箇)
- 55) SG3/1 噴オリーブ灰 粗砂混じり粘土質シルト 5GY4/1 噴オリーブ灰
粗砂混じりシルトブロック 20% 程度入る 径 0.1 cm未満の種微量入る 軟質
しまり悪い (432箇)
- 56) SG3/1 噴オリーブ灰 粗砂混じり粘土質シルト 10Y3/2 オリーブ灰
粗砂混じりシルトブロック 30% 程度入る 径 0.1 cm未満の種微量入る 軟質
しまり悪い (432箇)
- 57) SG3/1 噴オリーブ灰 粗砂混じり粘土質シルト 10Y3/2 オリーブ灰
粗砂混じりシルトブロック 30% 程度入る 径 0.2 cm未満の種多量入る 軟質
しまり悪い (432箇)
- 58) SG3/1 噴オリーブ灰 粗砂混じり粘土質シルト 7.5Y3/1 噴オリーブ灰
粗砂混じりシルトブロック 30% 程度入る 径 0.2 cm未満の種少量入る 軟質
しまり悪い (432箇)
- 59) 2.5GY3/1 噴オリーブ灰 滅砂混じり粘土質シルト 5GY2/1 噴オリーブ灰
シルトブロック 20% 程度入る 径 0.1 cm未満の種微量入る (第8 - 3層)
- 60) 7.5GY3/1 明緑灰 滅砂混じりシルト 7.5GY3/1 明緑灰 シルト→微砂
ブロック 30% 程度入る 廉化物微量入る 軟質 しまり悪い (540箇)
- 61) 7.5Y3/1 オリーブ灰 滅砂混じりシルトブロックと 7.5Y3/2 オリーブ灰
シルト→微砂ブロックの混合層 上位に粗砂の流入あり 軟質 しまり悪い
(432箇下層)
- 62) 7.5Y3/1 オリーブ灰 滅砂混じりシルトブロックと 5GY5/1 オリーブ灰
シルトブロックの混合層 径 0.1 cm未満の種少量入る 軟質 しまり悪い
(432箇下層)
- 63) 7.5Y3/1 オリーブ灰 滅砂混じりシルトブロックと 5GY5/1 オリーブ灰
シルトブロックと 7.5Y4/2 黒 オリーブグ 滅砂ブロックの混合層 軟質
しまり悪い (432箇下層)
- 64) 2.5GY3/1 噴オリーブ灰 滅砂混じり粘土質シルト 7.5Y4/1 オリーブ灰
粗砂混じりシルトブロック 40% 程度入る 径 0.1 cm未満の種上位に流入 廉
化物 ややしまり悪い (532箇)
- 65) 10Y3/1 オリーブ灰 滅砂混じり粘土質シルト 7.5Y4/2 黑 オリーブグ
シルト→微砂ブロック 20% 程度入る 径 0.1 cm未満の種微量入る 軟質 や
やしまり悪い (569箇)
- 66) 10Y3/1 オリーブ灰 滅砂混じり粘土質シルト 5GY3/1-6/1 オリーブ灰
粗砂混じりシルトブロック 40% 程度細かく入る 径 0.1 cm未満の種・廉化物
微量入る 軟質 ややしまり悪い (第8層)
- 67) 2.5GY3/1 噴オリーブ灰 粗砂混じり粘土質シルトに 7.5Y3/2 オリーブ灰
粗砂混じりシルトブロック 30% 程度入る 細かい土器片入る 軟質 しま
り悪い (569箇)
- 68) 10Y3/1 オリーブ灰 滅砂混じり粘土質シルト 5GY3/1 黒 オリーブグ
シルト→微砂ブロック 20% 程度入る 径 0.2 cm未満の種少量入る 廉化物少
量入る 軟質 ややしまり悪い (213箇)
- 69) 7.5Y4/1 黑 滅砂混じり粘土質シルト 7.5Y4/2 黑 オリーブグ 滅砂ブロ
ック 20% 程度入る 廉化物少量入る 軟質 ややしまり悪い (274箇)
- 70) 7.5Y3/1 黑 滅砂混じり粘土質シルトと 7.5Y4/2 黑 オリーブグ 滅砂ブロ
ックと 5GY4/1 噴オリーブ灰 滅砂混じりシルトブロックの混合層 しまり悪
い (274箇)
- 71) 7.5Y4/2 黑 オリーブグ 滅砂混じりシルト 7.5Y4/1 黑 シルトブロック 20%
程度入る シマリやしまり悪い (274箇)
- 72) 2.5GY3/1 噴オリーブ灰 滅砂混じり粘土質シルト 10Y4/2 オリーブ灰
粗砂混じり粘土質シルトブロック 30% 程度入る やや軟質 (429箇)
- 73) 5GY3/1 噴オリーブ灰 滅砂混じり粘土質シルト 10Y4/2 オリーブ灰
シルト→微砂ブロック 20% 程度入る やや軟質 (428箇)
- 74) 7.5Y3/1 オリーブ灰 滅砂混じりシルト 7.5Y3/1 黑 粘土ブロック 10%
程度入る 径 0.2 cm未満の種微量入る しまり悪い (225箇)
- 75) 7.5Y3/1 オリーブ灰 粘土質シルト 7.5Y5/3 黑 オリーブグ シルトブロ
ック 30% 程度入る (225箇)
- 76) 7.5Y3/1 オリーブ灰 粘土質シルト 7.5Y5/3 黑 オリーブグ シルトブロ
ック 30% 程度入る 径 0.1 cm未満の種微量入る しまり悪い (225箇)
- 77) 7.5Y3/1 黑 滅砂混じり粘土質シルトに 7.5Y3/2 黑 オリーブグ シルトブロ
ック 30% 程度入る (224箇)
- 78) 7.5Y3/1 黑 オリーブグ シルト 7.5Y4/1 黑 滅砂混じり粘土質シルトブロ
ック 40% 程度入る 廉化物少量入る やや軟質 (224箇)
- 79) 2.5GY3/1 噴オリーブ灰 滅砂混じり粘土質シルト 7.5Y4/2 黑 オリーブグ
シルトブロック 5% 程度入る 径 0.2 cm未満の白色縁多量入る 軟質 や
やしまり悪い (223箇)
- 80) 7.5Y3/1 オリーブグ 滅砂混じりシルト 10Y4/1 黑 滅砂ブロック 10%
程度入る 径 0.2 cm未満の種少量入る 廉化物少量入る 軟質 (234箇)
- 81) 10Y3/1 オリーブグ 滅砂混じり粘土質シルト 10Y5/1 黑 滅砂混じりシル
トブロック 20% 程度入る 軟質 しまり悪い (234箇)
- 82) 7.5GY3/1 黑 明緑灰 滅砂混じり粘土質シルト 7.5GY4/1 明緑灰 シルト→
微砂ブロック 20% 程度入る 径 0.2 cm未満の種少量入る 廉化物微量入る
しまり悪い (232箇)
- 83) 2.5GY3/1 噴オリーブ灰 滅砂混じり粘土質シルト 5GY4/1 噴オリーブ灰
シルト→微砂ブロック 5% 程度入る 径 0.2 cm未満の種微量入る 廉化物少
量入る (232箇)
- 84) 7.5GY3/1 明緑灰 滅砂混じり粘土質シルト 10Y4/2 オリーブグ 滅砂ブロ
ックと 5GY3/1 噴オリーブ灰 滅砂混じり粘土質シルト 10Y5/1 黑 滅砂混
じりシルトブロック 10% 程度入る 軟質 しまり悪い (322箇)
- 85) 7.5Y3/1 オリーブ灰 滅砂混じり粘土質シルト 7.5Y4/1 黑 シルトブロ
ック 10% 程度入る 10Y4/2 オリーブ灰 シルトブロック 5% 程度入る 径 0.1cm
未満の種微量入る (222箇)
- 86) 7.5Y3/1 オリーブ灰 粘土質シルト 7.5Y4/1 黑 シルト小ブロック 10%
程度入る 径 0.1 cm未満の種少量入る 廉化物量入る (222箇)
- 87) 7.5Y3/1 オリーブ灰 滅砂混じり粘土質シルト 7.5Y4/2 黑 オリーブグ
シルトブロック 10% 程度入る 軟質 しまり悪い (322箇)
- 88) 7.5GY3/1 明緑灰 滅砂混じり粘土質シルト 7.5GY4/1 明緑灰 シルト→
微砂ブロック 5% 程度入る 径 0.1 cm未満の種微量入る 廉化物微量入る や
やしまり悪い (201箇)
- 89) 7.5GY3/1 明緑灰 滅砂混じり粘土質シルト 10GY4/1 明緑灰 滅砂
シルトブロック 5% 程度入る 径 0.1 cm未満の種微量入る (222箇)
- 90) 2.5GY3/1 噴オリーブ灰 滅砂混じり粘土質シルト 7.5Y4/2 黑 オリーブグ
シルトブロック 30% 程度入る 軟質 しまり悪い 9番屋を母とする 振拌
堆積 (第9層)
- 91) 10Y4/1 黑 滅砂混じり粘土質シルト 10Y5/1 黑 滅砂ブロック 30% 程度
入る やらしまる (第9層)
- 92) 10Y4/1 噴オリーブ灰 滅砂混じりシルトブロックと 10Y3/1 オリーブ灰
シルトブロックの混合層 しまり悪い (ピット?)
- 93) 7.5Y4/1 黑 明緑灰 滅砂混じり粘土質シルト 7.5Y4/2 黑 オリーブグ
シルトブロック 10% 程度入る 径 0.1 cm未満の種微量入る 軟質 や
やしまり悪い (10番屋)
- 94) 7.5Y4/2 黑 オリーブグ 滅砂混じりシルト 7.5Y3/1 明緑灰 シルトブロ
ック 40% 程度入る 上位に径 0.2 cm未満の縁の流入あり 軟質 しまり悪い
(通積土?)
- 95) 7.5Y5/4/2 黑 オリーブグ 滅砂混じり粘土質シルト 10Y3/2 オリーブグ
シルトブロック 10% 程度入る しまり悪い (10番屋)
- 96) 7.5Y3/4/2 黑 オリーブグ 滅砂混じりシルト 7.5Y4/2 黑 オリーブグ
シルトブロック 30% 程度入る しまり悪い (10番屋)
- 97) 10Y5/1-4/1 黑 シルト→微砂 7.5Y4/2 黑 オリーブグ 滅砂ブロック 30%
程度入る 植物茎根の遮蔽物 兼乱石 しまり悪い (第11層)

前期に形成された耕作土層である。厳密に掘り分けられてはいないが上層には12世紀に帰属する遺物が集中し、下層にはそれ以前の遺物が目立つ傾向が認められる。（その1）調査において報告された第8層、第9層に相当する。

第6層（平安時代後期） 灰色微砂～粗砂混じり粘土質シルトを主体とする。軟質で粘性が強く、径0.2cm程度の白色砂礫を含む点に特徴がある。砂礫は、ごく一部に残存する氾濫堆積層である微砂から細砂を母材とし、これを巻き上げたものである。砂礫の混入程度がほぼ均質であることから、比較的長い期間、攪拌された耕作土であったと考えられる。層内からは、土師器、須恵器、黒色土器、瓦や、銅鏡、銅錢、銅製耳輪（もしくは指輪）、鉄製雁股鑑などの金属製品が出土した。須恵器、土師器には、墨痕や漆が付着したものが含まれている。平安時代後期に形成された耕作土層と考えられる。

（その1）調査において報告された第10層に対応する。

第7層（平安時代） 暗緑灰色細砂混じり粘土質シルト、暗オリーブ灰色粗砂混じり粘土質シルト、オリーブ灰色シルト、灰色微砂混じり粘土質シルトなどのブロック土が混合する層である。その多くに径0.2cm未満程度の白色砂礫を含んでいるが、上層である第6層ほど均質ではなく、攪拌の度合いが浅い。

層内からは、須恵器、土師器のほか、下層に帰属する弥生土器や縄文土器、サヌカイト製石鐵等が出土した。平安時代の耕作土として認識される。

なお、今回の調査に伴う自然科学分析（植物珪酸体分析）では、イネ科栽培の可能性が示されている（第4章第3節参照）。（その1）調査において報告された第11層に対応する。

第8層（奈良時代） オリーブ黒色粘土質シルトを主体とする暗赤帯で、土質から計3層に分層できる。第8-1層は、径0.2cm未満の砂礫を多く含む点に特徴があり、調査区南西部に広く堆積する。切り合ひ関係がある遺構のうち、比較的新しい遺構の埋土内にも認められる。第8-2層は、青みがかった黒色を呈しており、径0.1cm未満の白色礫をごく僅かに含む。第7層及び第8-1層の攪拌を免れた箇所のほか、遺構埋土の中に多く残る。第8-3層は、暗オリーブ灰色粘土質シルトと第9層の混合層である。人為的な痕跡は認められるが黒色味は薄い。遺構内埋土に認められる。（その1）調査において報告された第12a層に相当する。

縄文時代晩期末～弥生時代前期・古墳時代後期・古代の包含層であるが、場所により出土遺物の年代に偏りが見られる（東端部は弥生時代前期の土器、北半部は古墳時代後期の土器、調査区西辺では弥生時代後期の土器が多い傾向にある）。

第9層（縄文時代晩期） 暗緑灰色やオリーブ灰色、暗オリーブ灰色、灰色微砂混じり粘土質シルトを主体とする。上下層に比べてしまりが良く、やや硬質である。少量であるが縄文時代晩期の遺物を包含する。層内からは、縄文土器、石器の出土がある。（その1）調査の第13-1層に相当する。

第10層 灰オリーブ色、オリーブ灰色、暗オリーブ灰色微砂混じりシルトを主体とし、灰オリーブ色、暗オリーブ灰色微砂混じりシルトブロックを含む。第9層に比べて砂質でしまりが悪い。（その1）調査の第13-2a層に相当する。今回の調査では遺物の出土は確認できなかったが、（その1）調査のでは、縄文時代晩期前半に遡る土器の出土が報告されている。

第11層 灰色シルトから微砂を主体とする。軟質土壤で、灰色微砂が水平方向に筋状に入る。植物茎根の入り込みが顕著な自然堆積で、河川堆積の最上層と考えられる。今回の調査では調査区南西の一部においてのみ確認した。（その1）調査の第14a層に相当する。

第2節 遺構と遺物

第1面（図7・8、図版1・2-1・15-1） 第1面は、機械掘削層である第0層を除去して検出した遺構面である。第0層の下位は氾濫堆積層または島畠基部（砂層）であり、これらに覆われていたため、遺構面の残存状態は良好である。第1面では、畠の歛や歛間溝、南北方向の畦畔6条、東西方向の畦畔11条のほか、人や動物の足跡を多數検出した。畠の歛および歛間溝は南北方向を基軸とし、歛群は、10m前後の間隔で設けられた南北方向の主畦畔と、その間に設けられた東西方向の小畦畔によつて区画されている。畠面の標高差はなくほぼ平坦である。

調査区南半部の中央に近世の排水路跡があり、これが遺構面を抉り込むためその周辺にやや落ち込みが見られた。この排水路は調査区の南側に存在した旧恩智川へ注いでいたとみられることから、少なくとも第1面以後の段階では、調査区内の排水は北から南へ流されていたと考えられる。しかし第1面にはそのような施設や痕跡が認められなかった。

また、第1面以前には島畠が認められないことから、この地点では、第1面を覆う氾濫堆積層を用いてはじめて島畠が築かれたと考えられる。



図7 第1面 全体図

第1面からは、土師器皿(5~7・9)・椀(8)、瓦質擂鉢(10)、陶器碗(11・12)、砥石(14)、漆器椀(13)が出土している。これらの遺物の中で、陶磁器に関しては、中世末以降の遺物が含まれることから、第1面はその時期に属すと考えられる。

第1層出土遺物(図8、図版15-1) 第1面の下層の第1層からは、土師器皿(15・16)、瓦質擂鉢(17・18)、砥石(19・20)、木製品(21・22)が出土している。土師器皿の時期から、第1層は中世後期の16世紀頃に属すと考えられる。

第2面(図9・10、図版2-2・3-26-1) 第2面は、第1層を除去して検出した遺構面である。第1~2層の氾濫堆積層である微砂混じりシルトから細砂が残存する箇所を手がかりとして遺構面の検出を行った。この面では南北方向に通る主畦畔6条、東西方向の畦畔2条、島の畝間溝を検出した。

なお、調査区北半中央部では、主畦畔と小畦畔が交差する地点で杭列を検出した。

基軸となる南北方向の畦畔は第1面とほぼ同じ位置に存在し、畦畔間は10.5~11.0mを測る。調査区の北西部では、主畦畔に交差する形で東西方向にのびる小畦畔を検出したが、調査区東から南半部では上位からの搅拌により、その存在を確認することができなかった。調査区の西部では、南北方向の畝間溝が顕著に残っており、水田と島が同時に行われていたことを示している。

第2面からは、図化できる遺物は(図10-35)の棒状木製品が出土している。

第2層出土遺物(図10、図版15-2・26-1) 第2層からは、土師器皿(23~26)・羽釜(29~31)、瓦器椀(27・28)、須恵器こね鉢(32)、白磁皿(33)がある。他に、木製品(34~36)、金属製品(37・38)などがある。これらは、12~14世紀の遺物を主に含んでいるが、(31)の小形羽釜が15世紀に属することから第2層は、15世紀代の中世後期に相当すると考えられる。

第3面(図11・12、図版4・16・26) 第3面は、第2層を除去して検出した遺構面である。調査区の南西部と北東部において南北方向の畦畔4条を検出した。畦畔の盛土は搅拌によって失われているた

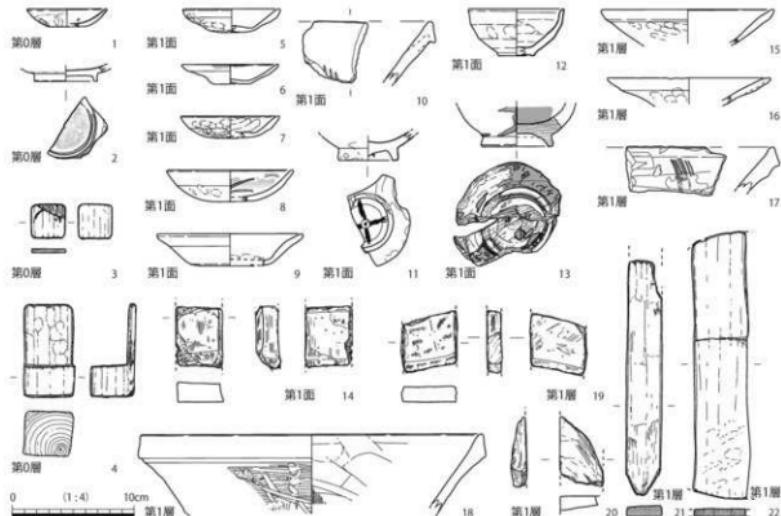


図8 第1面・第0層・第1層 出土遺物実測図

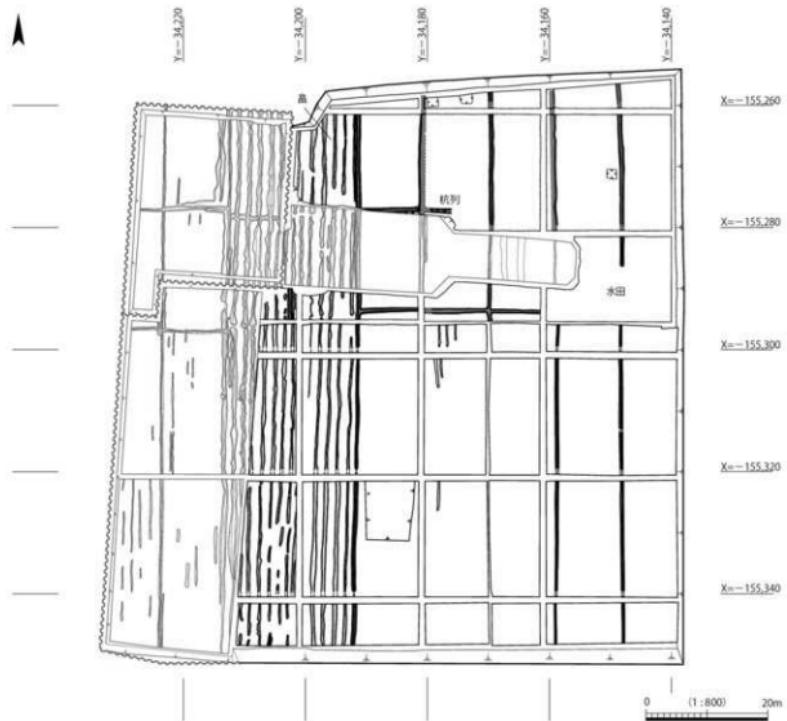


図9 第2面 全体図

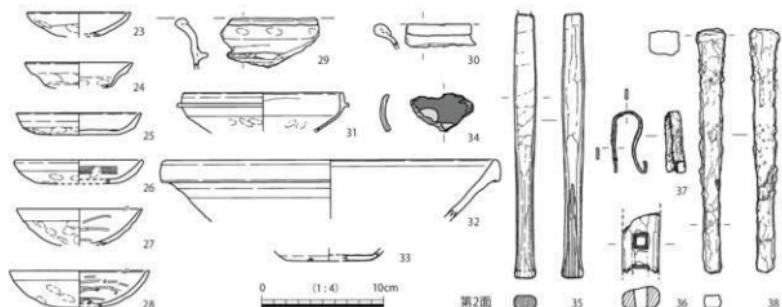


図10 第2面・第2層 出土遺物実測図

め、僅かに残る基部を手がかりとして検出した。

調査区南東端では、人為的な掘り込みを2箇所確認した（404・405土坑）。

畦畔の方向軸は、方位北に対して1~2度東に振り、畦畔間は11.0m前後を測る。水田面はほぼ平坦であった上位面に比べて、僅かであるが水田区画にあわせた高低差が認められる。畦畔の一部には、杭の打設が認められる。

404土坑（図11、図版4-4） 調査区南東隅において検出した土坑である。平面形状は橢円形の一角に似るが、調査区外へ続くため全体規模は不明である。南側で検出した405土坑に連続する可能性も考えられる。検出した規模は南北長5.7m、東西幅は1.95m、最大深度は0.9mを測る。断面形状は不定形であり、部分的に深く下がる箇所がある。

埋土はオリーブ黒色微砂混じり粘土質シルトブロックや微砂混じりシルトブロック、灰オリーブ色細砂ブロックなどのブロック土を多く含むことから、人為的に埋め戻されたことがわかる。遺構の機能及び性格は不明である。埋土から土師器皿、瓦器椀、須恵器提瓶の破片等が出土したが、小片のため、時期の確定に至らなかった。

405土坑（図11・12） 404土坑の南側において検出した遺構である。調査区外へ続くため、全体形

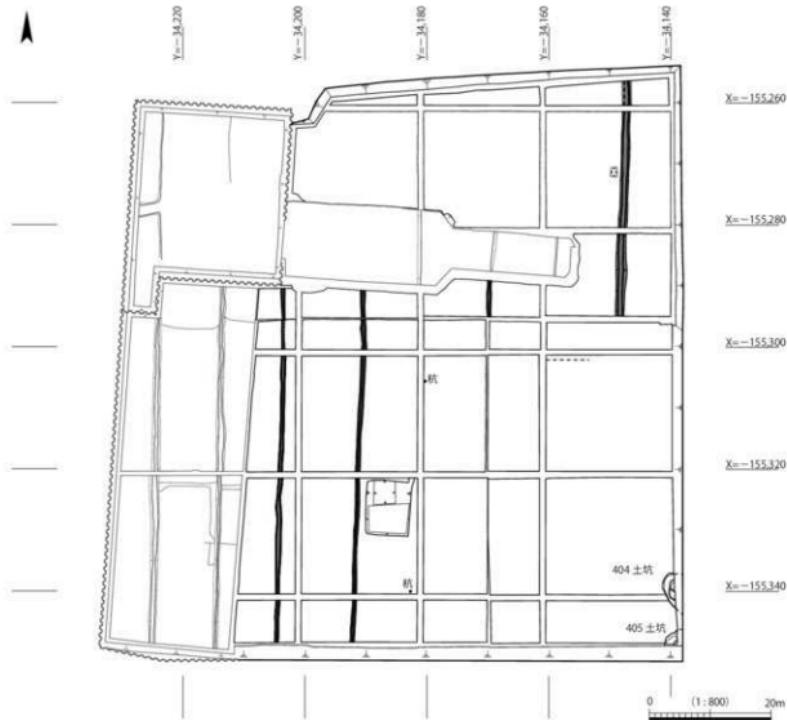


図11 第3面 全体図

状は不明である。検出した規模は南北長 2.4 m、東西幅 2.1 m、最大深度は 0.8 m を測る。断面形状は不定形で、壁面は潜り込むように削られている。

埋土は 404 土坑と同様に、灰色微砂混じり粘土質シルトブロックやオリーブ色微砂混じりシルトブロックなどのブロック土を多く含む。遺構の性格は不明である。

埋土から、土師器皿(図12-39)が出土した。

第3面からは、図12に示す、土師器皿(40・41・44)・椀(42)、瓦器椀(43・45・46)、瓦質羽釜(47)、

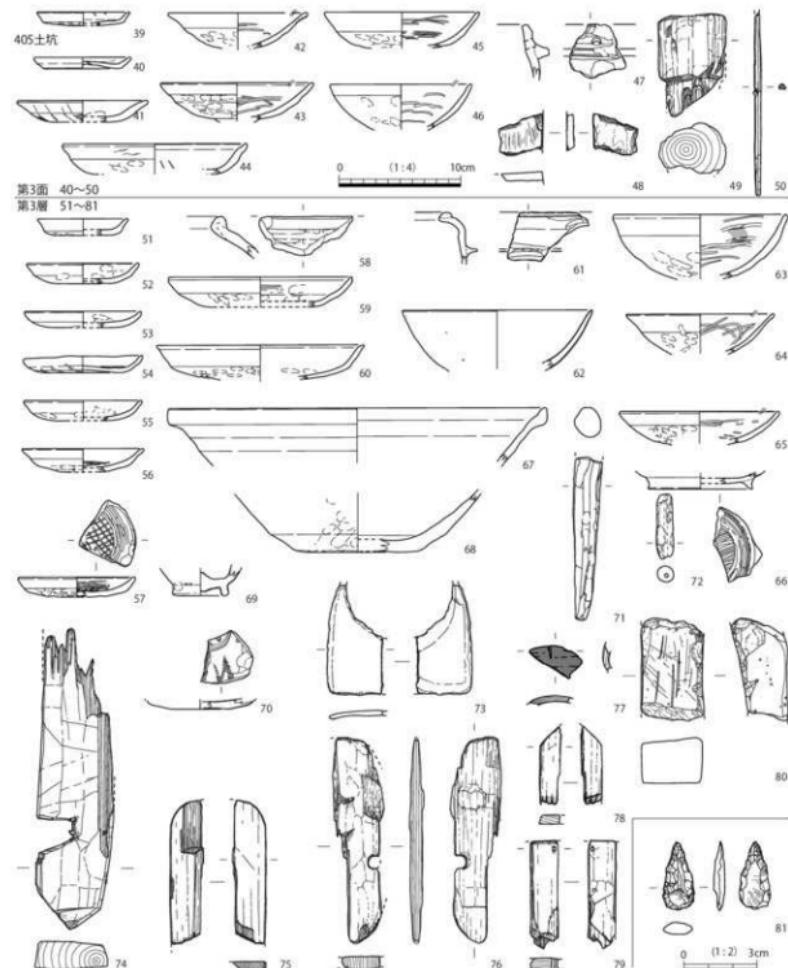


図 12 第3面・第3層 出土遺物実測図

砥石(48)、木製品(49・50)が出土している。瓦質羽釜の時期から、15世紀代に属すと思われる。

第3層出土遺物(図12、図版16) 第3層からは、土師器皿(51~55・59・60)・羽釜(58・61)、黒色土器椀(66)、瓦器皿(56・57)・椀(63~65)、瓦質羽釜(71)、須恵器こね鉢(67・68)、青磁碗(62)・壺(69)・皿(70)などが出土している。その他に、土錘(72)、砥石(80)・石鐵(81)、木製品(74~79)、金属製品(73)がある。

瓦器椀の小形化とヘラミガキの粗雑さから、第3層は14世紀代の中世後期に属すと考えられる。

第4面(第13・14図、図版5・17-1・25-2) 第4面は、第3層を除去して検出した遺構面である。調査区の南西部では、遺構面を覆うように第3-2層の氾濫堆積層である灰オリーブ色微砂の流入があり、上層との境が明確である。一方、調査区北半部では上層からの攪拌により、第3-2層は残存しない。

第4面では、南北方向に通る主畦畔6条と、これにほぼ直行する東西方向の小畦畔3条を検出した。また、調査区北東部において検出された東西方向の小畦畔は、壁断面の観察により、段差が認められたことにより水田区画を判別することができた。

畦畔の方向軸は、方位北である。水田面は僅かであるが東南部が高く、西に向かって徐々に下る。調

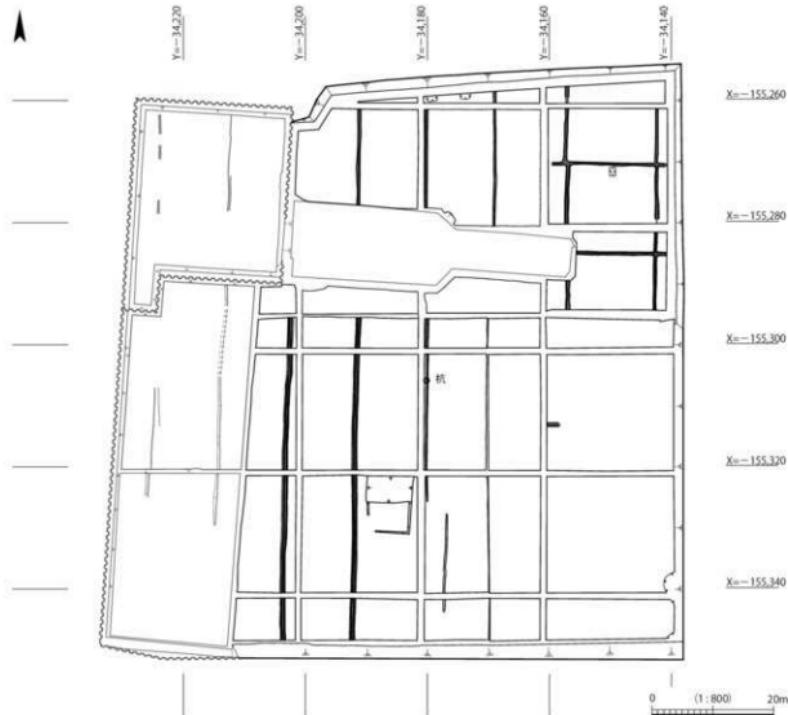


図13 第4面 全体図

査区の北壁では、主畦畔の延長線上に杭の打設が認められた。

第4面から出土した遺物は、図示できたものが瓦器椀(図14-99)1点のみであり、遺構面の時期を確定するのは困難である。

第4層出土遺物(図14、図版17・26-1) 第4層から出土した遺物で図化できたものには、土師器皿(85・87~91)、瓦器皿(82)・椀(92~98)、須恵器杯(86)、青磁碗(100)、製塙土器(83・84)などがある。他に、平瓦(102)、鍔の歯先(101)、刀子鞘(104)などがある。

以上の遺物は概して、13世紀後半までの遺物が含まれているが、瓦器椀に小型化・粗雑化しているもの(97)があり、14世紀代の中世後期に属すと考えられる。

第5面(図15・16、図版6・18・26-1) 第5面は、第4層を除去して検出した遺構面である。層境は擾乱を大きく受けしており、マーブル状に混じりあう箇所が多い。第5面では、南北方向に通る主畦畔6条、東西方向の畦畔4条、水田区画に伴う段、溝7条を検出した。

東西の畦畔間は11mを測る。調査区北東部の畦畔は、上位面とは異なる位置に存在する。その方向軸は細かく左右に乱れており、直線を成さない箇所がある。水田面の高低差は上位面に比べてさらに大きくなり、調査区北部では北へ向かって下がり、調査区南部では東から西へ下がるようになる。

溝(130~133溝・551~553溝)は、南北方向の畦畔間を並行にのびる。規模は幅0.4m程度、最大深度0.1m未溝を測る。埋土は灰色微砂混じりシルトを主体とし、わずかにラミナが形成される。これらの溝は調査区の北から南まで断続的に検出されること、また10~12mの間隔をもって規則的に配されていることから、水田への給排水等の機能を果たしたものと推測される。

第5面で図化できた遺物は、図16-105の瓦器皿が1点のみである。13世紀代のものであるが、これのみで所属時期を確定するのは困難であるが、概ね、中世前期と考えられる。

第5層出土遺物(図16、図版18・26-2) 第5層からは、土師器皿(図16-106~112・137~139)・

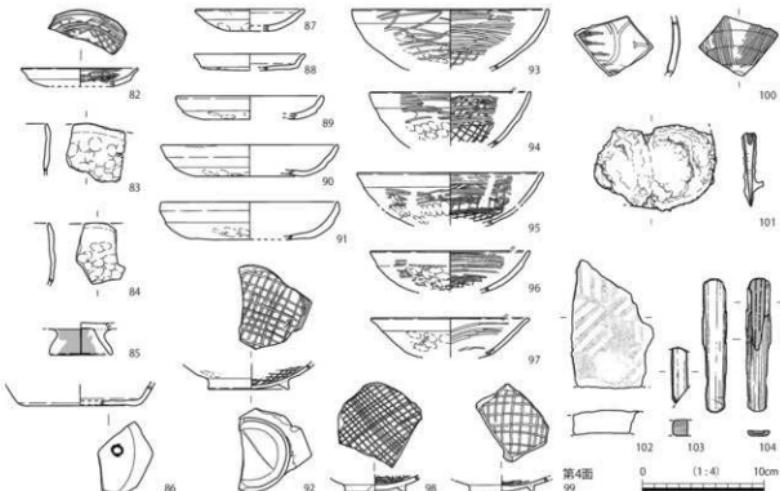


図14 第4面・第4層 出土遺物実測図

椀(127)・甕(119)・羽釜(134・135)・ミニチュア高杯(131)、瓦器皿(113~115)・椀(116・117・120~124・126・128・129・132)、黒色土器椀(125・130)、須恵器杯(133)・甕(140)、白磁碗(136)などがある。

他に、砥石(141)、金属製品(142・143・146)、木製品(144・145)などがある。

これらの遺物から、第5面の帰属時期は、12世紀代中頃の中世前期と考えられる。

なお、同図(112)の土師器皿は、完形で出土しているが、15世紀代のものであるため、混入と考えられる。さらに、(146)の飾り金具は側溝からの出土のため、出土層位が上方の可能性がある。

第6面(図17・18、図版7・8・20-2) 第6面は、第5層を除去して検出した遺構面である。遺構面の基盤層となる第6層は粗砂を含むことから、遺構面の検出は比較的容易である。第6面では、南北方向の畦畔9条、東西方向の畦畔21条を検出した。水田面は、調査区南東から北西方向へ緩やかに下傾斜し、さらに北東方向、南西方向へそれぞれ段階状に下がる傾向を見せる。また、畦畔に沿って拳大の置き石や杭の打設が確認された。

これらの畦畔には時期差があると考えられる。調査段階では、南北方向の畦畔間に広狭をもつ水田と認識したが、その後の精査により、図17に破線で示した畦畔が実線のものよりも共通して脆弱であるこ

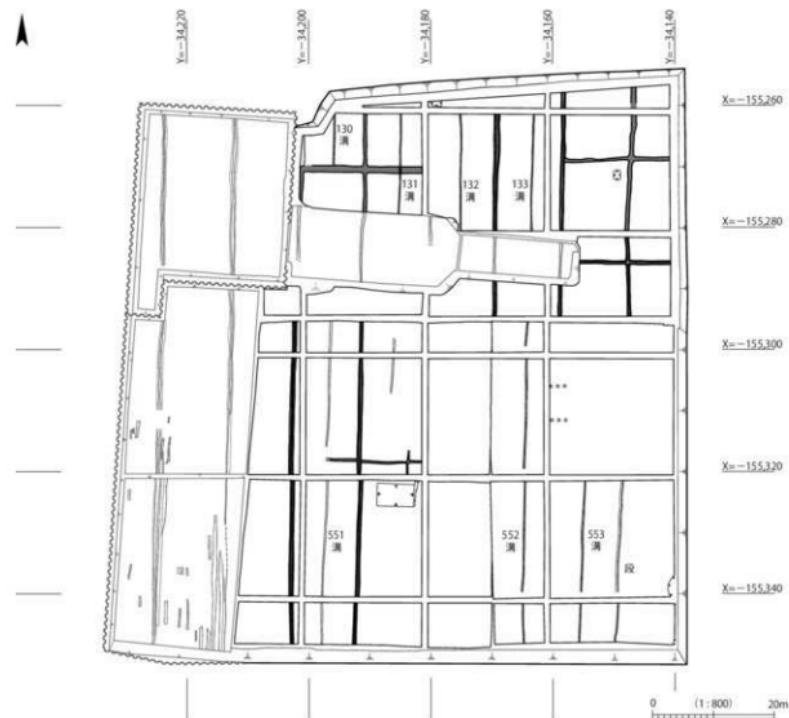


図15 第5面 全体図

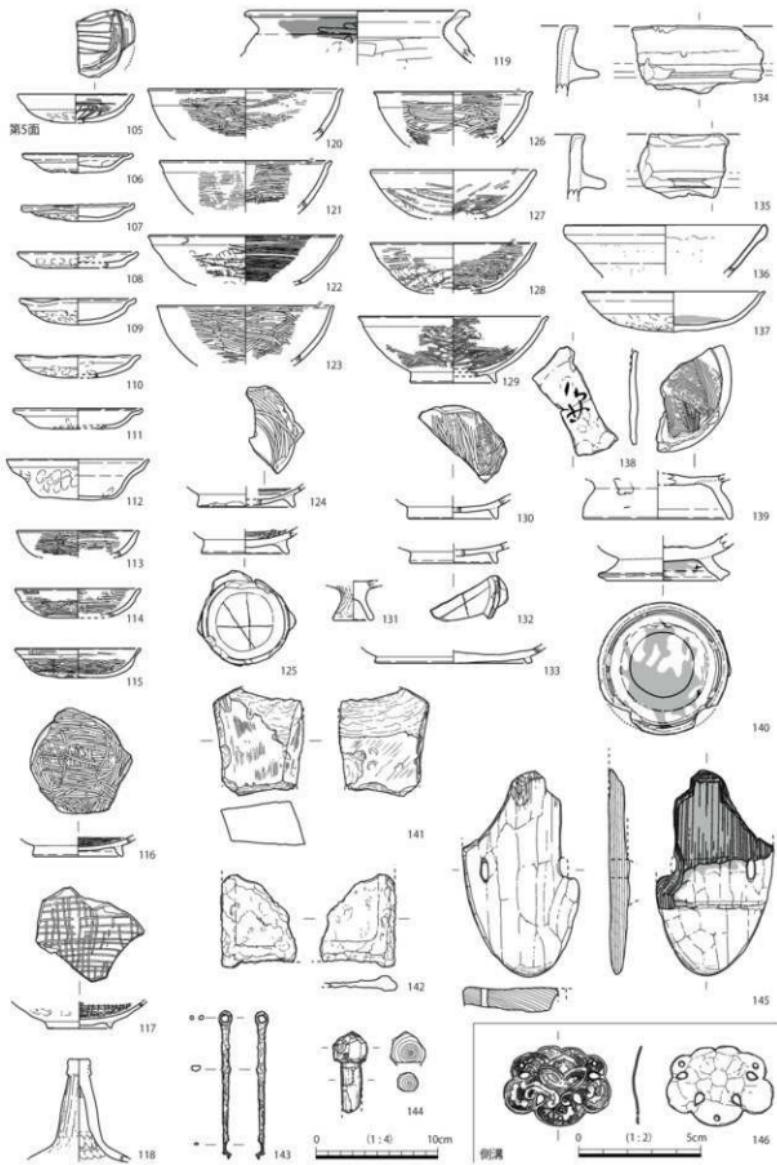


図16 第5面・第5層 出土遺物実測図

とが確認された。さらに、検出された水田を同一段階のものとするには畦畔間に広狭差がありすぎることと、東西畦畔との接続が不自然であることが認識された。遺構面の基盤層である第6層は搅拌が進む耕作土であり、その形成には長い時間がかかったものと推測される。このため、第6面の存続期間も長期に及んだ可能性が高いことから、第6面の畦畔群にも時期差があると考えられる。ただし、その新旧関係を明らかにはできていない。

第6面から出土した遺物は、図18-163の製塙土器が1点図化できたのみで、時期の詳細は不明である。

第6層出土遺物（図18、図版20・21・22-1） 第6層からは、須恵器壺（147・149～151・154・155・159）・壺（148・152・153・157・170）・甕（158）・長頸甕（161）・提瓶（160）・横瓶（162）などがあり、土師器皿（168・169）・环（176～179）・椀（181）・甕（165～167）・ミニチュア高环（172～175）・蓋（171）、黒色土器椀（180）などがある。他に、軒丸瓦（195）、製塙土器（164）や土鍤（193）、金属製品（194・196～199）などが出土している。さらに、古墳時代後期須恵器环蓋（182）・环身（188・189）・高环（192）、土師器甕（190・191）などがある。

特筆すべきものとして、(152)の須恵器壺Gがある。口縁端部を欠損するが、8世紀末から9世紀初

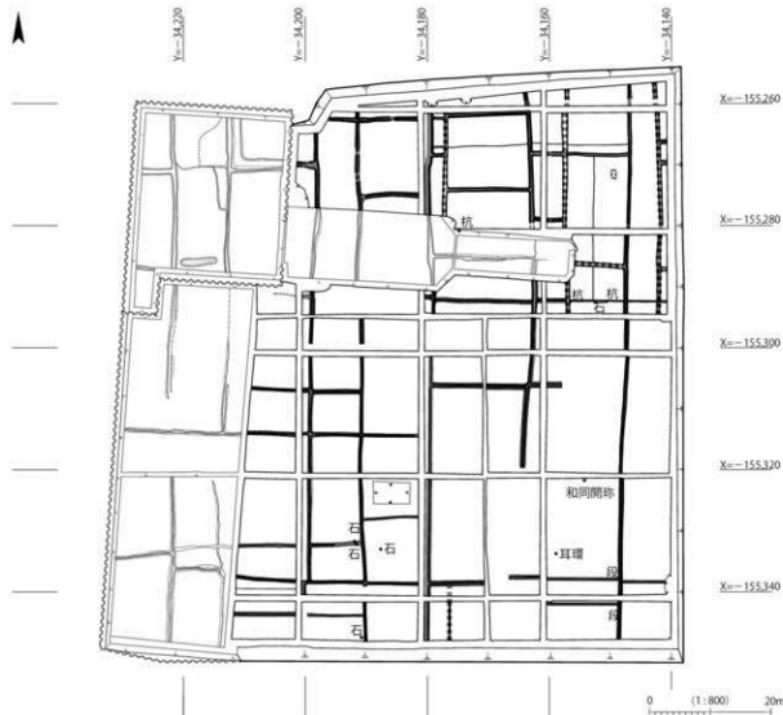


図17 第6面 全体図

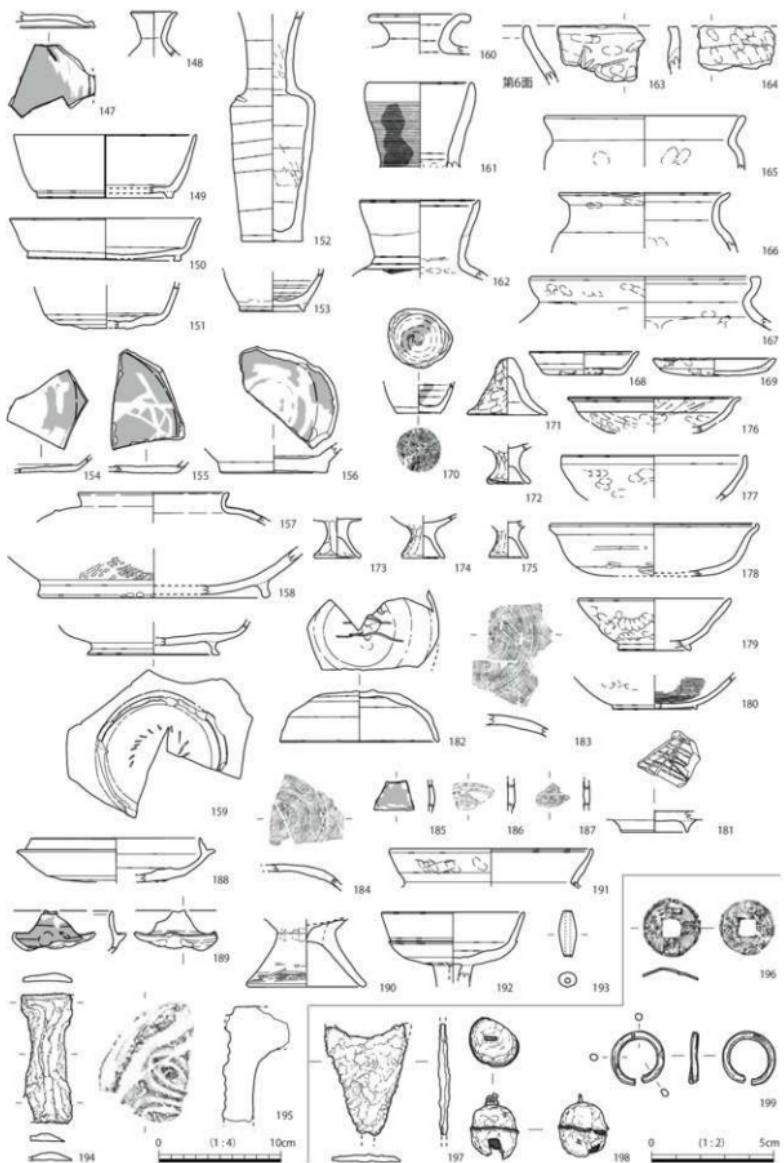


図 18 第6面・第6層 出土遺物実測図

頭に静岡県の花坂島橋窯と助宗窯で生産された長頸壺で、主に東海・関東で多く分布している。畿内では、平城・長岡・平安京の旧都から出土しており、「豎魚煮汁容器」として使用されたのではないかとされている。

第6層から出土した遺物は、平安時代の遺物が主に出土しており、中でも、(179)の土師器壺は10世紀末から11世紀初頭に属することから、平安時代後期と考えられる。

第7面 (図18・20、図版9・10-1・21-1・22-1・25-2) 第7面は、第6層を除去して検出した遺構面である。調査区南半部中央部では、下層の第8層に起伏があるため、すでに第8面の遺構である南東から北西方向の畦畔の一部が露出する。第7面では東西南北方向に組まれた水田畦畔を検出した。南北方向畦畔8条、東西方向畦畔8条、水田区画に伴う段を検出した。調査区南東端ではヒトの足跡が多数検出された。この足跡を覆う氾濫堆積層である粗砂は、第6層に含まれていた粗砂の母材と考えられる。水田面の高低差には上位面から変化は見られない。

調査区北半部の南北方向の畦畔は脆弱であるが、東西方向の畦畔は幅広に作られている。畦畔が検出できなかった箇所においても、その形骸は明確な段として残る。調査区南東部では、南北方向の畦畔が狭い間隔で設けられ、その間を東西方向の畦畔が段違い状に接続する様子が認められる。

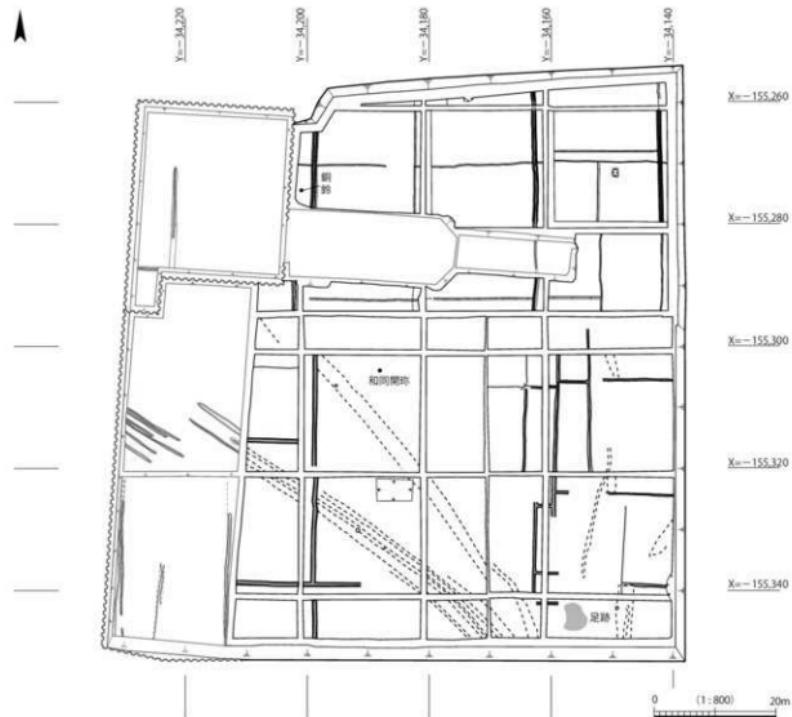


図19 第7面 全体図

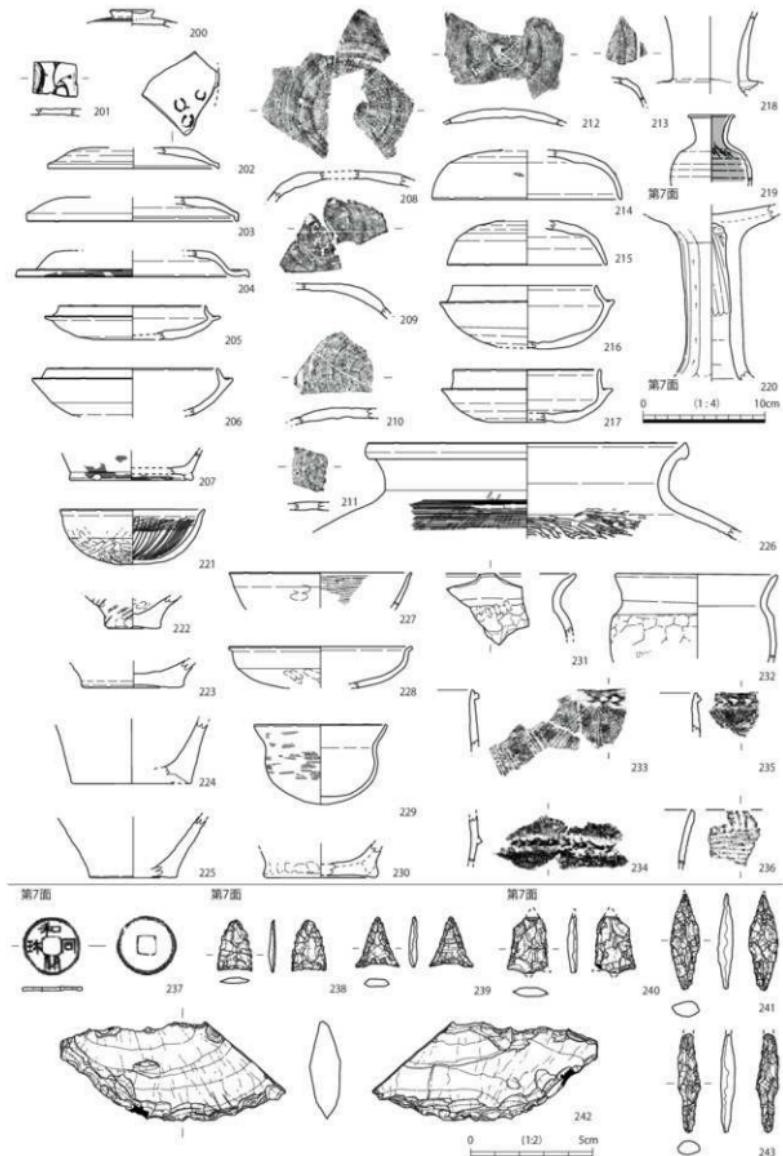


図20 第7面・第7層 出土遺物実測図

この第7面は、畦間の距離が一定ではないことから整備された条里水田とはいえないが、方位に沿った水田区画が敷かれた段階の水田といえる。

第7面からは、須恵器壺(図20-219)、土師器高坏(220)が出土しており、他に、銅銭「和同開珎」(237)や、石鏡(238・240)がある。少ない遺物で、時期は確とし難いが9世紀頃の平安時代前期と考えられる。

第7層出土遺物(図20、図版22-2・23-1・2、25-2) 第7層から出土した遺物には、須恵器壺蓋(200~204)・环身(207)・壺(226)・平瓶(218)、土師器皿(228)・壺(231・232)、黒色土器桙A類(227)などが出土している。(202)の天井部外面には、墨書で小円形を3個以上描いている。

他に、飛鳥時代の坏(221)、古墳時代後期の須恵器壺蓋(208~215)・环身(205・206)、古墳時代前期の土師器小型丸底壺(229)、弥生時代の壺(223)、甕(222・224・225・230)、縄文時代の深鉢(233~236)や、石鏡(239・241)・石錐(243)・剥片(242)などがある。

これらの遺物は、万遍なく混ざって出土していることから、この層が搅拌されていることがわかる。

以上の遺物から、この層の所属時期は、9世紀代の平安時代前期と考えられる。

第8面(図21~25、図版10・11・24-1・25-2) 第8面は、第7層を除去して検出した遺構面で

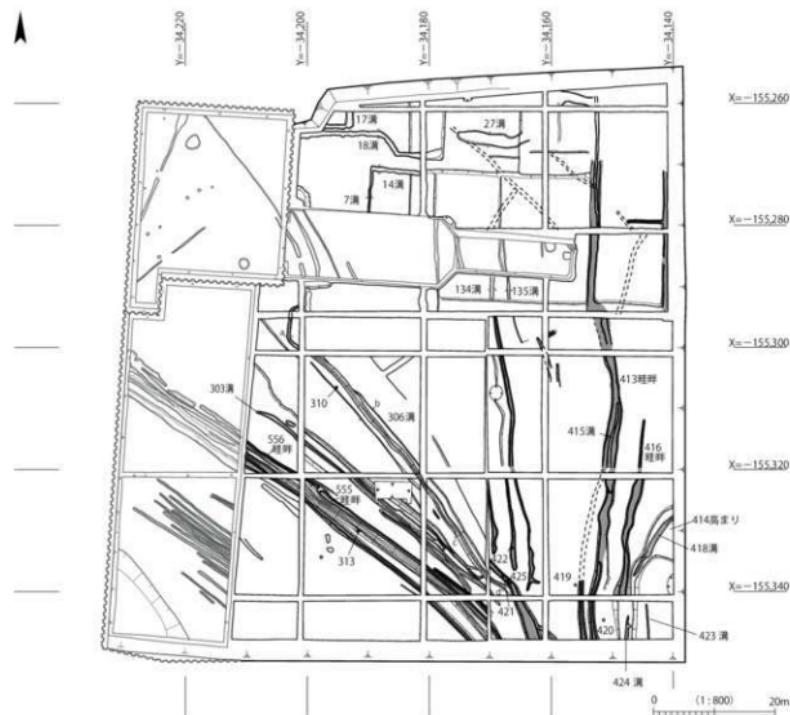


図21 第8面 全体図

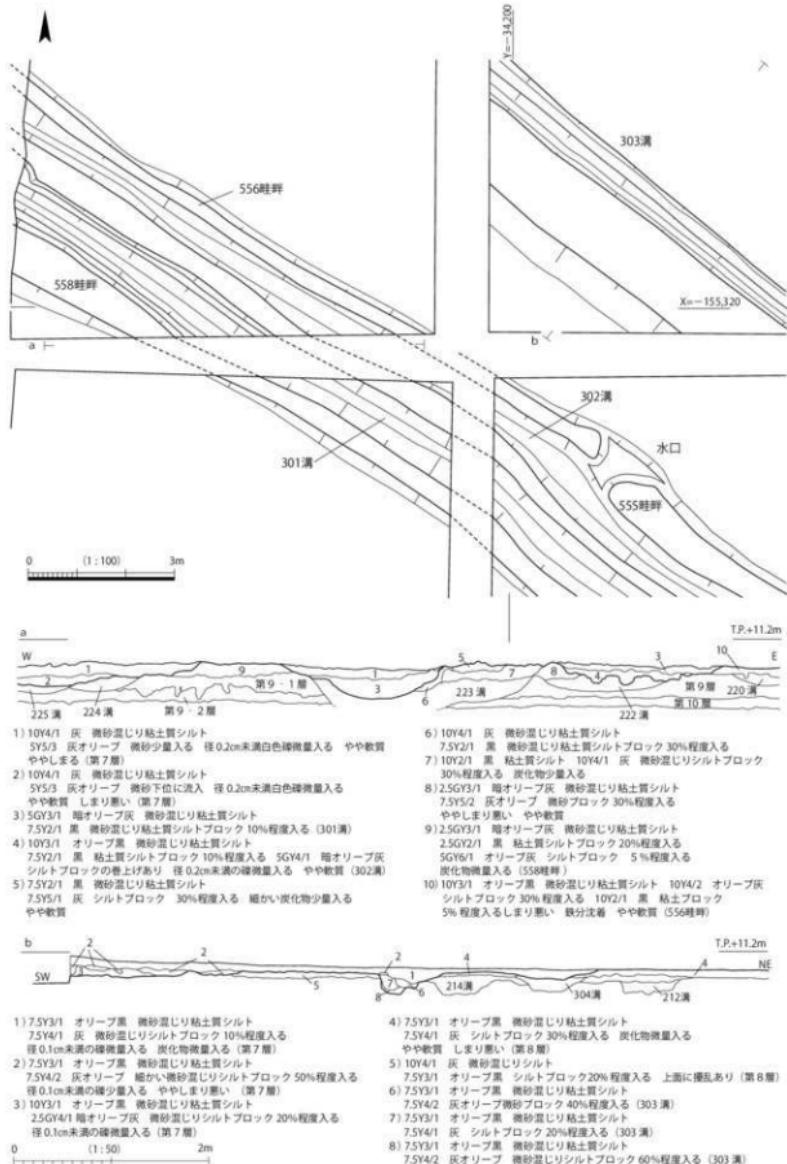


図22 第8面 遺構平面断面図(1)

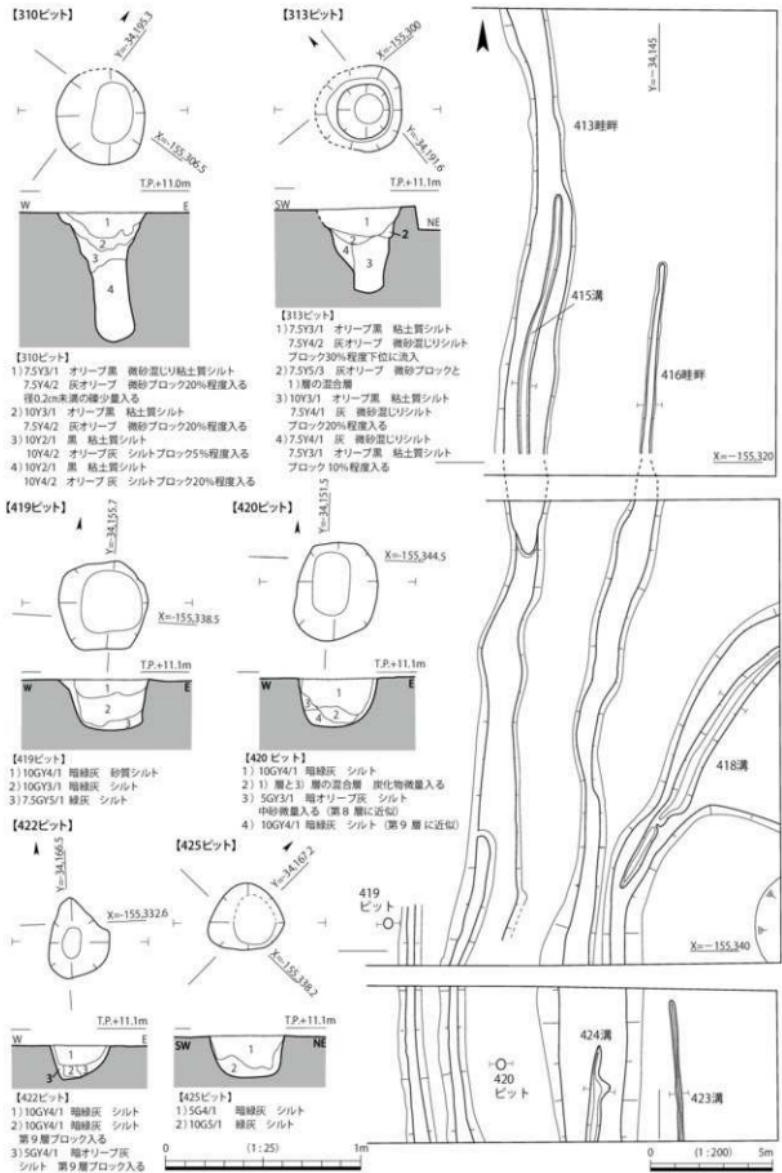


図23 第8面 遺構平面断面図(2)

ある。この面では畦畔9条、水田区画に伴う段、溝17条、ピット6基を検出した。水田面の高低差はさらに顕著となる。調査区南東部から北西にかけてのびる尾根状の高まりのほか、調査区の東端部を北へのびる高まりが存在し、微高地と低地が入り組む様相が認められる。

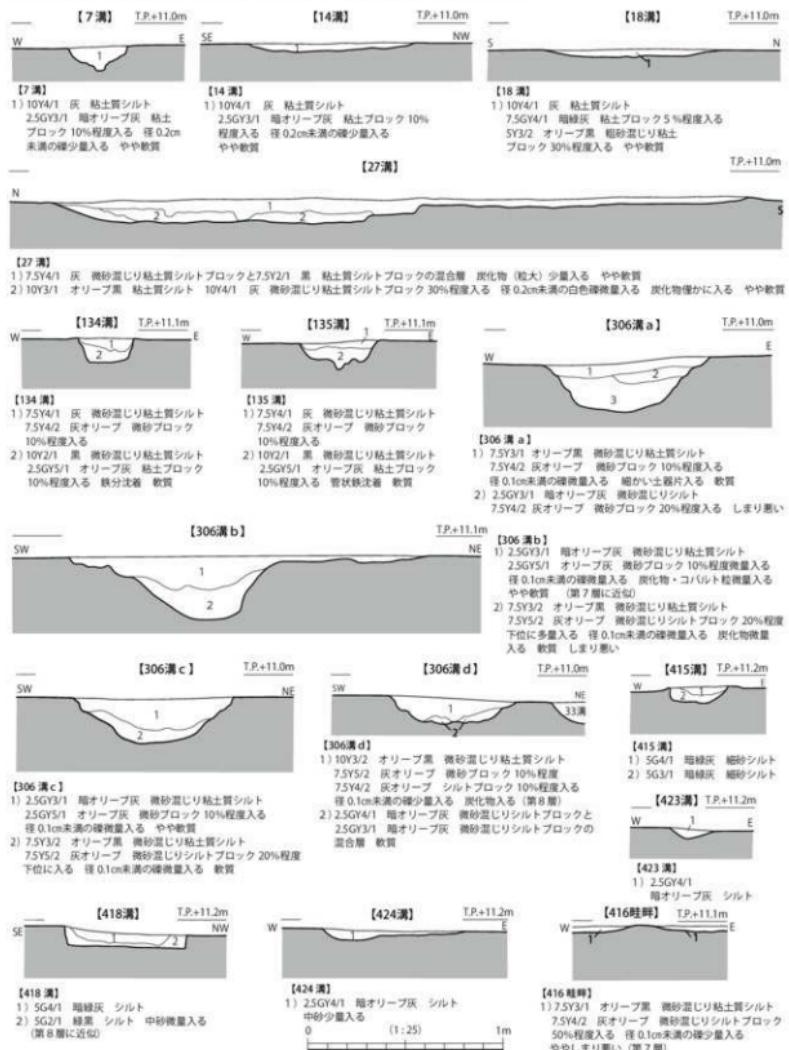


図24 第8面 遺構断面図

調査区北半では、東西南北方向の水田区画に伴う段、5条の溝を検出した（7溝・14溝・17溝・18溝・27溝）。これらの溝は屈曲あるいは湾曲するが、総じて東西に方向性を認めることができる。南半部では、南端中央から西端中央にかけての高まりに、その最頂部をたどるように設けられた2条の溝（486溝・487溝）や畦畔を検出した。このうち555畦畔では水口を確認した（図22）。南東部では、南北方向にのびる幅広の畦畔と南端から北東方向の高まり上に溝（418溝・424溝）を確認した（図23）。

この第8面は旧地形に沿った水田を經營しつつも、その後に続く方位に即した水田区画への移行を模索する段階にあったと考えられる。

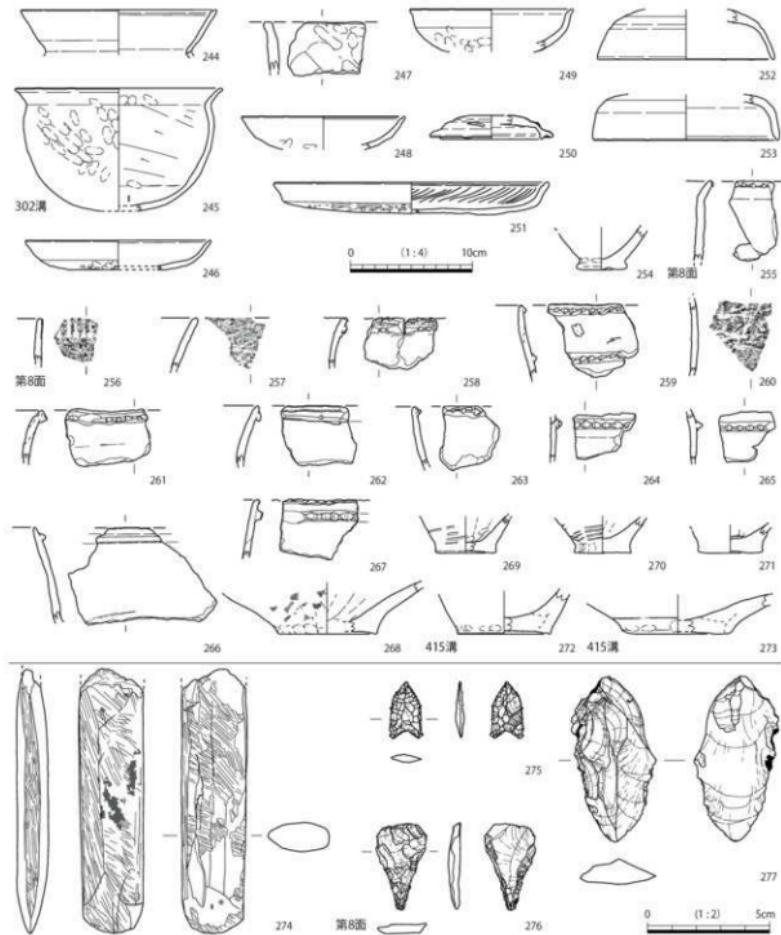


図25 第8面・第8層 出土遺物実測図

第8面の302溝からは図25-245の奈良時代から平安時代の土師器甕が出土し、415溝からは弥生時代前期の甕(272)や・壺(273)が出土している。また、第8面からは、弥生時代前期甕(255)、縄文時代中期深鉢(256)、弥生時代の石錐(276)などが出土している。

以上の遺物から、第8面の時期は、8世紀中頃以降の奈良～平安時代に相当すると考えられる。

第8層出土遺物(図25、図版23-2・3、24-1・25-2) 第8層から出土した遺物には、土師器皿(248・251)・壺(246・249)があり、他に、製塙土器(247)などがある。これらの遺物から、8世紀中頃から9世紀初めにかけての奈良～平安時代に属すと考えられる。

さらに、第8層からは、古墳時代後期の須恵器蓋(250・252・253)、土師器甕(244)、弥生時代後期甕(269～271)、弥生時代中期壺(254・268)、縄文時代晚期の深鉢(258～267)などが出土している。

第9面(図26、図版12・13・14・24-2・25-1) 第9面は、第8層を除去して検出した遺構面である。第8層は土質から3層に分けることができるが、第8-2層、第8-3層は部分的な残存にとどまるため、意識して掘り分けることはできなかった。遺構面の高低差は、上面に比べて細かい起伏がさらに顕著となる。第9面では縄文時代晚期～古墳時代後期の遺構が重複しており、堅穴建物2棟、土坑24基、溝68条や多数のピットが検出された。遺構の新旧関係は切り合いのほか、埋土による判断が可能

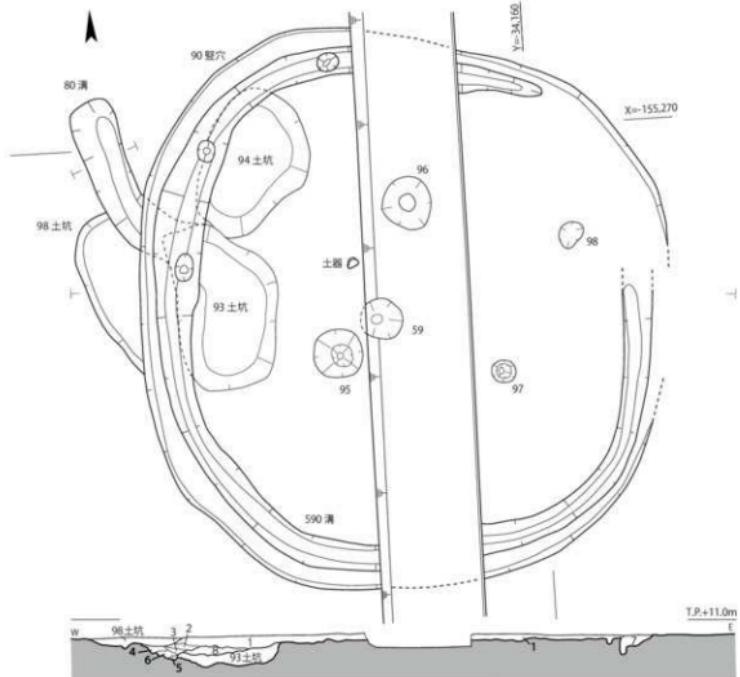


図26 第9面 全体図

である。僅かであるが、遺構内から出土した遺物と照らし合わせると、概ね2段階（縄文時代晩期～弥生時代前期、弥生時代後期～古墳時代前期初頭）の遺構に区別できる。

弥生時代前期～古墳時代前期の遺構は溝が主体である。調査区中央を南から北方向に掘削された溝から北西や北東方向へと分流する溝や南東から北西方向の溝が検出された。遺構の切り合いからは、さらに細かい新旧関係を認めることが出来る。

これら溝群の性格は不明であるが、もっとも標高が高い調査区南東から北へ向かって流れるように設けられること、尾根筋がのびる方向に主軸をもつこと、埋土が総じてシルトであり、水の流れは比



[90溝]

- 1) 5Y4/1 灰 粘土質シルト
- 10Y4/1 灰 微粉混じリシルトブロック30%程度入る 炭化物少量入る
やや軟質 (第8・3層)
- 2) 2SGY3/1 暗オリーブ灰 粘土質シルト
- 2SGY5/1 オリーブ灰 シルトブロック5%程度入る 炭化物少量入る やや軟質
- 3) 2SGY3/1 暗オリーブ灰 粘土質シルト
- 2SGY5/1 オリーブ灰 シルトブロック10%程度入る 炭化物多量入る やや軟質
- 4) 2SGY3/1 暗オリーブ灰 粘土質シルト 2SGY5/1 オリーブ灰 シルトブロック20%程度入る 炭化物少量入る やや軟質

- 5) 2SGY3/1 暗オリーブ灰 粘土質シルト
- 2SGY5/1 オリーブ灰シルトブロック50%程度入る
炭化物微量入る やや軟質
- 6) 5) 層に近似 より砂質強い
- 7) 10Y3/1 オリーブ灰 微粉混じリ粘土質シルト
- 5Y5/2 灰オリーブ 細粉混じリ粘土質シルト
- 8) 2SGY3/1 暗オリーブ灰 微粉混じリ粘土質シルト
- 2SGY4/1 暗オリーブ灰 粘土ブロック20%程度入る やや軟質

[80溝]

TP+11.0m

[80溝]

- 1) 7SGY4/1 暗緑灰 微粉混じリ粘土質シルト
- 2) 5GYS/1 暗ナリーブ灰 微粉混じリ粘土質シルト 5G4/1 暗緑灰 粘土質シルト
ブロック20%程度入る 細かい炭化物入る やや軟質
- 3) 5GYS/1 暗オリーブ灰 微粉混じリ粘土質シルト 5G4/1 暗緑灰 粘土質シルト
ブロック40%程度入る やや軟質

図27 第9面 遺構平面断面図(1)

較的緩やかであったと考えられることから、高所から低所への緩やかな引水を目的として設けられたと考えられる。

溝埋土の主体をなす第8層上層からは、イネのほか栽培種の可能性がある蔬菜類の花粉化石が検出されている（次章詳述）。これらの溝群は、深耕に関わる給排水を目的として設けられた可能性が考えられる。なお、これらの溝群は、第8層の堆積過程で設けられた可能性が高く、時期的に新しくなる可能性が高い。

縄文時代晚期の遺構は、竪穴建物2棟、土坑やピットが主体である。1区において検出した竪穴建物1・2は、小溝が円形にめぐることから竪穴建物と考えた。

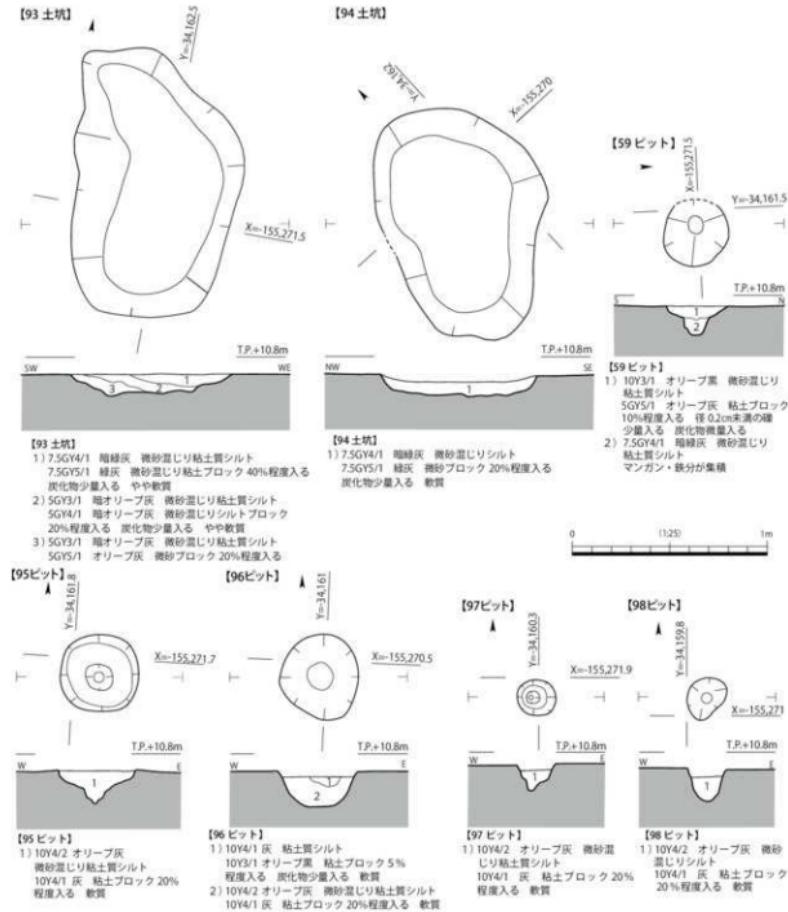
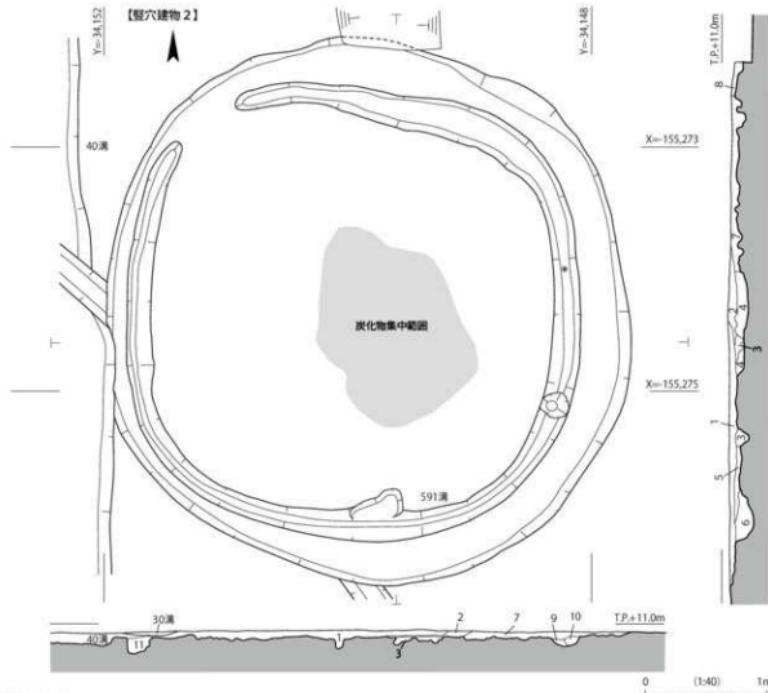


図28 第9面 遺構平面断面図（2）

豊穴建物1 (図27・45、図版12) 調査区北東部において検出した。建物東半部は第8層による削平を著しく受けしており、一部掘り込みが残存しなかった。98土坑に切られ、93土坑・94土坑・80溝・59ビット・95・98ビットを切っている。

平面形状はややいびつな円形を呈する。残存する規模は南北長4.5m、東西幅は4.1mを測る。深さは0.1mである。掘り方のやや内側を溝(590溝)がめぐっている。規模は最大幅0.4m、深さ0.19mを測る。埋土は8層に分けられ、粘土質シルトを主体とし、シルトブロックや微砂ブロックが混じる。

出土遺物は僅かであるが、遺構面の直上から縄文土器(窓袋型)深鉢の破片が出土している(図45-287)。器形は長原式に類されるが、斜格子状の線刻文様は船橋式に似る。長原式のなかでもやや古相に



【豊穴建物2】

- 1) 2.5GY3/1 稲オリーブ灰 微砂混じり粘土質シルト
2.5GY5/1 稲オリーブ灰 黏土質シルト 5%程度入る 炭化物少量入る やや軟質
- 2) 2.5GY3/1 稲オリーブ灰 微砂混じり粘土質シルト
2.5GY5/1 稲オリーブ灰 微砂混じり粘土質ブロック 10%程度入る 残0.2cm未溝の壁少量入る 炭化物多量入る やや軟質
- 3) 7.5GY3/1 稲穀灰 微砂混じり粘土質シルト
2.5GY5/1 稲オリーブ灰 微砂ブロック 10%程度入る 炭化物少量入る やや軟質
- 4) 2.5GY4/1 稲オリーブ灰 粘土質シルト 30%程度入る 炭化物微量入る
2.5GY5/1 稲オリーブ灰 微砂混じり粘土質シルト 30%程度入る 炭化物微量入る
5.) 壁に近接 やや軟質
- 6) 5GY3/1 稲オリーブ灰 微砂混じり粘土質シルト
7.5GY4/1 稲穀灰 微砂混じり粘土質ブロック 5%程度入る
7.5GY4/1 稲穀灰 微砂ブロック 5%程度入る 炭化物微量入る
- 7) 10Y3/1 オリーブ灰 黏土質シルト 10Y4/1 灰 黏土ブロック 30%程度入る 細かい炭化物少量入る やや軟質
- 8) 5GY4/1 稲オリーブ灰 黏土質シルト
7.5GY5/1 稲灰 微砂混じり粘土質シルトブロック 30%程度入る
9) 2.5GY4/1 稲オリーブ灰 微砂混じり粘土質シルト
2.5GY5/1 オリーブ灰 黏土ブロック 10%程度入る 残0.4cm未溝の炭化物少量入る やや軟質
- 10) 7.5GY5/1 稲灰 微砂混じり粘土質シルト
細かい炭化物微量入る やや軟質
- 11) 2.5GY3/1 稲オリーブ灰 微砂混じり粘土質シルト
2.5GY5/1 オリーブ灰 微砂混じり粘土質シルトブロック 30%程度入る やや軟質

図29 第9面 遺構平面断面図(3)

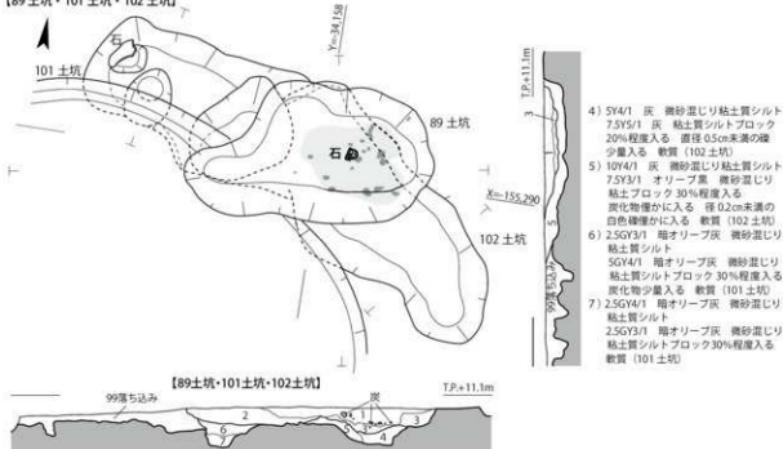
位置づけられる製品である。

竪穴建物2 (図29、図版12) 調査区北東部の竪穴建物1より約12m東において検出した。30・40溝に切られる。平面形状は円形を呈する。規模は、南北径が4.4m、東西径は4.3mを測る。深さは0.1mである。円周のやや内側に隅丸方形に近い溝(591溝)がめぐる。規模は最大幅0.3m、深さ0.2mを測る。溝底面は凹凸があり、平滑ではない。中央部には径0.5m程度の落込みがあり、周辺に細かい炭化物が集中する。

出土遺物は僅かであり、591溝内より縄文土器が1点出土したにとどまる。

89土坑 (図30) 調査区北東部の竪穴建物1より約18m南に検出した。101土坑・102土坑・99落ち込みを切っている。平面形状は不定形である。規模は長径2.0m、短径1.1mを測る。最大深度は0.2m程度を測るが、底面には凹凸が目立つ。埋土は3層に分けられ、微砂混じり粘土質シルトを主体として、微砂混じり粘土ブロックが混じる。径1cm大の炭化物や焼土塊、碎けた縄文土器片などが多量に含まれている。

99落ち込み (図39) 調査区北東部に検出した。竪穴建物である可能性も考えられるが、掘方の一部の【89土坑・101土坑・102土坑】



【89土坑・101土坑・102土坑】

- 1) 7SY3/2 オーリーブ灰 微砂混じり粘土質シルト 5Y4/3 細オーリーブ 粘土質シルトブロック 30%程度入る
3SY/1 オーリーブ灰 シルトブロック 5%程度入る 径1cm大の炭化物多量に入る やや赤鉄 (89土坑)
- 2) 2SGY3/1 稲オーリーブ灰 微砂混じり粘土質シルト 10Y3/1 オーリーブ灰 微砂混じり粘土ブロック 30%程度入る
炭化物少量入る 赤鉄 (89土坑)
- 3) 2SGY3/1 稲オーリーブ灰 微砂混じり粘土質シルト 10Y3/1 オーリーブ灰 微砂混じり粘土ブロック 30%程度入る
2SGY3/1 オーリーブ灰 微砂混じり粘土ブロック 5%程度入る 炭化物少量入る 赤鉄 (89土坑)

【101土坑】 TP+11.0m

- 1) 2SGY3/1 稲オーリーブ灰 微砂混じり粘土質シルト
5GY3/1 稲オーリーブ灰 微砂混じり粘土質シルトブロック 30%程度入る 炭化物少量入る 赤鉄
- 2) 2SGY4/1 稲オーリーブ灰 微砂混じり粘土質シルト
2SGY3/1 稲オーリーブ灰 微砂混じり粘土質シルトブロック 30%程度入る 赤鉄

【102土坑】 TP+11.0m

- 1) 2SGY3/1 稲オーリーブ灰 微砂混じり粘土質シルト
10Y4/2-4/3 炭 黄褐色にぶい黄褐 微砂混じりシルトブロックと5Y4/6 赤褐 焼土および土器の碎片多量に入る
人掌大的炭化物多量に入る しまり赤い
- 2) 5Y4/1 灰 微砂混じり粘土質シルト
7SY5/1 灰 粘土質シルトブロック 20%程度入る 径0.5m未満の硬少量入る 赤鉄

図30 第9面 遺構平面断面図(4)

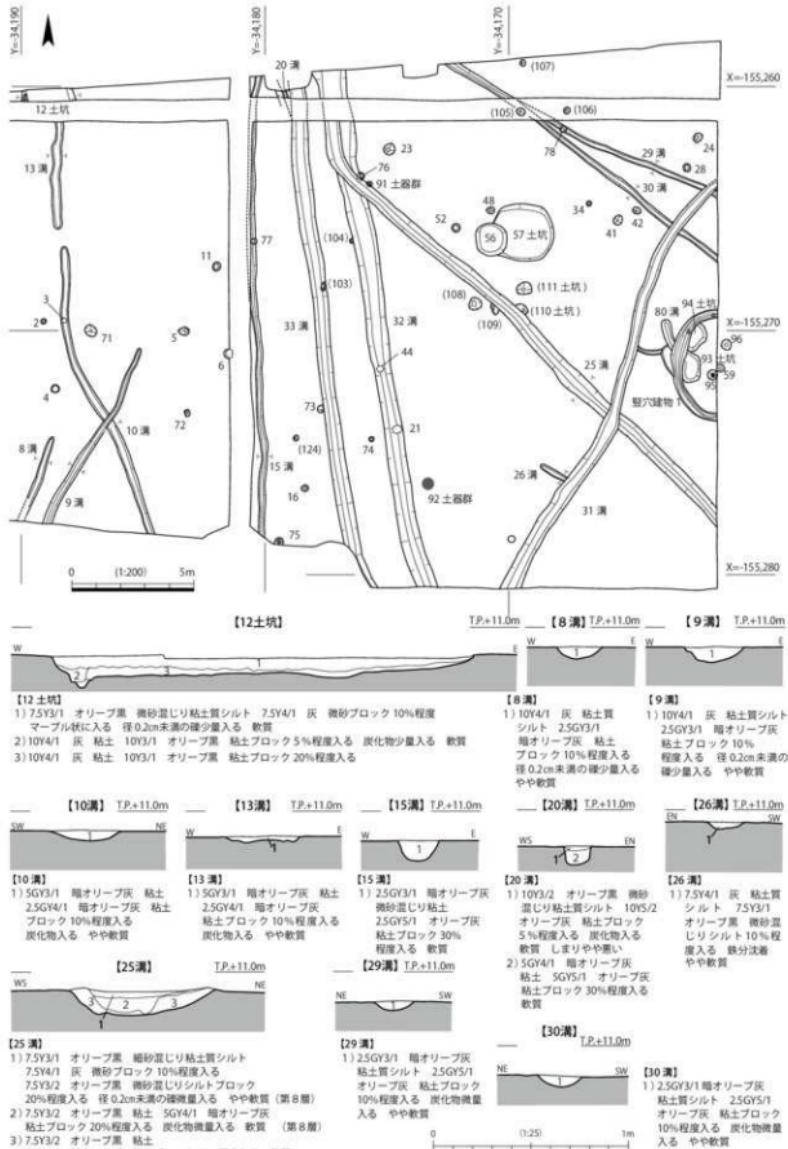


図31 第9面 遺構平面断面図(5)

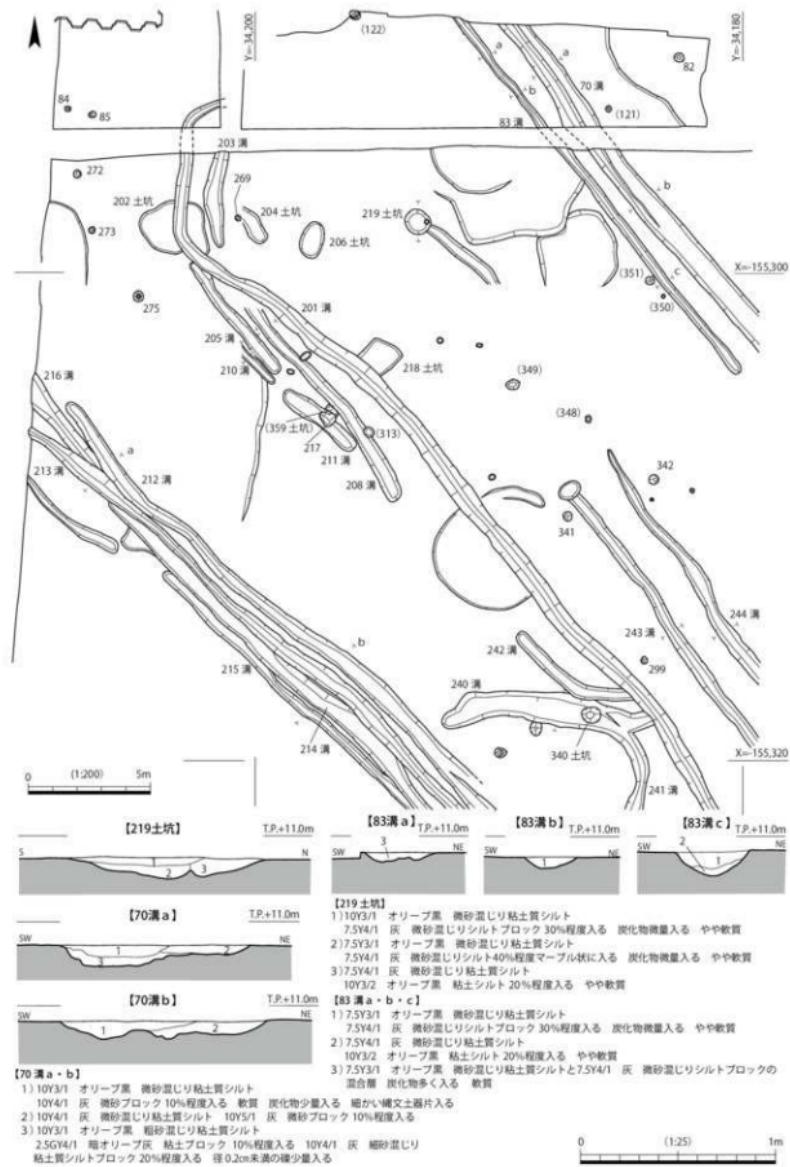


図32 第9面 遺構平面断面図(6)

みの検出であるため落込みとして認識した。89土坑に切られ、101土坑・102土坑を切る。

平面形状は円形を呈すると考えられる。規模は残存する径 4.4 m、深さ 0.06 mである。

このように、弧を描く小溝や円形を呈する落込みは、調査区北東部に広がる微高地に存在する（図39参照）。なお、焼土塊を含む遺構は、（その1）調査区北半部でも確認されていることから、縄文時代晚期の居住域が、この範囲に展開された可能性は高いと考えられる。

溝群 第9面では、縄文時代晚期～古墳時代前期の溝を検出した。古墳時代前期の溝は、調査区西半部においては南東から北西方向にのびる221溝・223溝・225溝などがあり、何度も掘削を繰り返されている。東半部には南北方向にのびる60溝、40溝から北西方向に分流する25溝がある。

弥生時代の溝は中央を南北方向に並行して掘られた32溝・33溝がある。33溝からは70溝が北西方向に分流する。32溝・33溝の埋土からは弥生時代前期の遺物が出土した。調査区東辺部には432溝が南端から北東方向にのびる。

繩文時代晩期に遡るものは、274溝のように細かく蛇行しながら流れるものが多い。あるいは底面に

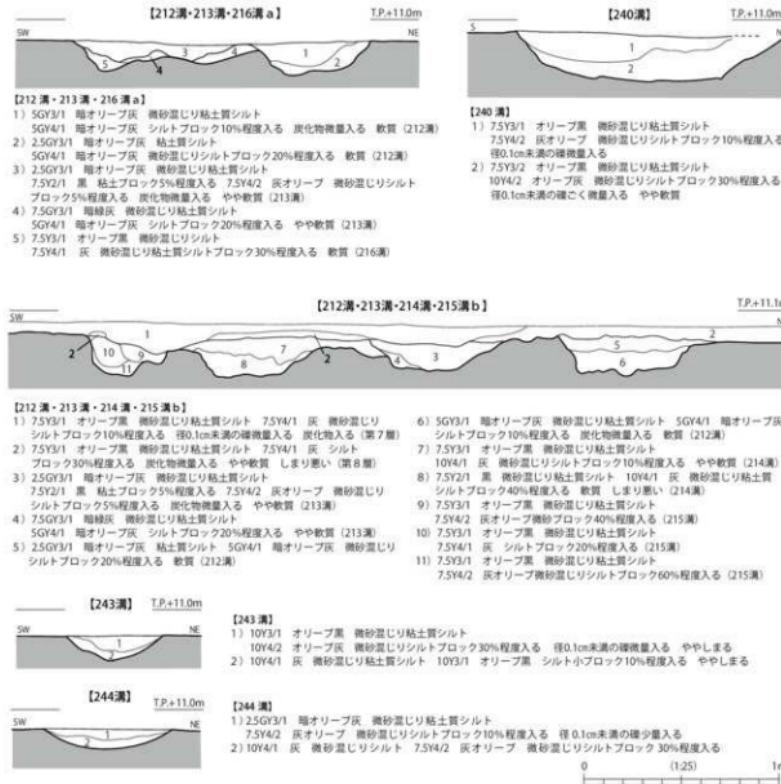


図33 第9面 遺構平面断面図(7)

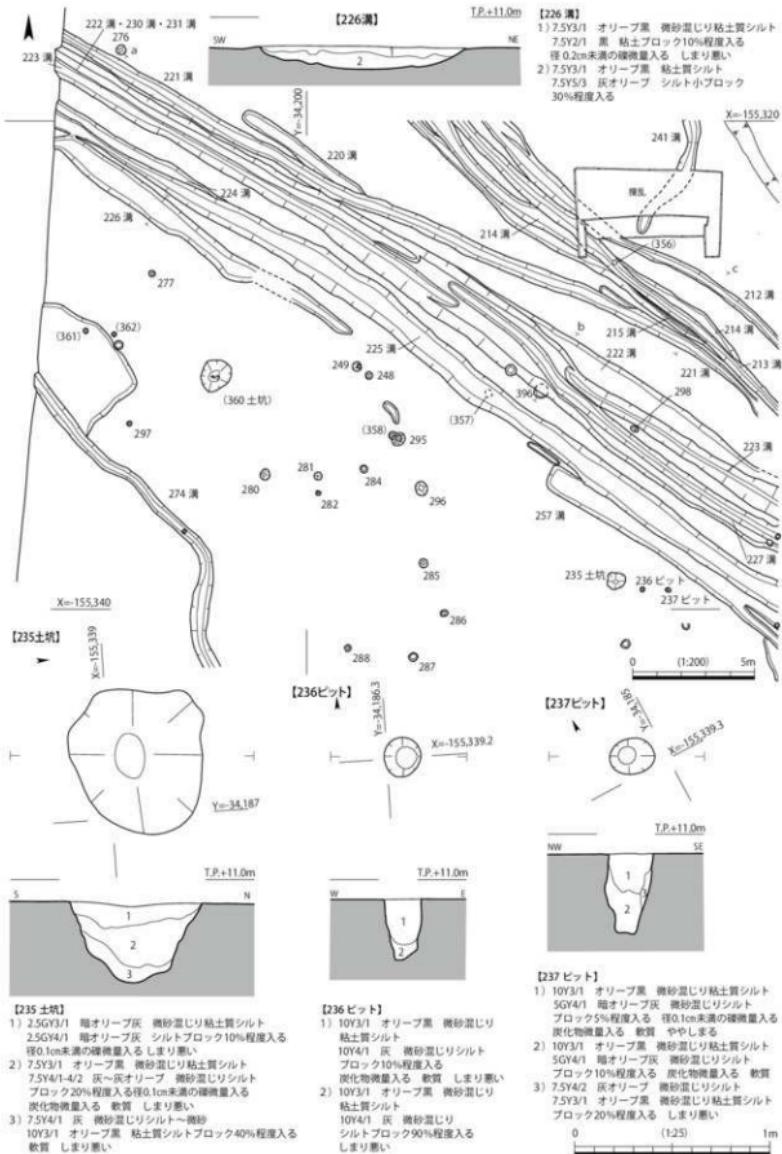
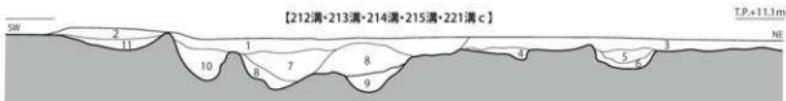


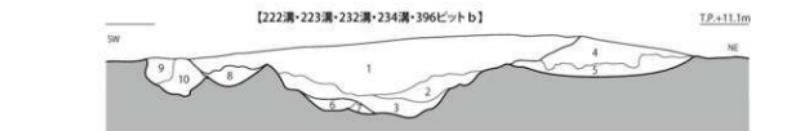
図34 第9面 遺構平面断面図(8)



- 7) 7.5Y3/1 オリーブ黒 粘砂混じり粘土質シルト
10Y5/2 地オーリーブ 黒 粘砂ブロック 5%程度入る 径 0.1cm未満の礫微量入る
炭化物微量入る やや軟質 (213溝)
- 8) 7.5Y3/1 オリーブ黒 粘砂混じり粘土質シルト
7.5Y4/2 地オーリーブ 黑 粘砂混じりシルトブロック 20%程度入る (213溝)
- 9) 10Y4/1 地 粘砂混じりシルト
10Y3/1 オリーブ黒 粘砂混じりシルトブロック 30%程度入る
7.5Y4/2 地オーリーブ 黑 粘砂ブロック 20%程度入る しまり悪い (214溝)
- 10) 10Y4/1 地 粘砂混じりシルト
10Y3/1 オリーブ黒 粘砂混じりシルトブロック 40%程度入る
7.5Y4/2 地オーリーブ 黑 粘砂ブロック 10%程度入る やや軟質 (215溝)
- 11) 10Y3/1 オリーブ黒 粘砂混じり粘土質シルト
7.5Y4/1 地 粘砂混じりシルトブロック 10%程度入る
径 0.1cm未満の炭化物微量入る (221溝)



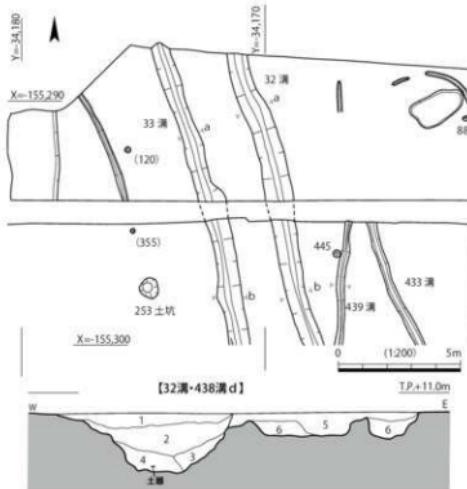
- 9) 7.5Y5/3 地オーリーブ シルト
7.5Y4/1 地 粘砂混じり粘土質シルトブロック 40%程度入る
炭化物微量入る やや軟質 (224溝)
- 10) 7.5Y2/1 地 粘砂混じり粘土質シルト
7.5Y2/1 黒 粘土ブロック 5%程度入る 7.5Y4/1 地 粘砂混じりシルト
小シルト 5%程度入る 炭化物微量入る (222溝)
- 11) 7.5Y3/1 オリーブ黒 粘砂混じり粘土質シルト
7.5Y4/1 地 シルトブロック 30%程度入る 10Y4/2 オリーブ黒
シルトブロック 5%程度入る 径 0.1cm未満の礫微量入る (222溝)
- 12) 7.5Y3/1 オリーブ黒 粘土質シルト
7.5Y4/1 地 シルトブロック 10%程度入る 径 0.1cm未満の礫
微量入る 炭化物微量入る (222溝)
- 13) 7.5Y2/2 地 粘砂混じり粘土質シルト
7.5Y2/2 地オーリーブ 黑 粘土質シルトブロック 30%程度入る
炭化物微量入る ソフト (231溝)
- 14) 7.5Y2/1 黒 粘砂混じり粘土質シルトブロックと7.5Y5/2 地オーリーブ
粘土質シルトと10Y4/1 地 粘土質シルトブロックの合層 (231溝)
- 15) 7.5Y2/1 黑 粘土質シルト 7.5Y4/2 地オーリーブ 粘砂ブロック 10%
程度入る 径 0.1cm未満の礫微量入る 炭化物微量入る 軟質 (230溝)



- 6) 10Y3/1 オリーブ黒 粘砂混じり粘土質シルト
7.5Y4/2 地オーリーブ 黑 粘砂ブロック 5%程度入る 軟質 (232溝)
- 7) 7.5Y4/2 地オーリーブ 黑 粘砂混じり粘土質シルト
10Y3/1 オリーブ黒 粘砂ブロック 10%程度入る しまり悪い (232溝)
- 8) 7.5Y3/1 オリーブ黒 粘砂混じり粘土質シルト
7.5Y2/1 黑 粘土 シルト小シルト 20%程度入る 7.5Y4/2 地オーリーブ
粘砂混入 やや軟質 (234溝)
- 9) 7.5Y3/1 オリーブ黒 粘砂混じり粘土質シルトブロックと
7.5Y4/2 地オーリーブ 粘砂混じりシルトブロックの合層 径 0.1cm未満の
礫微量入る しまり悪い (396 ピット)
- 10) 7.5Y4/2 地オーリーブ 粘砂混じりシルト
7.5Y3/2 オリーブ黒 粘砂混じり粘土質シルトブロック 30%程度入る
細かい土器片入る (396 ピット)

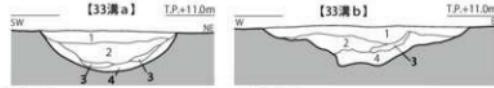


図35 第9面 遺構平面断面図 (9)



[32頁-438頁d]

- 1) 2.5G/3Y1 暗オリーブグリーン 滲砂混じり粘土質シルト
2.5G/4Y1 暗オリーブグリーン 滗砂網目状に入る 径 0.2cm未満の複数微量入る (32 渡)
1) 7.5YR 4/4 暗褐色 ブラックグリーン
3) 5G/3Y1 暗オリーブグリーン 滗砂混じり粘土質シルト
2.5G/4Y1 暗オリーブグリーン シルト/フロック 20%程度入る しまり悪い (32 渡)
4) 7.5G/3Y1 暗緑色 滙砂混じり粘土質シルト
7.5G/4Y1 暗緑色 シルト+微砂 フロック 30%程度入る ややしまる (32 渡)
5) 2.5G/3Y1 暗オリーブグリーン 滙砂混じり粘土質シルト 2.5G/4Y1 短いリーブグリーン 滙砂混じり
シルト網目状に入れる 径 0.1cm未満の複数微量入る ややしまり良い (43 渡)
6) 10YR 4/4 暗オリーブグリーン 粘土質シルト
10YR 3/2 オリーブグリーン 滙砂混じり粘土質シルト ブロック 30%程度入る (43 渡)



[337a]

- | | |
|---------------------------------------|-----------------------------|
| 1) SGY/1 緩オリーブ灰 滅砂混じり粘土質シルト | 5GY/1 緩オリーブ灰 滅砂混じり粘土質シルト |
| 5GY/1 オリーブ灰 シルトブロック 5%程度入る | SGY/1 オリーブ灰 滅砂混じり粘土質シルト |
| 5GY/1 オリーブ灰 シルトブロック 5%程度入る | 5GY/2 オリーブ灰 シルトブロック 5%程度入る |
| 10Y/1 オリーブ灰 滅砂混じり粘土質シルト | 10Y/1 オリーブ灰 滅砂ブロック 10%程度入る |
| 10Y/1 カモ ブロック 10%程度入る
液化物化入る
教資 | 10Y/1 オリーブ灰 滅砂混じり粘土質シルト |
| 3) 10Y/1 オリーブ灰
滅砂混じり粘土質シルト | 10Y/1 カモ ブロック 30%程度入る
教資 |
| 10Y/1 カモ ブロック 30%程度入る
教資 | 10Y/1 オリーブ灰 滅砂混じり粘土質シルト |
| 4) 10Y/1 オリーブ灰
滅砂混じり粘土質シルト | 10Y/1 カモ ブロック 50%程度入る
教資 |
| 10Y/1 カモ ブロック 50%程度入る
教資 | 10Y/1 オリーブ灰 滅砂混じり粘土質シルト |



[33 满分]

- 1) 7.5Y3/1 オリーブ黒 微砂混じり粘土質シルト 7.5Y4/1灰 シルト～微砂ブロック
10%程度入る 程0.2cm未溝の粗多量入る
2) 7.5Y4/1 灰 微砂混じり粘土質シルト 7.5Y3/1 オリーブ黒 微砂混じりシルト
ブロック 20%程度入る 混液微量入る 軟質



1330-331

- [439 滝]
 1) 2.5GY4/1 喰オリーブ灰 微砂混じり粘土質シルト
 2.5GY3/1 喰オリーブ灰 微砂混じり粘土質シルト
 ブロック 40% 程度入る 程 0.1cm未満の白色繊維混入する やや軟質
 2) 2.5GY4/1 喰オリーブ灰 微砂混じり粘土質シルト

図36 第9面 遺構平面断面図(10)

— 46 —

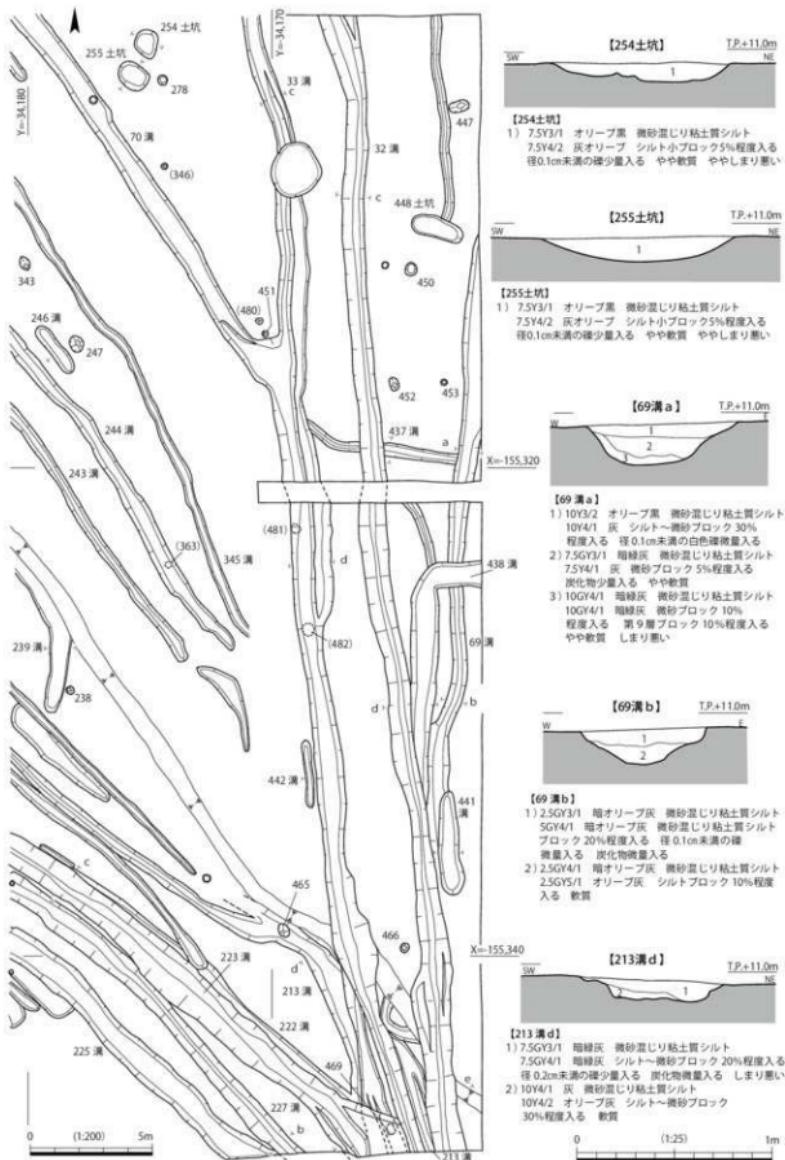


図 37 第9面 遺構平面断面図 (11)

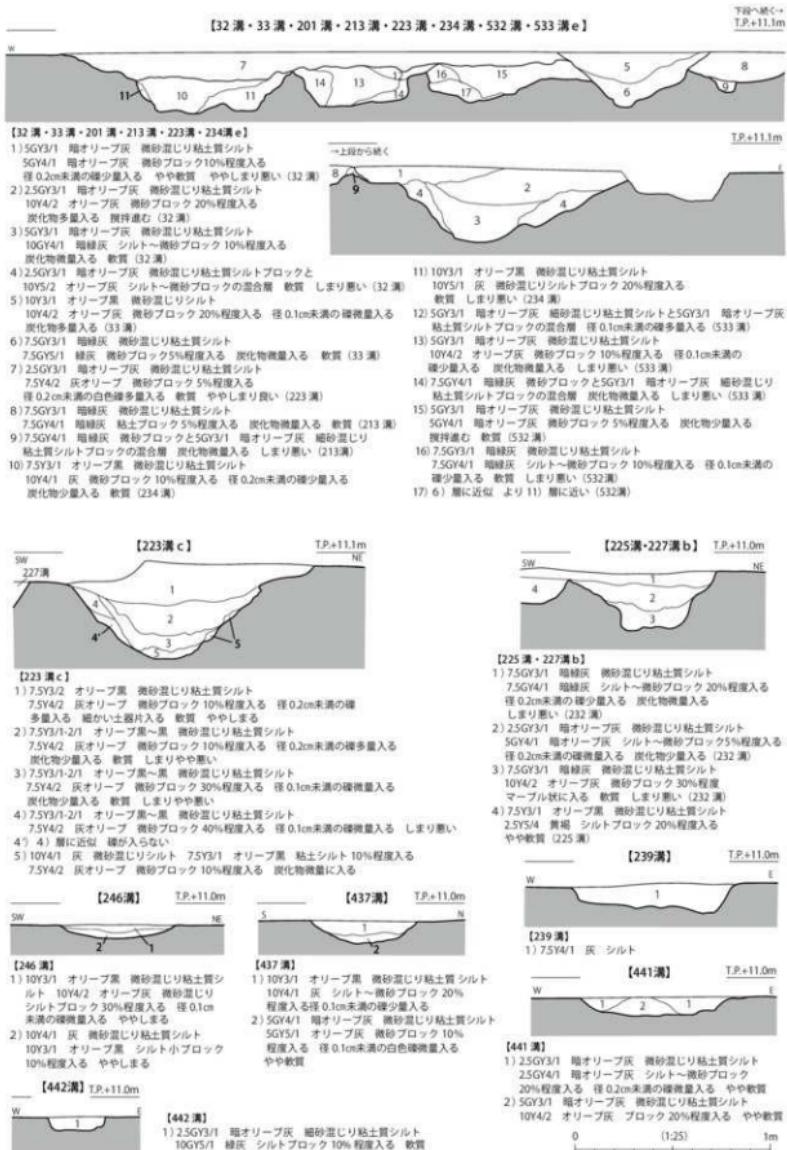


図38 第9面 遺構平面断面図(12)

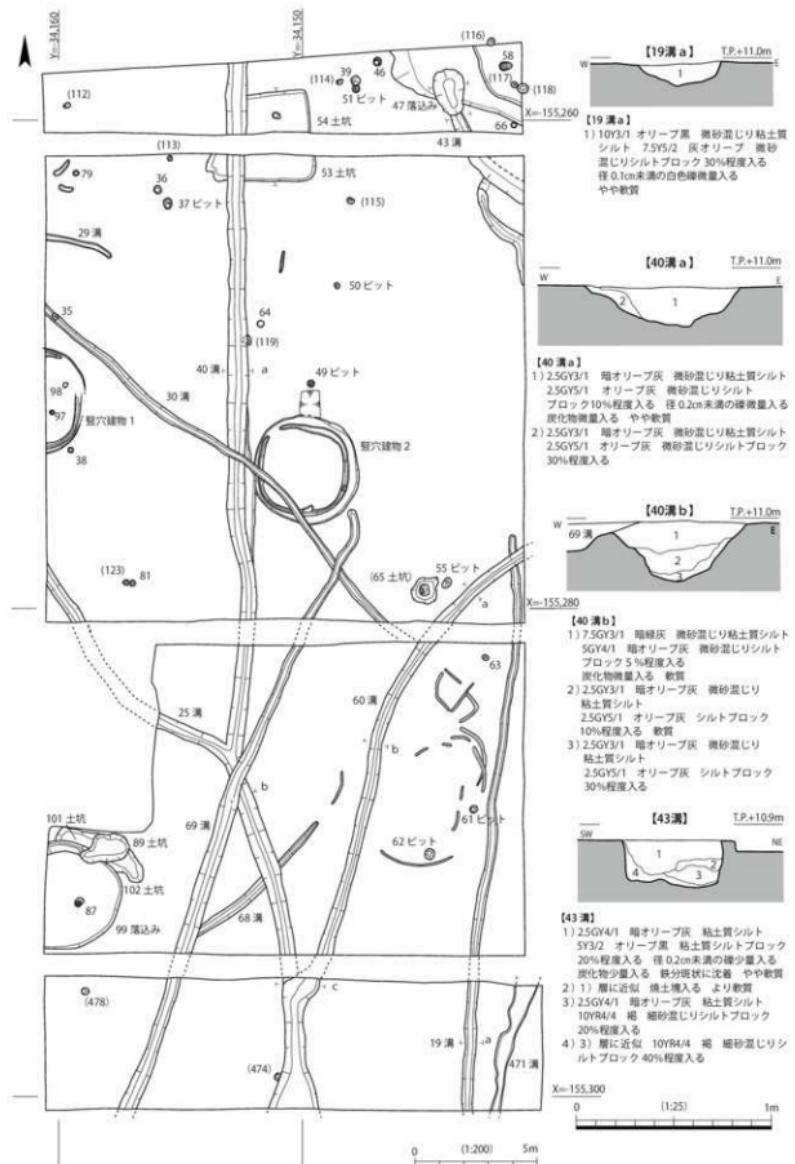


図39 第9面 遺構平面断面図(13)

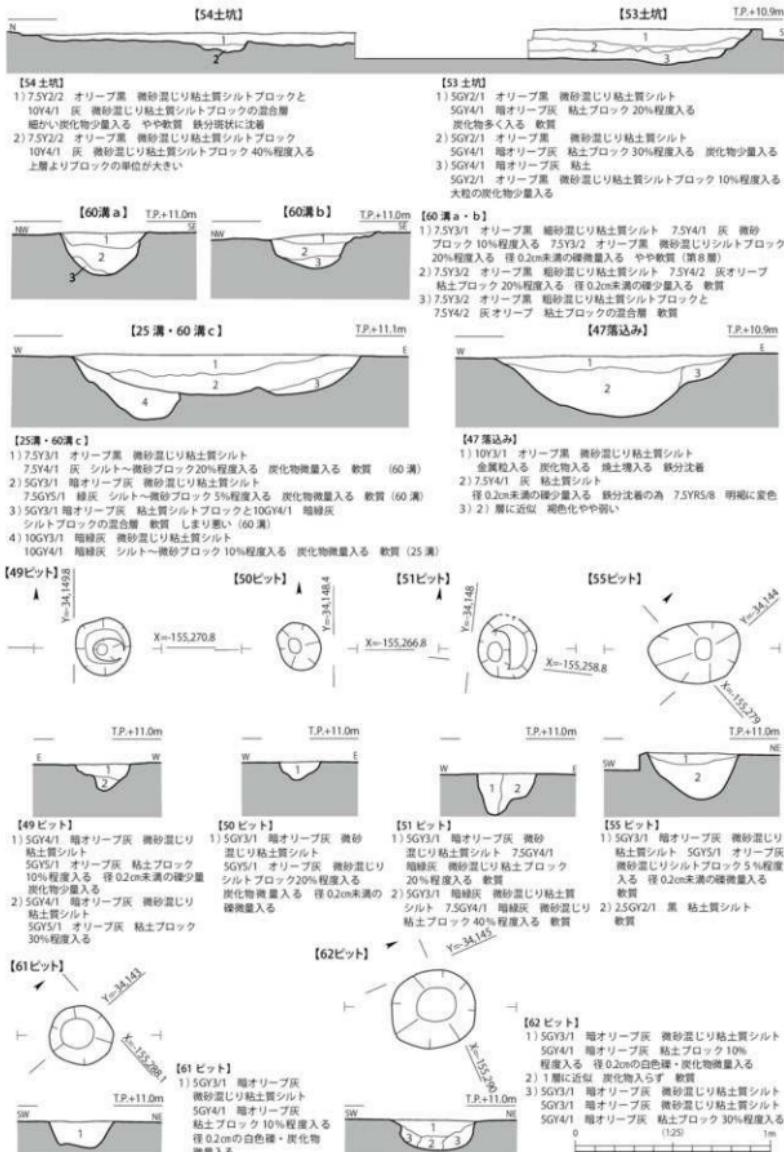


図40 第9面 遺構平面断面図 (14)

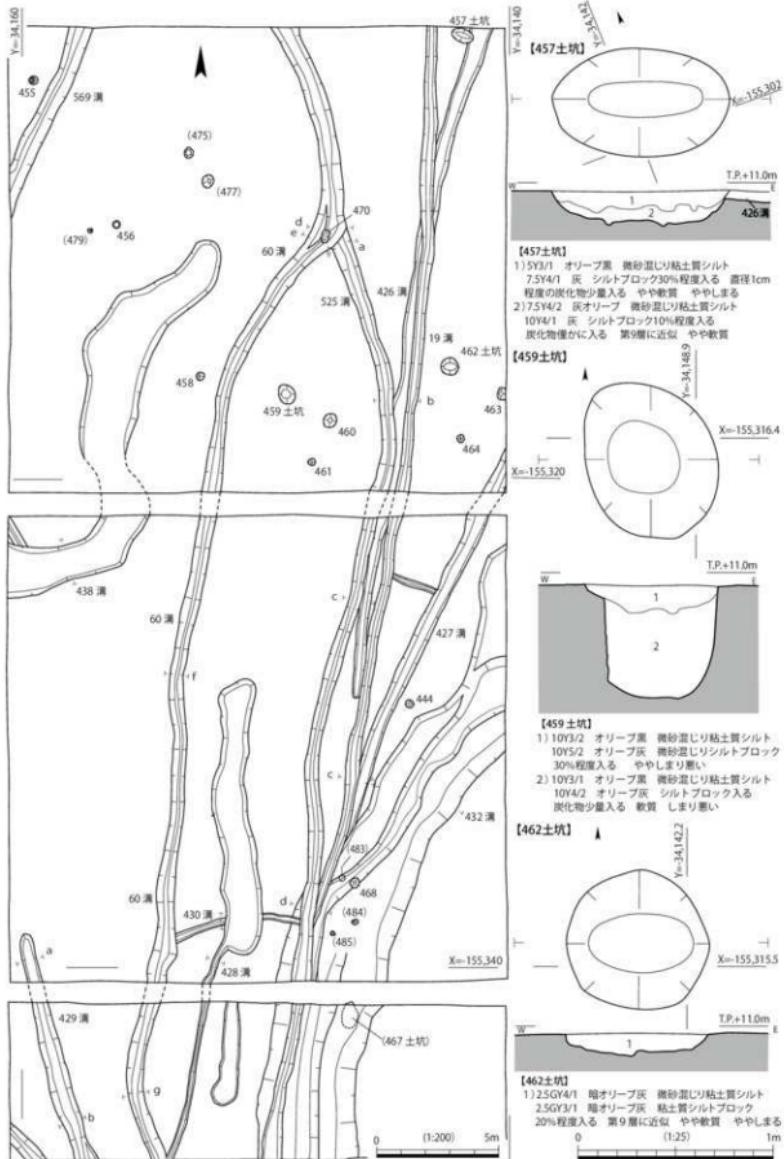


図41 第9面 遺構平面断面図(15)

凹凸を残すものが目立つ。調査区西半部に偏り、切り合い関係は認められない。

その他の遺構から出土したものには、弥生時代後期甕(281)、叩き石(284)などがある。

第9面からは、投弾(303)・剥片(301・302)なども出土している。

第9層出土遺物(図45、図版25-3) 第9層からは、縄文時代後期宮窓式(292)や滋賀里IIIb式(290)、船橋式(291)の深鉢などが出土している。

これらの遺物から、第9層は、縄文時代晚期船橋式を上限とする。

第9-2面(図26・31・32・34・35・39~41・44、図版14-3・4、25-3) 今回の調査では第9

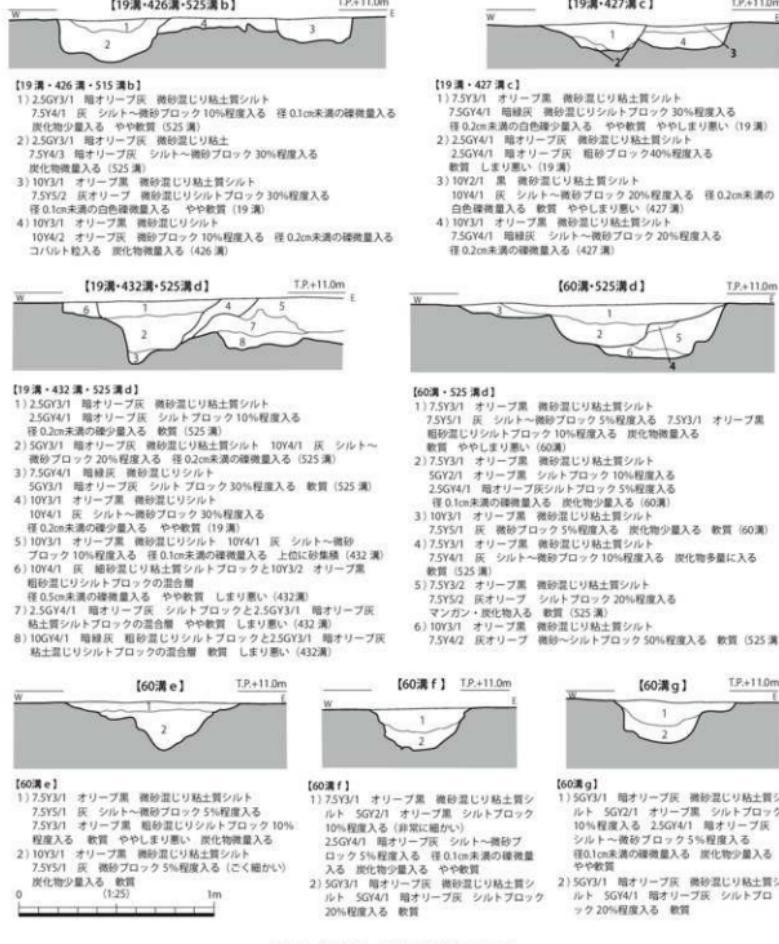


図42 第9面 遺構平面断面図(16)

面を検出した後、その基盤層である第9層をさらに設計深度まで掘り下げた。その結果、第9面検出時には見落としていた遺構のほか、第9層堆積時に設けられたと考えられる遺構（ピット・土坑）を新たに検出した。これらは平面図中において()で示している。

そのうち、確実に縄文時代晚期に遡ると考えられる遺構には65土坑、359土坑、360土坑、467土坑がある（図44）。

65土坑（図44） 調査区北東部において検出した。平面形状は不整形な方形を呈する。規模は南北長1.0 m、東西幅1.0 mを測る。最大深度は0.5 mである。中央部が一段深く掘り込まれている。

359土坑（図32・44） 調査区西半中央部で検出した。平面形状は隅丸方形を呈する。規模は南北長0.6 m、東西長0.6 mである。深さは0.25 mである。北辺の一部を深く掘り込む。埋土には炭化物が他の

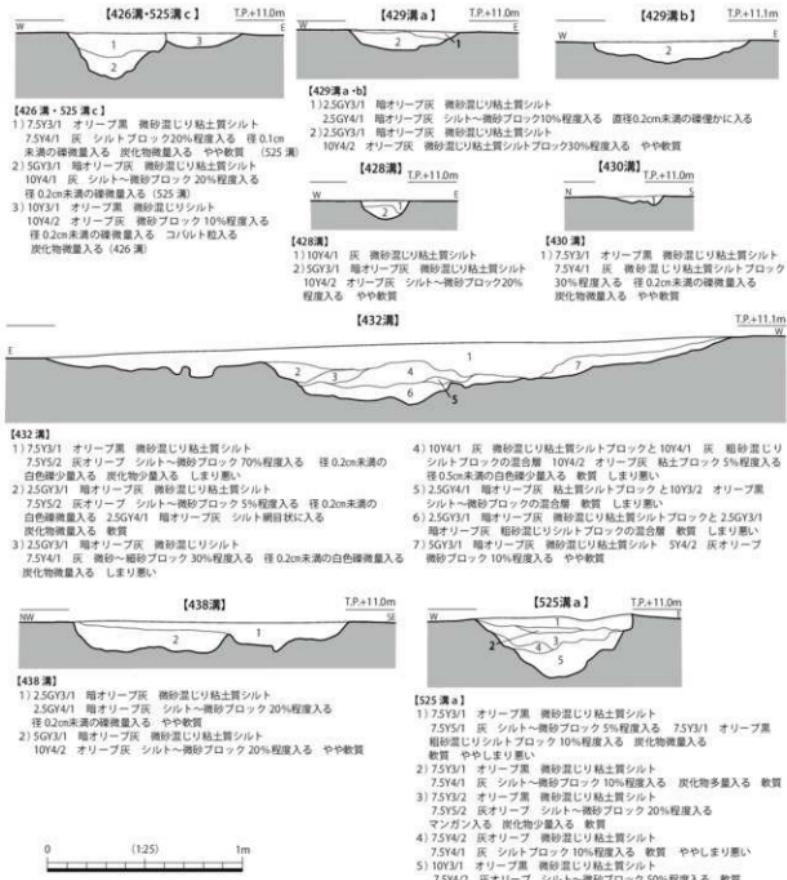
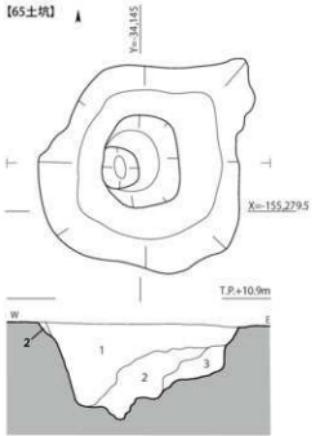
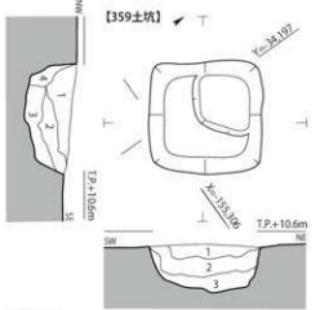


図43 第9面 遺構断面図(17)

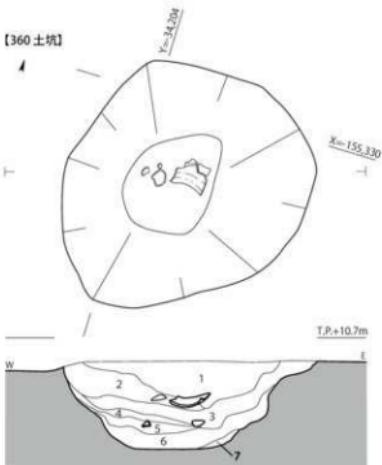


- [65土坑]**
- 1) 2SGY4/1 稕オーリーブ灰 細砂混じり粘土質シルトブロック 30%と 10Y3/1 オーリーブ灰 粘土ブロック 40%と 7SY5/3 灰オーリーブシルト～微砂ブロック 30%の混じ層
 - 2) 2SGY4/1 稕オーリーブ灰 細砂混じり粘土質シルトブロック 40%と 10Y3/1 オーリーブ灰 粘土ブロック 20%と 7SY5/3 灰オーリーブシルト～微砂ブロック 40%の混じ層
 - 3) 2SGY4/1 稕オーリーブ灰 細砂混じり粘土質シルトブロック 40%と 10Y3/1 オーリーブ灰 粘土ブロック 10%と 7SY5/3 灰オーリーブシルト～微砂ブロック 50%の混じ層

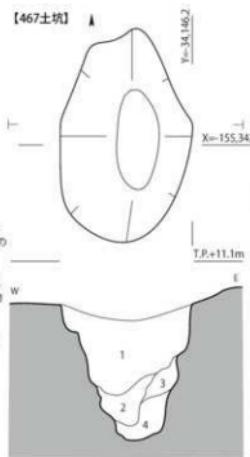


- [359土坑]**
- 1) 7SY3/1 オーリーブ灰 細砂混じり粘土質シルト
SGY4/1 稕オーリーブ灰 細砂混じリソルトブロック 10%程度入る
7SY4/2 稕オーリーブ灰 細砂ブロック 20%程度入る 径 0.1cm未満の礫 微量入る 炭化物微量入る やや軟質 ややしまり悪い
 - 2) 10Y3/1 オーリーブ灰 細砂混じり粘土質シルト
SGY4/1 稕オーリーブ灰 細砂混じリソルトブロック 20%程度入る
7SY4/2 灰オーリーブ灰 細砂ブロック 10%程度入る 細かい炭化物少量入る 軟質 しまり悪い
 - 3) 10Y3/1 オーリーブ灰 細砂混じり粘土質シルト
SGY4/1 稕オーリーブ灰 細砂混じリソルトブロック 30%程度入る
7SGY4/1 稥綠灰 微砂 30%程度下位に流入
細かい炭化物少量入る しまり悪い
 - 4) 10Y3/1 暗灰 微砂混じり粘土質シルト
SGY4/1 稕オーリーブ灰 細砂混じリソルトブロック 5%程度入る
7SGY4/1 稥綠灰 微砂ブロック 5%程度入る 軟質

0 (1:25) 1m



- [360土坑]**
- 1) SGY3/1 稥オーリーブ灰 細砂シルト
5SY1/1 灰 細砂ブロック (径 1cm程度) 入る 炭化物入る
 - 2) 2SGY3/1 稥オーリーブ灰 シルト
7SY4/1/1 灰 細砂ブロック (径 2～3cm程度) 入る 炭化物微量入る
 - 3) SGY4/1 稥オーリーブ灰 細砂混じリソルト
7SGY5/1 稥オーリーブ灰 細砂ブロック (径 0.5cm程度) 入る 炭化物入る
 - 4) 2SGY5/1 稥オーリーブ灰 細砂混じリソルト
2SGY6/1 オーリーブ灰 細砂ブロック入る 5GYS1 オーリーブ灰 シルト
ブロック入る 炭化物入る
 - 5) SGY3/1 稥オーリーブ灰 細砂シルト
SGY5/1 オーリーブ灰 シルトブロック入る 炭化物上位に多量入る
 - 6) 2SGY5/1 オーリーブ灰 細砂
2SGY5/1 オーリーブ灰 シルトブロック (径 3cm程度) 入る
10Y4/1 灰 細砂シルト 節状に入れる 炭化物入る
 - 7) 10Y4/1 灰 細砂混じシルト ラミナを形成



- [467土坑]**
- 1) 2SGY3/1 稥オーリーブ灰 細砂
混じり粘土質シルト
10Y3/1 オーリーブ灰 細砂混じリ
粘土質シルトブロック 10%程度入る
7SY4/2 稥オーリーブ 細砂
シルトブロック 10%程度入る
径 0.2cm未満の礫少量入る 軟質
 - 2) 7SY3/1 オーリーブ灰 細砂混じリ
粘土質シルト
10Y4/1 灰 シルト～微砂ブロック
5%程度入る 炭化物僅かに入る 軟質
 - 3) SGY3/1 稥オーリーブ灰 細砂混じリ
粘土質シルト
7SGY4/1 稥綠灰 灰 シルトブロック
20%程度入る 軟質
 - 4) 2SGY4/1 稥オーリーブ灰 シルト～微砂
2SGY3/1 稥オーリーブ灰 シルト
ブロック 20%程度入る 軟質

図 44 第9-2面 遺構平面断面図

の遺構よりも多く含まれた。

360 土坑 (図34・44) 調査区南西部で検出した。平面形状は楕円形を呈する。規模は長径 1.4 m、短径 1.1 m を測る。深さは 0.5 m である。埋土には炭化物や、植物遺体を隨所に含む。

縄文時代晩期（滋賀里Ⅲ～船橋式）に属する土器片がまとめて出土した（図45-297～299）。

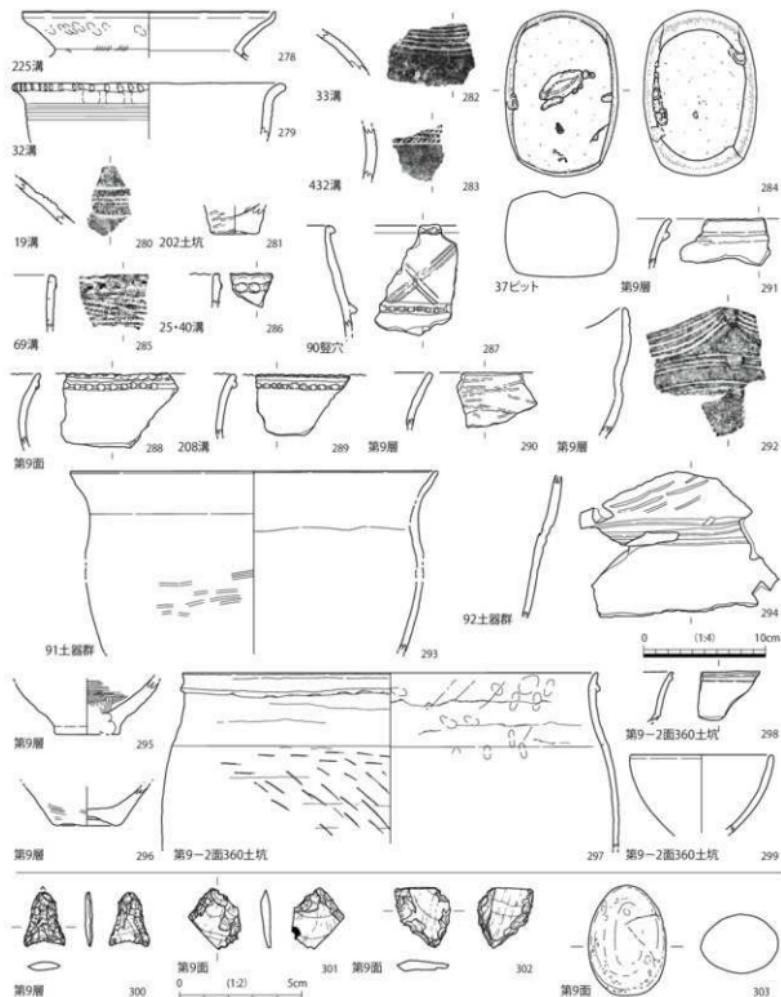


図 45 第9面・第9層・第9-2面 出土遺物実測図

第4章 自然科学分析

第1節 分析の目的と内容

大県郡条里遺跡（その2）では、縄文時代晩期から中世末期までの包含層を確認した。その多くが耕作土であると考えられる。このうち第1面・第2面では畝溝群を検出し、畑作が行われていたことが示された。これを裏付けるように、大県郡条里遺跡（その1）調査時には、第1層・第2層の土壤から、イネ、オオムギ、コムギ等の穀類のほか、ダイコン属やナス等、蔬菜類の種子が検出されている。

一方、第3面（14世紀頃）以前の遺構面では水田畦畔が主な遺構であることから、イネ等の穀物類が栽培されていた可能性ある。この傾向は条里型水田を志向する第7面（8世紀後半頃）まで遡ることができる。しかし、その前段階である第8面では旧地形の起伏を活かした地割が継承されており、僅かに畦畔を検出したものの水田として機能したか否かの判断が難しい状況にある。このため、今回の調査では、第3層～第9層の土壤を対象として花粉分析を行うことにより、当該地域が各時代においてどのような環境下にあったのかを分析した。加えて、植物珪酸体分析を行い、穀物類の栽培の是非を明確にした。

分析試料は、3区南壁およびX=155.340ラインに設定したトレンチの壁断面より採取した土壤である。

分析の結果、花粉分析からは当該地域における古植生とその特徴が明らかとなった。花粉分析では、木本類、草本類とともに8世紀を境として変化することが示された。また植物珪酸体分析では、縄文時代晩期後半の堆積層である第9層においてイネ栽培の可能性が示された。

以下、分析の種類ごとに分析方法とその成果を記述する。

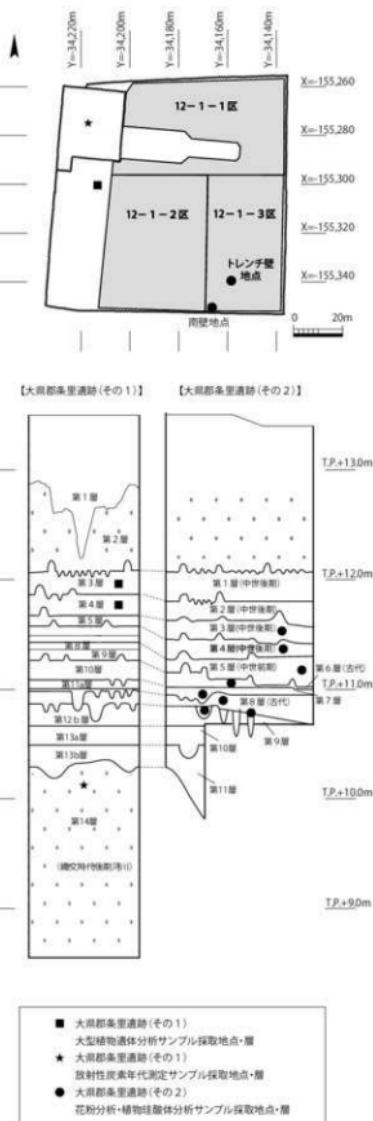


図46 分析試料採取地点位置図

第2節 花粉分析

1) 花粉分析の原理

粘土層等の堆積物や土壤には、動物性もしくは植物性の微小な化石（＝微化石）が含まれている。それらのうち、植物の化石花粉を物理・化学的処理によって抽出し、顕微鏡で種類や数を検定し、調査を行う方法が花粉分析である。

陸上に生育する樹木や草（植生）は気候の変化や時代とともに変化し、それが堆積物中の花粉化石の構成や量の変化にも反映される。したがって花粉の構成や消長は、地層の識別や古植生の復元に利用することが可能である。

2) 分析の方法

今回の分析試料は、シルトまたは粘土であり、その量は10~200 g（湿潤重量）である。試料は花粉化石の形状を保持するため、湿潤状態のまま使用した。試料の分析処理の手順は、以下のとおりである。

- 1) 基準量摘出試料の汚染部分を除去し、基準量を摘出す。
- 2) 泥分散処理KOH 溶液等の分散剤により試料をシェイカーで泥化、分散する。250 μm の篩で粗粒分の除去を行う。
- 3) 細粒物質除去1 μ 振動マイクロフィルターでコロイド分を分離除去する。1 μ 振動マイクロフィルターを使用するのは、粒径処理を確実にするとともに処理過程の再現性を高めるためである。
- 4) 微化石濃縮大型時計皿とアスピレータにより、時計皿法で微化石を濃縮する。
- 5) 弗化水素酸処理珪酸塩鉱物質を溶解、除去する。
- 6) 重液分離比重約 1.9 の重液中で遠心分離し、植物質を濃縮する。
- 7) 脱水処理アセトトリシス処理により、脱水とセルロース分を溶解除去する。
- 8) 水洗・濃縮遠心分離器により水洗し、水溶性物質を溶解、除去する。

表1 採取試料の微化石含有概況

地点	層位	花粉	炭化物	植物遺体	珪藻	火山ガラス	植物珪酸体
3区 南壁	第3層	○	△	○	○	○	○
	第4層	○	△	○	△	△	○
	第5層上位	○	△	○	△	○	○
	第5層下位	○	△	○	▲	○	○
	第6層	○	△	○	▲	△	○
	第7層	○	○	△	▲	△	○
	第8層中位	○	○	○	▲	○	○
	第8層下位	△	○	▲	×	△	○
	第9層	△	○	▲	×	△	△
3区 トレンチ壁	第8層上位	○	○	△	▲	△	○
	第9層	○	○	△	▲	△	○

凡例： ○.....十分な数量が検出できる ○.....少ないが検出できる △.....非常に少ない
▲.....きわめて稀に検出できる ×.....検出できない

9) 標本作成抽出した花粉化石にグリセリンゼリーを混合し、スライドガラスに滴下してプレパラートを作成する。各試料につき2~3枚作成する。

次に、作成したプレパラートを観察し、解析を行う。プレパラートは光学顕微鏡下の400~1,000倍率で観察し、メカニカルステージによる帯分析を行う。通常は、木本花粉で100~150個の検定、計数を行い、同時に出現する草本花粉の検定、係数も行う。その後、各花粉の出現率（%表示）計算と花粉ダイヤグラムを作成する。

3) 分析結果

花粉化石の含有状況 今回の試料における微化石の残存状況は、表1のとおりである（植物遺体、炭化物は花粉分析用プレパラートを観察、珪藻、火山ガラス、植物珪酸体は花粉分析処理の残渣を観察）。花粉と植物遺体、植物珪酸体の検出量は、第7層より上位で多い。炭化物の検出量は第8層中位より下層で多い。また珪藻の検出量はすべての試料で比較的少なかった。火山ガラスは一定量検出されるが時代から二次的な堆積と考えられる。なお、花粉化石はすべての試料で検出されたが含有量が少ないため統計処理に十分な量を確保できない試料もある。

検出された花粉化石の種類は、計64種である（表2）。このほか、13種類の胞子化石も検出した。これらのうち、花粉組成を特徴づける種類は以下のとおりである。

①卓越木本花粉マツ属、コウヤマキ属、スギ属、アカガシ亜属

②卓越花粉・胞子（栽培種及び栽培の可能性があるものを含まない）

.....イネ科（40 μ 未満）、ヨモギ属、シノブ属、イノモトソウ科、オシダ科、チャセンシダ科

③栽培種及び栽培の可能性のある草本花粉（雑草を多く含む分類は、高率のもののみ示す）

.....ソバ属、イネ科（40 μ 以上）、アカザ科ヒユ科、キク亜科（ゴボウ、フキ、チシャ、アザミなど）

以上のうち、イネ科花粉を粒径から（40 μ 以上）と（40 μ 未満）の種類に区分したのは以下の理由による。稲作がおこなわれる以前の自然堆積層では、イネ科（40 μ 未満）の花粉が高率となることはあるが、イネ科（40 μ 以上）花粉が高率となることはほとんどない。これに対し、稲作が広範に行われだしたと考えられる弥生時代以後では、自然堆積層においてもイネ科（40 μ 以上）花粉の含有が顕著となる。水田など稲作遺構では、多くの場合イネ科（40 μ 以上）花粉が高率で検出される。イネ科（40 μ 以上）花粉のすべてがイネ属ではないが、弥生時代以後に高率で検出される事実から、その多くはイネ属に由来すると考えられている。

各地点における花粉化石群集の特徴 花粉化石群集の時間的変遷を明確にするため、地点ごとにその特徴を記述する。3区南壁地点では、第9層、第8層下層の花粉化石は含有量が少なく、花粉化石を検出することができなかった。また胞子の割合がおよそ50%を占めた。ただし、木本花粉の出現傾向は、上位の第7層や第8層上層とほぼ同様で、コウヤマキ属をはじめとする針葉樹が高率を占め、広葉樹ではアカガシ亜属が10~14%と特徴的に検出された。草本類、藤本類では、イネ科（40 μ 未満）、ヨモギ属が高率を示す。胞子では、オシダ科チャセンシダ科が71~114%と高率を示すほか、シノブ属、イノモトソウ属が20~30%の出現率を示す。

第7層と第8層上層では、コウヤマキ属をはじめとする針葉樹が高率を占め、第7層ではマツ属（複雑管束亜属）が増加する。また、広葉樹ではアカガシ亜属が高率を示す。草本花粉、藤本花粉では、イ

ネ科（40 μ 未満）、イネ科（40 μ 以上）が高率を示す傾向にある。第8層上層では、さらにカヤツリグサ科やアカザ科ヒユ科、キク亜科、ヨモギ属の出現率も高い。胞子では、オシダ科チャセンシダ科が60%程度と高率を示すほか、シノブ属、イノモトソウ属が10~20%の出現率を示す。

第3層~第6層では、コウヤマキ属のほか、モミ属、ツガ属、スギ属が減少傾向を示し、マツ属（複雑管束亞属）が増加傾向を示す。広葉樹ではアカガシ亜属が第5層下層から第6層にかけて増加し、その後は21~26%と安定した出現率を示す。草本花粉では、イネ科（40 μ 以上）が69~133%と高い出現率を示す。また定率ではあるが、ソバ属が第3層、第4層、第5層下層で出現する。

3区トレーニングの壁地点では、第8層と第9層より試料を採取したが、ともに花粉化石の含有量が少なく、統計処理に十分な木本花粉化石が検出できなかった。また、胞子の割合が73%を占めた。ただし木本花粉の出現傾向は、南壁地点の第9層とほぼ同様で、コウヤマキ属をはじめとする針葉樹が高率を占め、広葉樹ではアカガシ亜属が21%と特徴的に検出された。草本化石、藤本化石では、イネ科（40 μ 未満）、ヨモギ属がその他の種類に比べて効率を示す。胞子ではオシダ科チャセンシダ科のほか、シノブ属、イノモトソウ属が93~274%と高い出現率を示す。第8層上層ではスギ属が24%、アカガシ亜属が22%と高率を示し、コウヤマキ属は16%に止まった。草本花粉および藤本花粉では、イネ科（40 μ 未満）、イネ科（40 μ 以上）が40%程度の出現率を示すほか、ヨモギ属が18%と続く。胞子は第9層に比べて定率で、オシダ科チャセンシダ科の27%が最も高い出現率である。

4) 考察

局地花粉帶の設定 以上の分析結果と堆積層との対比を基準として、局地花粉帶（I帶・II帶）を設定した（図62 ダイアグラム右端列に明示）。それぞれの特徴を時代の古い層準から示す。

〔II帶〕 南壁地点の第9層~第7層と、トレーニング壁地点第8層上層・第9層が相当する。出土遺物からは、縄文時代晚期~奈良時代の植生を表すと考えられる。

コウヤマキ属をはじめとする針葉樹が高率を占め、広葉樹を上回る。広葉樹では、アカガシ亜属が高率を示す。ただし、トレーニング壁地点の第8層上層では、スギ花粉の出現率がコウヤマキ属を上回る。これらのうち、下位にあたる南壁地点第9層と第8層下層、トレーニング壁地点の第9層では花粉化石の含有量が少ないとから、d亜帶として設定した。南壁地点の第8層中層と第7層は、ほぼ同じ組成を示すが、地層対比ではこの間にトレーニング壁第8層上層が入るため南壁地点の第8層中層をc亜帶、第8層上層をb亜帶、南壁地点の第7層をa亜帶とした。

同時代における周辺遺跡との比較を試みると、西南西に2.6km離れた地点に位置する西大井遺跡において実施された、縄文時代後期から現代に至るまでの花粉分析が好例となる。今回のII帶に相当する時期の西大井遺跡では、アカガシ亜属が高率を示し、コウヤマキ属は低率であるなど類似した結果を示さない。このため、今回得られた花粉化石群集は、大県郡条里遺跡周辺での局地的な植生を示していると考えられる。

〔I帶〕 南壁地点の第6層~第3層が相当する。出土遺物から、古代~中世中期の植生を表していると考えられる。木本花粉はコウヤマキ属のほか、モミ属、ツガ属、スギ属が減少傾向を示しており、マツ属（複雑管束亞属）が増加傾向を示す。広葉樹では、アカガシ亜属が第6層から第5層下層にかけて増加し、安定した出現率を示す。上記と同じく西大井遺跡との比較では、マツ属（複雑管束亞属）の緩やかな増加傾向とアカガシ亜属の減少が認められること、またコウヤマキ属が低率で、スギ属が10%程度の出現率を示すこと等、今回の分析結果と類似した組成を示す。このことから、今回得られたI帶の

花粉化石群集は、Ⅱ帯に比べて広範囲の植生を示していると考えられる。

花粉分析結果からみた耕作 今回の調査では畦畔遺構の検出から、第3層～第6層は耕作土と考えられる。これらの層では、イネを含む可能性が高いイネ科（40 μ 以上）花粉が69%以上と高率で検出された。また、いくつかの層では栽培種のソバに由来するソバ属も検出されている。さらに、水田雑草として知られるサジオモダカ属、オモダカ属、イネ科（40 μ 未満）、キカシグサ属、セリ科、アザザ属等も検出されていることから、これらの層準が水田耕作土であった可能性は高い。ソバは裏作や畦畔等で栽培されていたと考えられる。

第7層・第8層上層・第8層中層でも上層に比べて低率ではあるが、イネ科（40 μ 以上）花粉は35～46%と高い出現率を示す。さらに水田雑草であるオモダカ属、イネ科（40 μ 未満）、キカシグサ属、セリ科、アザザ属等も検出されることから、これらの層準が水田耕作である可能性は高い。

一方、第8層下層と第9層は、花粉化石の含有量が少なく、イネ科（40 μ 以上）花粉の出現割合も低率である。胞子の割合が高いこと、炭化物の含有量が多いことから、土壤化の影響が示唆される。

調査地周辺の古植生 以上の分析結果及び考察を踏まえて、調査地周辺の古植生を時代ごとに推定する。

〔繩文時代晚期～奈良時代〕 木本花粉に比べて草本花粉、藤本花粉の割合が高いことから、遺跡近辺には草地が広がり、森林はやや離れた遺構間山地山麓から高所にかけて存在したと推測される。生駒山地の山麓から山腹には、カシ類を主体とする照葉樹林が茂り、山腹から山頂にかけてはコウヤマキやツガ、モミを主体とする温帶針葉樹林（いわゆる中間温帯林）が分布していたと考えられる。また生駒山地を削り込む谷筋に小規模ながらスギ林が存在していたと考えられる。Ⅱ帯c亜帯、a亜帯では、コウヤマキ、ツガの出現率が西大井遺跡に比べて高く、局地的な植生を示す可能性があることから、これらの時期にコウヤマキやツガが山麓の照葉樹林に混生していた可能性がある。

Ⅱ帯b亜帯では、前後のa帯、c帯に比べ、スギ属やアカガシ亜属が高率で、コウヤマキ属、ツガ属が低率を示す。このため、一時的に照葉樹林やスギ林が拡大した可能性が考えられる。ただし、コウヤマキ属やツガ属花粉は土壤化作用への耐性が強いため、堆積環境化により過大または過小に表れた可能性を考慮する必要がある。

遺跡周辺の低地植生を見ると、Ⅱ帯d亜帯（繩文時代晚期～弥生時代中期）では、花粉、胞子化石の由来について不確定な要素が多い。得られた花粉と胞子化石が堆積時の植生を表しているとすると、調査地は細砂やシルトが堆積する湿地で、ヨシ等が繁茂していたと推測される。一方、近辺にはやや乾燥した場所も多く、チガヤ（イネ科）、ササ類（イネ科）、ヨモギ類やイノモトソウ科でも日当たりを好むオクマワラビやゲジゲジシダなどのシダ類が生育していたと考えられる。

c亜帯（弥生時代後期？～古墳時代後期）は水田環境にあり、水田内や近辺にヨシが繁茂していたと考えられる。また、オモダカ類、カヤツリグサ類やキカシグサ類などの水田雑草も多く生育していたと考えられる。さらに、アカザ科ヒユ科やキク亜科が高率を示すことから、近辺で畑作が行われ、アカザやヒユ、チシャなどの野菜が栽培されていた可能性も指摘できる。また、チガヤ、ササ類、ヨモギ類やイノモトソウ科でも日当たりを好むワラビやヒメウラジロ、オシダ科でも日当たりを好むオクマワラビやゲジゲジシダなどのシダ類が生育していたと考えられる。

b亜帯（古墳時代後期）は、水田環境下にあり、イネ科のエノコログサ類、オモダカ類やカヤツリグサ類等の水田雑草も多く生育していたと考えられる。近辺にはやや乾燥した場所も見られ、チガヤ、サ

サ類、ヨモギ類やオシダ科でも日当たりを好むオクマワラビやゲジゲジシダなどのシダ類が生育していたと考えられる。

a 亜帯（奈良時代）もまた水田環境にあったと考えられる。イネ科のエノコログサ類、サジョモダカ類やカヤツリグサ類などの水田雑草も多く生育していたと考えられる。近辺には、やや乾燥した場所も見られ、チガヤ、ササ類、オシダ科でもオオクマワラビやゲジゲジシダなどのシダ類が生育していたと考えられる。

〔古代～中世中期〕 前時代同様に、木本花粉に比べて草本、藤本花粉の割合が高いことから、遺跡近辺には草地（水田）が広がり、林はやや離れた生駒山地山麓から高所に分布していたと推測される。

生駒山地の山麓から山腹にはカシ類を主体とする照葉樹林が、山腹から山頂にかけてはコウヤマキ、ツガ、モミを主体とする温帶針葉樹林が分布していたと考えられる。また、谷筋には小規模ながらスギ林が存在していたと考えられる。木本花粉の含有量が徐々に減少し、マツ属（複雜管束亞属）が増加傾向を示すことから、温帶針葉樹林は急激に、照葉樹林やスギ林は徐々に縮小し、アカマツ林が拡大した可能性が高い。

遺跡の近隣は、水田環境下にあったと考えられる。水田内や水路内、その近辺にはヨシが繁茂し、サジオモダカ類、オモダカ類、カヤツリグサ類やキカシグサ類、チドメグサ類（セリ科）、アザザ等の水田雑草も多く生育していたと考えられる。さらにソバ属が検出されたことから、近辺で畑作がおこなわれていたと思われる。なお、アカザやヒユ、チシャ等の野菜が栽培されていた可能性もあるが、出現率が低いことから、その可能性は低い。そのほか、ススキ類やチガヤ類、ササ類、ヨモギ類の生育していたものと推測される。

5) 小結

大県郡条里遺跡発掘調査に伴う花粉分析の結果、以下の点が明らかとなった。

- ①花粉分析の群集状況により局地花粉帶（I帯・II帯）を設定し、近隣の調査事例（西大井遺跡）と比較した。その結果、平安時代以後の状況は類似するが、それ以前は大きく異なることが明らかとなった。大県郡条里遺跡の周辺には、湿地帯を含む草地が広がっていたと考えられる。
- ②イネ科花粉の粒径差により、縄文時代晩期には、イネを栽培していないかった可能性がある。
- ③遺跡周辺の植生については、奈良時代と平安時代の間を二期として、森林が縮小し、アカマツ林が広がるようになったと考えられる。なお、平安時代以後は、水田や畑地が連続して経営されており、イネのほか、ソバ、アカザ、ヒユ、チシャ等の栽培が為されていたと考えられる。

【参考文献】

- 青葉 高 2000a 『青葉高著作選Ⅰ 日本の野菜』八坂書房 p.311
青葉 高 2000b 『青葉高著作選Ⅱ 野菜の日本史』八坂書房 p.317
川崎地質株式会社 1995 「西大井遺跡（93年度調査）における花粉・珪藻分析」「西大井遺跡 一大和川下流東部流域 下水事業大井処理場建設に伴う発掘調査報告書一」（財）大阪府文化財調査研究センター
中村 順 1974 「イネ科花粉について、とくにイネを中心として」『第四紀研究』13 p187-197

第3節 植物珪酸体分析

1) 植物珪酸体分析の原理

植物珪酸体は、植物の細胞内に珪酸 (SiO_4) が蓄積したもので、植物が枯れたあともガラス質の微化石（プラント・オパール）となって土壤中に半永久的に残る。植物珪酸体分析は、この微化石を遺跡土壤などから検出して同定・定量する方法であり、イネをはじめとするイネ科栽培植物の同定および古植生・古環境の推定などに応用されている〔杉山2000〕。また、イネの消長を検討することで、埋蔵水田跡の検証や探査を行うことも可能である〔藤原・杉山1984〕。

2) 分析の方法

分析試料は、花粉分析と同様、3区南壁とトレント壁において確認した第3層～第9層までの層準から採取された計12点である。

植物珪酸体の抽出と定量は、ガラスピーズ法〔藤原1976〕を用いて、次の手順で行った。

- 1) 試料の乾燥 ……試料を 105°C で24時間乾燥させる（絶乾）。
- 2) ピーズの添加 ……試料約 1 g に対し、直徑約 $40\ \mu\text{m}$ のガラスピーズを約 0.02 g 添加する（0.1 mg の精度で秤量）。
- 3) 脱有機物処理 ……電気炉灰化法（ $550^{\circ}\text{C} \cdot 6$ 時間）による脱有機物処理を行う。
- 4) 超音波照射 ……超音波水中照射（ $300\text{ W} \cdot 42\text{ KHz} \cdot 10$ 分間）によって分散させる。
- 5) 微粒子の除去 ……沈底法による $20\ \mu\text{m}$ 以下の微粒子を除去する。
- 6) 封入 …………封入剤（オイキット）中に分散してプレパラートを作成する。
- 7) 検鏡・計数

同定は、400 倍の偏光顕微鏡下で、おもにイネ科植物の機動細胞由来する植物珪酸体を対象として行った。計数は、ガラスピーズ個数が 400 以上になるまで行った。これはほぼプレパラート 1 枚分の精査に相当する。試料 1 gあたりのガラスピーズ個数に、計数された植物珪酸体とガラスピーズ個数の比率をかけて、試料 1 g 中の植物珪酸体個数を求めた。

また、主な分類群についてはこの値に試料の仮比重（1.0 と仮定）と各植物の換算係数（機動細胞珪酸体 1 個あたりの植物体乾重）をかけて、単位面積で層厚 1 cmあたりの植物体生産量を算出した。これにより各植物の繁茂状況や植物間の占有割合などを具体的に捉えることができる〔杉山2000〕。

なお、タケ亜科については植物体生産量の推定値から各分類群の比率を求めた。

3) 分析結果

検出された植物珪酸体の分類群は以下のとおりである。これらの分類群について定量を行い、その結果を表3および図63に示す。

- ①イネ科 ………………イネ、ヨシ属、シバ属型、キビ属型、ススキ属型（おもにススキ属）、ウシクサ族A（チガヤ属等）
- ②イネ科—タケ亜科 …メダケ節型（メダケ属メダケ節・リュウキュウチク節・ヤダケ属）、ネザサ節型（おもにメダケ属ネザサ節）、チマキザサ節型（ササ属チマキザサ節・チシマザサ節等）、ミヤコザサ節型（ササ属ミヤコザサ節等）、未分類
- ③イネ科—その他 ……表皮毛起源、棒状珪酸体（おもに結合組織細胞由来）、未分類等

④樹木 ブナ科（シイ属）、クスノキ科、その他

4) 考察

稻作跡の検討 稲作跡（水田跡）の検証や探査を行う場合、一般にイネの植物珪酸体（プラント・オーバール）が試料1 gあたり5,000個以上と高い密度で検出された場合に、そこで稲作が行われていた可能性が高いと判断されている（杉山2000）。なお、密度が3,000個/g程度でも水田遺構が検出される事例があることから、ここでは判断の基準を3,000個/gとして検討を行う。

3区では、第3層から第9層までの層準から採取された土壤について分析を行った結果、すべての試料からイネが検出された。このうち第3層では密度が4,800個/g、第4層では4,300個/g、第5層上層では3,800個/g、第6層では3,400個/g、第7層では3,300個/g、第8層上層では4,100個/g、第9層では4,200個/gおよび3,400個/gと比較的高い値である。したがって、これらの層準では稲作が行われていた可能性が高いと考えられる。

表2 植物珪酸体分析結果

検出密度（単位：×100個/g）

分類群	学名	1	2	3	4	5	6	7	9	10	11	12	13
イネ科	Gramineae												
イネ	Oryza sativa	48	43	35	23	34	33	21	13	42	7	41	34
ヨシ属	Phragmites	21	6	7	12	14		7		14	7		13
シバ属型	Zoysia type	7											
キビ属型	Panicum type						7				14		7
ススキ属型	Miscanthus type	14	12	7	6								
ウシクサ族A	Andropogoneae A type	35	19	7	6	14	26	14	13	7	35	14	20
タケ科	Bambusoideae												
メダケ節型	Pleioblastus sect. Nipponocalamus	21	6	7	6	27	26	21	26	35	7	14	13
ネザサ節型	Pleioblastus sect. Nezasa	69	118	69	129	75	79	100	128	83	91	82	107
チマキザサ節型	Sasa sect. Sasa etc.	21	6	7	6	14	7	14	19	14	14	14	7
ミヤコザサ節型	Sasa sect. Crassinodii	7	19	14	12	7	7	7	13	7	14	14	13
未分類等	Others	69	81	62	35	75	46	50	89	69	49	55	67
その他のイネ科	Others												
表皮毛起源	Husk hair origin	14	12	14	18	20	13	14	26	7	7	7	7
棒状珪酸体	Rodshaped	35	12	62	59	48	112	50	45	28	70	48	40
未分類等	Others	173	161	145	235	197	217	214	160	257	168	192	235
樹木記録	ArboREAL												
ブナ科（シイ属）	Castanopsis	7	12	7	6	7	13	7			7	7	
クスノキ科	Lauraceae	14	12	14	12	14	20	14	13	28	7	21	7
その他	Others	48	12	7	6	20	20	14	19	14	14	27	20
(海綿骨管)	Sponge spicules					14	6	20					13
植物珪酸体総数	Total	601	534	464	570	572	619	550	562	603	510	541	583

おもな分類群の推定生産量

（単位：kg/m²・cm）：試料の仮比重を1.0と仮定して算出

イネ	Oryza sativa	1.42	1.28	1.02	0.69	1.00	0.97	0.63	0.38	1.22	0.21	1.21	0.99
ヨシ属	Phragmites	1.31	0.39	0.44	0.74	0.86		0.45			0.88	0.44	0.85
ススキ属型	Miscanthus type	0.17	0.15	0.09	0.07								
メダケ節型	Pleioblastus sect. Nipponocalamus	0.24	0.07	0.08	0.07	0.32	0.31	0.25	0.30	0.40	0.08	0.16	0.16
ネザサ節型	Pleioblastus sect. Nezasa	0.33	0.57	0.33	0.62	0.36	0.38	0.48	0.61	0.40	0.44	0.39	0.51
チマキザサ節型	Sasa sect. Sasa etc.	0.16	0.05	0.05	0.04	0.10	0.05	0.11	0.14	0.10	0.10	0.10	0.05
ミヤコザサ節型	Sasa sect. Crassinodii	0.02	0.06	0.04	0.04	0.02	0.02	0.02	0.04	0.02	0.04	0.04	0.04

タケ植物の比率（%）

メダケ節型	Pleioblastus sect. Nipponocalamus	32	10	16	9	40	41	29	27	43	12	23	20
ネザサ節型	Pleioblastus sect. Nezasa	44	76	66	81	45	50	56	56	43	66	57	68
チマキザサ節型	Sasa sect. Sasa etc.	21	6	10	6	13	7	13	13	11	16	15	7
ミヤコザサ節型	Sasa sect. Crassinodii	3	8	8	5	3	3	3	4	2	6	6	5
メダケ率	Medake ratio	76	86	82	90	85	91	85	83	87	78	79	88

その他の第5層下層、第8層中層、第8層下層では、密度が700～2,300個/gと比較的低い値である。イネの密度が低い原因としては、稲作が行われていた期間が短かったことや、土層の堆積速度が速かったこと、採取地点が畦畔などの耕作面以外であったこと、および上層や他所からの混入などが考えられる。なお、畑稲作（陸稲栽培）の場合は、連作障害や地力の低下を避けるために輪作を行ったり休閑期間をおく必要があるため、イネの密度は水田跡と比較してかなり低くなり、1,000～2,000個/g程度である場合が多い〔杉山2000〕。

イネ科栽培植物の検討 植物珪酸体分析で同定される分類群のうち栽培植物が含まれるものには、イネ以外にもムギ類、ヒエ属型（ヒエを含む）、エノコログサ属型（アワを含む）、キビ属型（キビを含む）、ジュズダマ属型（ハトムギを含む）、オヒシバ属（シコクヒエを含む）、モロコシ属型、トウモロコシ属型などがあるが、これらの分類群はいずれの試料からも検出されなかった。

イネ科栽培植物の中には検討が不十分なものもあるため、その他の分類群の中にも栽培種に由来するものが含まれている可能性が考えられる。これらの分類群の給源植物の究明については今後の課題したい。なお、植物珪酸体分析で同定される分類群は主にイネ科植物に限定されるため、根菜類などの畑作物は分析の対象外となっている。

植物珪酸体分析から推定される植生と環境 上記以外の分類群の検出状況と、そこから推定される植生環境についても検討を加えておきたい。下位の第9層では、ネザサ節型が比較的多く検出され、ヨシ

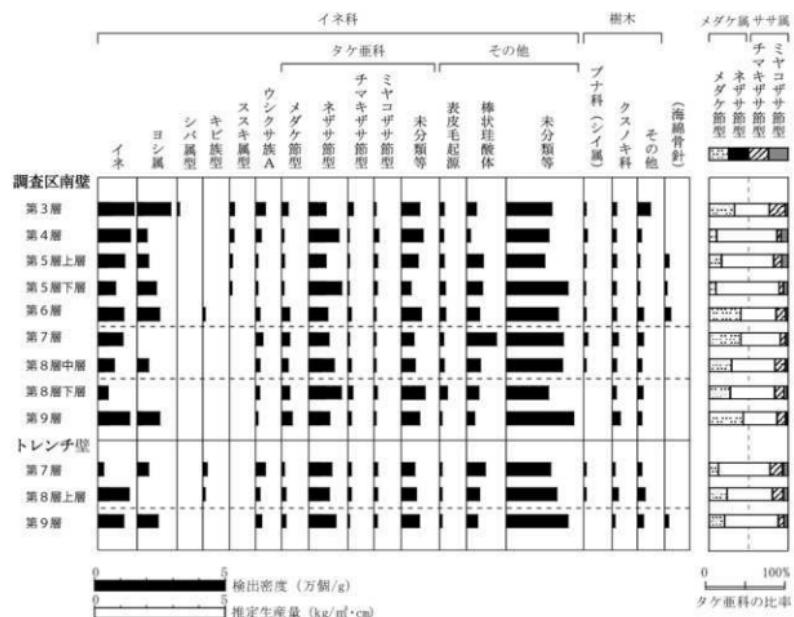


図48 植物珪酸体分析検出グラフ

属やウシクサ族A、メダケ節型、チマキザサ節型、ミヤコザサ節型、およびクスノキ科などの樹木も認められた。第8層中層・上層、第7層からは、ブナ科（シイ属）が出現し、部分的にキビ族型も認められた。第6層から第3層にかけても、おおむね同様の結果であるが、第5層より上位ではスキ属型、第3層ではシバ属型が出現している。なお、各層準で植物珪酸体の組成や密度にとくに明瞭な変化は認められなかった。おもな分類群の推定生産量によると、イネおよびネザサ節型が優勢であり、部分的にヨシ属も多くなっている。

以上の結果から、下位の第9層（縄文時代晚期）の堆積当時は、ヨシ属が生育するような湿潤な環境であったと考えられ、そこを利用して水田稲作が行われていた可能性が考えられる。また、周辺の比較的乾燥したところにはメダケ属（おもにネザサ節）などの竹笹類をはじめウシクサ族なども生育しており、遺跡周辺にはクスノキ科などの樹木（照葉樹）が分布していたと考えられる。

その後、第8層（奈良時代）から第3層（中世後期）にかけても、おおむね同様の状況であったと考えられるが、第8層より上位では周辺でシイ属、第5層（中世前期）より上位ではスキ属、第3層ではシバ属なども見られるようになったと推定される。

5) 小結

大郡郡条里遺跡発掘調査に伴う植物珪酸体分析の結果、以下の結論を得ることができた。

- ①第3層（中世後期）、第4層（中世後期）、第5層（中世前期）、第6層（平安時代後期）、第7層（平安時代）、第8層（奈良時代）、第9層（縄文時代晚期）では、イネが比較的多量に検出され、それぞれ稲作が行われていた可能性が高いと判断された。
 - ②各層準の堆積当時は、おおむねヨシ属が生育するような湿潤な環境であったと考えられ、そこを利用して水田稲作が行われていたと推定される。また、周辺の比較的乾燥したところにはメダケ属（おもにネザサ節）などの竹笹類をはじめウシクサ族なども生育し、遺跡周辺にはクスノキ科やシイ属などの樹木（照葉樹）が分布していたと推定される。
- ただし、今回の分析では、縄文時代晚期とされる第9層でもイネが検出されていることから、地点数や試料数を増やすなど、さらに詳細な分析調査が必要と考えられる。

【参考文献】

- 杉山真二・藤原宏志 1986 「考古学と自然科学」19「機動細胞珪酸体の形態によるタケア科植物の同定—古環境推定の基礎資料として—」 p.69-84.
- 杉山真二 1999 「第四紀研究」38(2)「植物珪酸体分析からみた九州南部の照葉樹林発達史」 p.109-123
- 杉山真二 2000 「考古学と植物学」「植物珪酸体（プラント・オパール）」同成社 p.189-213
- 藤原宏志 1976 「考古学と自然科学」9「プラント・オパール分析法の基礎的研究(1) —数種イネ科植物の珪酸体標本と定量分析法—」 p.15-29
- 藤原宏志・杉山真二 1984 「考古学と自然科学」17「プラント・オパール分析法の基礎的研究(5) —プラント・オパール分析による水田址の探査—」 p.73-85

第5章 まとめ

以上、大県郡条里遺跡の調査成果と自然科学分析結果について報告した。最後に、既往の調査成果とともに遺構面の変遷を整理し、まとめとしたい。以下、時代ごとに記述する。

縄文時代晚期後半（図49上段）

土器様式では、長原式に相当する。今回検出した遺構面では、第9面に相当する。遺構面は東半部が尾根状に張り出しており、南西に緩やかに下がる。北東部は調査区内でもっとも標高が高く、T.P.+10.7m以上である。その等高線に沿うように、北西から南東方向に274溝が設けられる。南東部には竪穴建物や土坑、ピットが検出された。274溝から北東側には不定形に曲がる溝や落込み、ピット、土坑がある。ピットは多数検出されたが、建物の復元はできていない。274溝より西は大きく落ち込んでおり、遺構は希薄となる。

これら遺構の検出状況から、この時代の調査区内では、微高地にあたる東半部を居住域として利用していたことが推測される。また低地にあたる西半部ではヨシやチガヤ、シダ類が繁茂していたと考えられる。植物珪酸体分析では稲作の可能性も示されてたが、その可否については今後の成果を待ちたい。

弥生時代前期～古墳時代前期（図49下段）

調査区南東部から北、北西方向へ流れる溝を多数検出した。溝の主軸は、縄文時代晚期とは異なり、微高地のもっとも高い部分を通る。溝は複数切り合っており、幾度も掘りなおされたことがわかる。その流れが緩やかであることから、排水や給水等の機能を考えられる。

調査区南部には粗砂の流入が認められることから、洪水に見舞われたことが想定される。

奈良時代（図50上段）

調査区内において明確に水田が確認される時期である。畦畔は前代の溝群の方向軸に沿って設けられている。旧地形に即して水田開発を行った結果であろう。一方、調査区北辺部では、東西方位を意識した区画の整備が始まっている。

このため、当該時期は方位を意識した水田

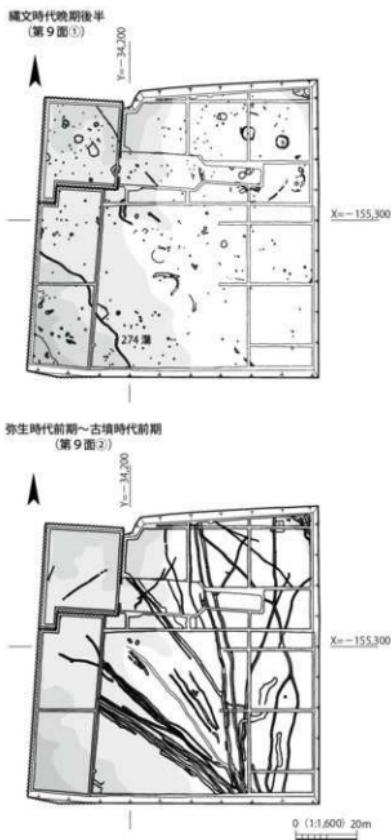


図49 遺構変遷図（1）

区画への過渡期として捉えることができる。

平安時代後期（図50中段）

条里型水田が整備される時期である。旧地形に起因する畦畔は払拭され、畦畔は東西南北を指向する。畦畔間の拡幅はあるものの基本的に南北方向に主畦畔を設け、その間を小畦畔が段違いにつなぐ形となる。

集落の存在は確認できていないが、墨書きもつ土器が出土することから、近隣において識字層の起居があったことが推測される。

中世後期（図50下段）

条里型水田が完成し、安定存続する時期である。ただし、洪水砂の流入は頻繁に起こっており、富への転作も行われている。

周辺は広範囲にわたって水田開発が進んでいたと考えられる。既往の調査では穀類のほかナスやアズキの栽培種子が検出されたが、今回の調査ではソバの花粉も検出された。遺構の検出とあわせて、稲作と畑作が並行して行われていたことが改めて示された。

出土遺物

今回の調査で出土した遺物は、コンテナに換算して総数24コンテナである。そのうち、7コンテナ分312点を掲載している。

概ね、中世以降の遺物が過半数を占め、水面面およびそれを覆う包含層のため、小破片が多く完形のものはほとんど含んでいない。

次いで、古代・古墳時代のものである。これらは、上層では中世の遺物と共に、下層では弥生土器および縄文土器と共に伴するものである。

弥生時代の遺物は、少なく小破片であるため、実態が把握できるものが少ない。

縄文時代の遺物は、第8層以下で出土するが、単独で出土するのは第9層からである。



図50 遺構変遷図（2）

表3 遺物観察表(土器) 1

掲番号	写真図版番号	調査区画・層構名	器種	口径 高さ 側径 底径	最大厚	色 調	時期	残存率	調整・形態の特徴など
8-1	15-1	1-1区 第0層	施釉陶器 皿	(6.5) (1.5) — —	0.4	外) 5Y6/1灰 内) 7.5Y6/1灰 断) 2.5Y8/3淡黄	中世以降	30%	外面、指面圧痕残す。 内外面口縁部に施釉。瑠れ砂付着。 唐津産?
8-2	15-1	1-1区 第0層	施釉陶器 椀	(1.3) — (5.1)	0.5	内・外) 10YR8/2灰白 断) 2.5Y8/2灰白	中世以後	—	内外面ともに施釉。ケズリ高台。底部 下面に「婆・花」の押印あり。 瀬戸美濃産?
8-5	15-1	1-3区 第1面	土師器 皿	(7.8) 1.9 — —	0.5	2.5Y7/2灰黄	中世後期	25%	内外面ヨコナデ・ナデ。底部外面に指 面圧痕残す。 内外面に焼付着。
8-6	15-1	1-1区 第1面	土師器 灯明皿	(7.8) (1.6) — 2.9	0.3	内・外) 10YR8/2灰白 断) 2.5Y2/1黒	中世後期	10%	外道ナデ。内面ナデ。 口縁部内外面に油滴付着。 底部に指面圧痕残す。
8-7	15-1	1-3区 第1面	土師器 皿	(8.0) 1.8 — —	0.5	外) 2.5Y5/1黄灰 内) 2.5Y6/3にぶい黄 断) 2.5Y7/2灰黄	中世後期	20%	内外面ヨコナデ・ナデ。底部外面に指 面圧痕残す。 内面に焼付着。
8-8	—	1-1区 第1面	土師器 椀	(10.2) (2.6) — —	0.5	外) 2.5Y7/1灰白 内) 2.5Y5/1黄灰 断) 2.5Y7/2灰黄	中世前期	20%	内外面ヨコナデ・ナデ。底部外面に指 面圧痕残す。内面輕いミガキ。
8-9	15-1	1-3区 第1面	土師器 皿	(11.8) 2.5 — —	0.5	内・外) 10YR3/1黒褐 断) 10YR6/3にぶい黄褐	中世後期	10%	内外面ヨコナデ・ナデ。
8-10	15-1	1-3区 第1面	瓦質土器 擂鉢	5.0 — —	1.5	7.5YR6/4にぶい橙	中世前期	5%	外面ハケ、ケズリ。 内面ヨコナデ・ナデ。 擂目あり。
8-11	15-1	1-2区 第1面	陶器 椀	(—) (2.4) — (4.8)	1.1	内・外) 5Y8/2灰白 断) 2.5Y8/2灰白	中世以降	5%	外面・内面ともに施釉。高台内張形。 底部下面に墨書きあり「+」。 唐津産
8-12	15-1	1-2区 第1面	陶器 椀	(7.8) 3.9 — (3.0)	0.7	外) 10YR1.7/1黒 内) 2.5Y2/1黒 断) 10YR7/3にぶい黄褐	中世後期	25%	外面・内面ともに施釉。 瀬戸・美濃産天目
8-15	15-1	1-1区 第1層	土師器 皿	(14.0) (2.8) — —	0.7	2.5Y8/2灰白	中世後期	10%	内外面ヨコナデ・ナデ。外面体部に指 面圧痕残す。
8-16	15-1	1-3区 第1層	土師器 皿	(13.2) 2.2 — —	0.7	内・外) 2.5Y6/2灰黄 断) 10YR6/2灰黄褐	中世後期	15%	内外面ヨコナデ・ナデ。外面体部に指 面圧痕残す。 黒斑あり。
8-17	—	1-3区 第1層	瓦質土器 擂鉢	— 4.0 — —	1.3	外) 2.5Y6/2灰黄 内) 10YR6/3にぶい黄褐 断) 2.5Y7/2灰黄	中世前期	5%	外面ハケ・ケズリ。 内面ナデ。 擂目あり。
8-18	15-1	1-2区 第1層	瓦質土器 擂鉢	(27.8) (6.5) — —	1.2	外) 7.5Y4/1灰 内・断) 5Y7/1灰白	中世前期	10%	外面ハケ、工具によるナデ。 内面ナデ、ハケメ状のナデ。 擂目あり。
10-23	15-2	1-1区 第2層	土師器 皿	(8.4) (1.9) — —	0.4	5Y7/1灰白	中世後期	20%	内外面ヨコナデ・ナデ。体部外面に指 面圧痕残す。
10-24	15-2	1-2区 第2層	土師器 皿	(8.8) (2.1) — —	0.4	外) 5YR7/6橙 内) 10YR7/3にぶい黄褐 断) 10YR8/2灰白	中世後期	10%	内外面ヨコナデ・ナデ。体部外面に指 面圧痕残す。
10-25	15-2	1-2区 第2層	土師器 皿	(10.2) 1.8 — —	0.5	外) 10YR8/3にぶい黄褐 内・断) 10YR5/1褐灰	中世前期	30%	内外面ヨコナデ・ナデ。体部外面に指 面圧痕残す。 打明鑑
10-26	15-2	1-1区 第2層	土師器 皿	(10.4) (2.0) — —	0.5	10YR6/3にぶい黄褐	中世前期	15%	内外面ヨコナデ・ナデ。体部外面に指 面圧痕残す。
10-27	15-2	1-1区 第2層	瓦器 椀	(>10.2) (3.0) — —	0.4	内・外) N3/0暗灰 断) 5Y7/1灰白	中世前期	15%	外面ヨコナデ。指面圧痕残す。 軽いラセンミガキ。

表3 遺物観察表（土器）2

揮因番号	写真 図版 番号	調査区 面・層 遺物名	器種 器形	口径高 脚径底径	最大 厚	色 調	時期	残存率	調整・形態の特徴など
10-28	15-2	1-1区 第2層	瓦器 桶	(>11.2) (3.0) —	0.4	内・外) N4/0 灰 断) N8/0 灰白	中世前期	20%	外面ヨコナデ・ナデ。指頭圧痕残す。 内面糊いミガキ。 底部にラセン状文。
10-29	—	1-3区 第2層	土師質 土器 羽釜	— — —	1.1	内・外) 10YR7/2にぶい黄褐 断) 7.5YR7/3にぶい橙	中世前期	5%	口縁部、外方へ折り曲げ玉縁状に肥厚。 内外面ヨコナデ・ナデ。 内面に煤付着。
10-30	15-2	1-3区 第2層	土師質 土器 羽釜	— 1.9 —	0.5	外) 5YR7/3にぶい橙 内) 5YR6/4にぶい橙 断) 5YR7/2明褐色	中世前期	5%	口縁部外方へ折り曲げ。 内外面ヨコナデ。
10-31	15-2	1-2区 第2層	土師器 二つフタ 羽釜	(13.0) (3.1) —	0.4	外) 2.5Y7/2灰黄 内) 2.5Y8/1灰白 断) 2.5Y8/1灰白	中世後期	10%	内外面ヨコナデ・ナデ。体部に指頭圧痕残す。
10-32	15-2	1-2区 第2層	粢食器 こね跡	(27.0) (4.8) —	1.1	10Y5/1 灰	中世前期	10%	内外面ヨコナデ・ナデ。 束縛。
10-33	15-2	1-1区 第2層	白磁 皿	— (0.8) (7.8)	0.5	内・外) 10Y8/1灰白 断) 2.5GY8/1灰白	—	10%	外面・内面ともに施釉。 釉内に気泡あり、釉厚ムラあり。 外面に粘土塊付着。
12-39	15-2	1-3区 第3面 405土坑	土師器 皿	(>7.5) 1.1 (6.6)	0.4	内・外) 5Y7/2灰白 断) 2.5Y5/3 黄褐	中世前期	20%	内外面ヨコナデ・ナデ。体部外面に指頭圧痕残す。
12-40	16-1	1-1区 第3面	土師器 灯明皿	(7.8) (0.9) —	0.4	2.5Y4/2暗灰黄	中世前期	20%	内外面ヨコナデ・ナデ。 底部内面に指頭圧痕残す。 内面に油滴付着。
12-41	16-1	1-2区 第3面	土師器 皿	(>10.5) 1.8 —	0.6	2.5Y6/2灰黄	中世後期	10%	外面ヨコナデ・ハケ後ナデ。 底部外面にヘラの当たりあり。 内面ヨコナデ・ナデ。
12-42	16-1	1-1区 第3面	土師器 桶	(11.3) (2.8) —	0.4	5Y7/1 灰白	中世前期	10%	内外面ヨコナデ・ナデ。体部外面に指頭圧痕残す。 内面糊いミガキ。
12-43	16-1	1-1区 第3面	瓦器 桶	(>12.4) (3.1) —	0.5	外・断) 5Y7/1灰白 内) 5Y4/1灰	中世後期	15%	外面ヨコナデ。体部外面に指頭圧痕残す。 内面糊いミガキ。
12-44	16-1	1-1区 第3面	土師器 皿	(15.0) (2.5) —	0.6	内・外) 2.5Y6/3にぶい黄 断) 5YR6/4にぶい橙	中世前期	5%	内・外面ヨコナデ・ナデ。体部外面に指頭圧痕残す。
12-45	16-1	1-1区 第3面	瓦器 桶	(>12.6) (2.9) —	0.5	5Y8/1 灰白	中世後期	10%	外面ヨコナデ。表面圧痕残す。 内面糊いミガキあり。 和泉型。
12-46	16-1	1-1区 第3面	瓦器 桶	(>11.5) (3.6) —	0.4	内・外) N4/0 灰 断) 2.5Y7/1灰白	中世後期	15%	外面ナデ。指頭圧痕残す。 内面糊いミガキ。 椭圓型。
12-47	16-1	1-1区 第3面	瓦質土器 羽釜	— (4.3) —	1.9	外) N3/0暗灰 内) 5Y6/1灰 断) 5Y7/1灰白	中世後期	5%	内外面ヨコナデ・ナデ。 口縁に焼成前穿孔あり。 三足釜か。
12-51	16-1	1-1区 第3層	土師器 皿	(7.3) 1.4 —	0.5	2.5Y7/2灰黄	中世前期	25%	内外面ヨコナデ・ナデ。底部外面に指頭圧痕残す。
12-52	16-1	1-1区 第3層	土師器 皿	(>9.1) 1.7 —	0.5	外・断) 2.5Y6/2灰黄 内) 5Y6/2灰オリーブ	中世前期	25%	内外面ナデ。指頭圧痕残す。
12-53	16-1	1-1区 第3層	土師器 皿	(9.5) 1.8 —	0.5	9.5) 2.5Y6/2灰黄 内) 7.5YR6/4にぶい橙 断) 10YR7/2にぶい黄柏	中世前期	15%	外面ヨコナデ・ナデ。底部外面に指頭圧痕残す。
12-54	16-1	1-1区 第3層	土師器 皿	9.7 1.4 —	0.4	10YR7/4にぶい黄柏	中世前期	50%	内外面ヨコナデ・ナデ。底部外面に指頭圧痕残す。

表3 遺物観察表(土器)3

掲番号	写真 図版 番号	調査区 面・層 構名	器種 器形	口径 底径 厚径	最大 厚	色 調	時期	残存率	調整・形態の特徴など
12-55	16-1	1-2区 第3層	土師器 灯明皿	(9.6) 1.7 —	0.4	外) 5Y4/1 灰 内) 2.5Y6/2 灰黄 断) 5Y6/2 灰オーピー	中世前期	20%	内外面ナデ。底部外面指頭圧痕残す。 内面に黒色付着。
12-56	16-2	1-2区 第3層	瓦器 皿	(9.9) 1.9 —	0.5	外) 5Y6/1 灰 内) 5Y3/1 オリーブ黒 断) 5Y8/1 灰白	中世前期	10%	内外面ナデ。底部外面指頭圧痕残す。 底部内面に粗いミガキあり。
12-57	16-2	1-3区 第3層	瓦器 皿	(9.5) (1.6) — —	(1.6)	7.5Y6/1 灰	中世前期	25%	外面ナデ。指頭圧痕残す。 内面粗なミガキ。 底部内面に格子状暗文。
12-58	16-2	1-3区 第3層	土師器 羽釜	3.3 — —	1.4	外) 7.5YR6/4 にぶい粉 内・断) 10YR6/2 灰黄褐	中世前期	5%	内外面ナデ。口縁部外方へ折曲げて肥厚。
12-59	16-1	1-2区 第3層	土師器 皿	(15.0) (2.5) —	0.4	内・外) 10YR7/3 にぶい黄褐 断) 2.5Y5/1 灰灰	中世前期	15%	外面ナデ。指頭圧痕残す。 内面ハケ後ナデ。 口縁端面に浅削り1条。
12-60	16-1	1-2区 第3層	土師器 皿	(17.0) (2.8) —	0.5	内・外) 2.5Y7/2 灰黄 断) 2.5Y5/1 黄灰	中世前期	25%	外面ナデ。指頭圧痕残す。 内面ハケ後ナデ。 口縁端方に外方へのびる。
12-61	16-2	1-2区 第3層	土師質 土器 羽釜	(3.9) — —	0.6	内・外) 10YR7/3 にぶい黄褐 断) 2.5Y6/1 黄灰	中世前期	10%	内外面ナデ。口縁部外方へ折り曲げ、 玉和型。
12-62	16-2	1-3区 第3層	青磁 碗	(15.5) 4.8 —	0.7	軸) 10Y7/2 灰白 断) N8/0 灰白	中世前期	10%	内外面施釉。口縁部端面齊滅あり。 釉間に気泡あり。
12-63	16-2	1-1区 第3層	瓦器 椀	(14.0) (5.2) —	0.7	外) N3/0 脱灰 内) N2/0 増灰 断) 2.5Y7/1 灰白	中世前期	20%	外面ナデ。指頭圧痕残す。 内面ナデ。粗いミガキあり。破損後被熱?
12-64	16-2	1-2区 第3層	瓦器 椀	(>12.0) 3.2 —	0.35	5Y7/1 灰白	中世後期	20%	外面ナデ。指頭圧痕残す。 内面ナデ。粗いミガキあり。
12-65	16-2	1-3区 第3層	瓦器 椀	(>13.0) 2.6 —	0.5	5Y7/1 灰白	中世後期	10%	外面ナデ。指頭圧痕残す。 内面ナデ。粗いミガキあり。
12-66	16-1	1-1区 第3層	黒色土器 椀	(1.3) (8.2)	1.2	内・外) N2/0 黑 断) 5Y5/1 灰	中世前期	5%	底部内外面、滑なミガキ。 黒色土器B類。
12-67	16-2	1-1区 第3層	須恵器 こね跡	(30.8) (4.5) —	0.9	外・断) N6/0 灰 内) N1.5/0 黑	中世前期	5%	内外面回転ナデ。
12-68	16-2	1-3区 第3層	須恵器 こね跡	— 4.9 (10.4)	1.2	7.5Y6/1 灰	中世	10%	外面回転ナデ。指頭圧痕残す。 内面磨滅。
12-69	16-2	1-3区 第3層	青磁 皿	— 2.0 — 4.4	1.5	軸) 10Y7/2 灰白 内) 7.5YR6/4 にぶい粉 断) N8/0 灰白	中世	—	外面施釉。豊付け露胎。 内面回転ナデ。 底部中央部厚みを増す。
12-70	16-2	1-3区 第3層	青磁 皿	— 0.8 (4.6)	0.7	内・外) 5Y7/1 灰白 断) 5Y5/4 オリーブ	中世前期	—	外面施釉。底部外面露胎。 線文文様あり。 略門清窓系。
12-71	16-2	1-3区 第3層	瓦質土器 三足釜	— 13.4 —	2.2	10Y4/1 灰灰	中世	—	外面ナデ。 先端部磨滅あり。
12-72	16-2	1-3区 第3層	土製品 土鍋	— 5.3 — 1.4	—	2.5Y6/2 灰黄	中世	100%	外面面ナデ。指頭圧痕残す。
14-82	17-1	1-2区 第4層	瓦器 皿	(9.5) (1.5) — —	0.45	外) N3/0 脱灰 内) N4/0 灰 断) 5Y8/1 灰白	中世前期	15%	外面ヨコナデ。 内面粗にミガキあり。底部内面に格子状暗文。

表3 遺物観察表（土器）4

揮因番号	写真 図版 番号	調査区 面・層 遺構名	器種 器形	口径 器高 脚径 底径	最大 厚	色 調	時期	残存率	調整・形態の特徴など
14-83	17-2	1-1区 第4層	土師器 製埴土器	— — —	—	2.5Y7/3 浅黄	中世	—	外面指頭圧痕残す。 内面ナデ。 84と同一個体？
14-84	17-2	1-1区 第4層	土師器 製埴土器	— — —	—	2.5Y7/3 浅黄	中世	—	外面指頭圧痕残す。 内面ナデ。 83と同一個体？
14-85	17-2	1-1区 第4層	土師器 脚付皿	(2.7) — 5.0	1.0	外) 10YR7/4にぶい黄相 内) 5Y7/1灰白 断) 7.5YR6/2灰褐	平安時代	—	内外面ナデ。 破損後焼付着。
14-86	17-2	1-1区 第4層	須恵器 环	— (1.6) (9.0)	0.5	外・断) 2.5YR4/2灰赤 内) 5PB5/1青灰	平安時代	—	内外面回転ナデ。 底部外側に墨書き(○)。
14-87	17-2	1-1区 第4層	土師器 皿	(8.8) (1.8) —	0.5	5Y7/2 灰白	中世前期	20%	内外面ナデ。指頭圧痕残す。 口縁部外面に焼付着。
14-88	17-1	1-1区 第4層	土師器 皿	(19.0) (1.4) —	0.4	内・外) 10YR6/3にぶい黄相 断) 5YR6/6相	中世前期	25%	内外面ナデ。指頭圧痕残す。
14-89	17-1	1-1区 第4層	土師器 皿	(12.0) (1.9) —	0.6	9) 5YR6/6相 内) 5YR6/4にぶい相 断) 5YR5/3にぶい赤褐	中世前期	10%	内外面ナデ。底部外面指頭圧痕残す。
14-90	17-2	1-1区 第4層	土師器 皿	(14.4) (2.6) —	0.5	10YR7/3にぶい黄相	中世前期	20%	外面2段ナデ。指頭圧痕残す。 内面ナデ。
14-91	17-2	1-1区 第4層	土師器 皿	(14.4) (3.1) —	0.6	10YR6/3にぶい黄相	中世前期	25%	外面2段ナデ。指頭圧痕残す。 内面ナデ(横・縦)。
14-92	17-1	1-2区 第4層	瓦器 椀	— (2.1) (7.0)	0.7	内・外) N4/0灰 断) 5Y8/1灰白	中世前期	—	外面ナデ。底部外面に線刻1条あり。 内面にミガキあり。 底部内面に格子状暗文。
14-93	17-1	1-1区 第4層	瓦器 椀	(16.0) (4.9) —	0.45	内・外) N4/0灰 断) 10YR8/1灰白	中世前期	15%	外面ナデ。粗いミガキ。 指頭圧痕残す。 内面密なミガキ。 底部斜格子暗文。
14-94	17-1	1-1区 第4層	瓦器 椀	(13.1) (4.4) —	0.4	内・外) N3/0暗灰 断) 2.5Y8/1灰白	中世前期	10%	外面ナデ。粗いミガキあり。 指頭圧痕残す。 内面やや密にミガキあり。 底部内面に格子状暗文。
14-95	17-1	1-2区 第4層	瓦器 椀	(15.2) (4.3) —	0.35	9) N3/0暗灰 内) N4/0灰 断) 5Y8/1灰白	中世前期	20%	外面ナデ。粗いミガキあり。 指頭圧痕残す。 内面、密にミガキあり。 底部内面に格子状暗文。
14-96	17-1	1-2区 第4層	瓦器 椀	(13.0) (3.4) —	0.5	内・外) N4/0灰 断) 2.5Y8/1灰白	中世前期	10%	外面ナデ。粗いミガキあり。 指頭圧痕残す。 内面やや密にミガキあり。 底部内面に格子状暗文。
14-97	17-1	1-1区 第4層	瓦器 椀	(12.9) (3.2) —	0.4	内・外) N4/0灰 断) 7.5Y7/1灰白	中世前期	15%	外面ナデ。指頭圧痕残す。 内面まばらなミガキあり。 和泉型。
14-98	17-1	1-1区 第4層	瓦器 椀	(1.4) — 5.0	0.5	7.5Y7/1灰白	中世前期	40%	外面ナデ。 底部内面に格子状暗文あり。 和泉型。
14-99	17-1	1-2区 第4層	瓦器 椀	(1.4) — (5.2)	0.6	9) N3/0暗灰 内) N5/0灰 断) 7.5Y8/1灰白	中世前期	10%未満	外面ナデ。指頭圧痕残す。 内面格子状暗文あり。
14-100	17-1	1-3区 第4層	青磁 碗	— — —	0.6	9) 5Y5/4 オリーブ 断) 5Y7/1灰白	中世前期	10%	外面無地。底部施釉。線刻文様あり。 内面無地。線刻文様あり。 嘎門式窓系。
14-102	17-1	1-3区 第4層	平瓦	10.6 6.7 —	1.9	内・外) 5Y5/1灰 断) 7.5Y6/1灰	—	10%	外面シダ模様のタキあり。 内面均圧痕あり。 焼付着。

表3 遺物観察表(土器)5

掲番号	写真回数	調査区画・層構名	器種	口径高径厚	最大厚	色 調	時期	残存率	調整・形態の特徴など
16-105	19-2	1-1区 第5層	瓦器 皿	(>9.4) (2.3) —	0.45	内・外) N3/0暗灰 断) 5YB/1灰白	中世前期	20%	外面ナデ。底部外面に指頭圧痕残す。 内面ミガキ。底部内面に格子状暗文。 船型。
16-106	18-1	1-3区 第5層	土師器 皿	(16.3) 4.1 —	0.7	釉) 7.5YB/1灰白 断) N8/0灰白	平安時代 後期	80%	内外面ナデ。底部外面指頭圧痕残す。 「て」の字
16-107	18-1	1-3区 第5層	土師器 皿	9.1 1.5 — —	0.4	2.5Y7/2灰黄	平安時代 後期	80%	内外面ナデ。底部外面指頭圧痕残す。 口縁部端面に次線1条あり。 「て」の字
16-108	19-1	1-2区 第5層	土師器 皿	(9.7) (1.2) — —	0.5	2.5Y7/3浅黄	平安時代 後期	20%	内外面ナデ。底部外面指頭圧痕残す。 「て」の字
16-109	18-1	1-1区 第5層	土師器 皿	(9.4) (2.1) — —	0.5	10YR8/3浅黄橙	平安時代 後期	90%	内外面ナデ。底部外面指頭圧痕残す。 「て」の字
16-110	18-1	1-1区 第5層	土師器 皿	(10.1) (1.9) — —	0.5	2.5Y8/2灰白	平安時代 後期	25%	内外面ナデ。底部外面指頭圧痕残す。 「て」の字
16-111	19-1	1-2区 第5層	土師器 皿	(10.4) (1.7) — —	0.4	2.5Y7/2灰黄	平安時代 後期	15%	内外面ナデ。底部外面指頭圧痕残す。 「て」の字
16-112	18-1	1-2区 第5層	土師器 皿	11.6 3.3 — —	0.4	2.5Y7/2灰黄	中世後期	80%	内外面ナデ。底部外面指頭圧痕残す。
16-113	19-2	1-1区 第5層	瓦器 皿	(9.9) (2.2) — —	0.5	内・外) N2/0黒 断) 5YB/1灰白	中世前期	10%未満	内外面密にミガキ。 底部内面にジグザグ状暗文あり。
16-114	19-2	1-1区 第5層	瓦器 皿	(10.2) (2.3) — —	0.4	7.5Y7/1灰白	中世前期	20%	外面密にミガキ。 底部内面にジグザグ状暗文あり。
16-115	18-1	1-1区 第5層	瓦器 皿	10.2 2.4 — —	0.4	外) N3/0暗灰 内) N4/0灰 断) 2.5Y8/1灰白	中世前期	75%	内外面密にミガキ。 底部内面にジグザグ状暗文あり。
16-116	19-2	1-1区 第5層	瓦器 椀	(1.6) — 7.1	1.3	外) N3/0暗灰 内) N4/0灰 断) 2.5Y8/1灰白	中世前期	10%	底部のみ。外面ナデ。 内面密にミガキ。 底部内面にジグザグ状暗文あり。
16-117	19-2	1-1区 第5層	瓦器 椀	— (2.0) (5.1)	0.6	内・外) N3/0暗灰 断) N8/0灰白	中世前期	10%	底部のみ。外面ナデ。 底部内面に格子状暗文あり。
16-118	18-1	1-2区 第5層	土師器 高环	— (8.4) —	0.8	内・外) 7.5Y7/4にぶい相 断) 2.5Y8/1灰白	古墳後期	40%	脚部のみ。表面質しい。 外面ミガキ。指頭圧痕。 内面ナデ。上部に絞り目。
16-119	19-1	1-1区 第5層	土師器 甕	18.5 (3.5) —	1.0	10YR5/3にぶい黄褐	中世前期	—	内外面ナデ。底部外面指頭圧痕残す。 内面板状ナデ。颈部に保有着。
16-120	19-2	1-1区 第5層	瓦器 椀	(15.9) (4.0) —	0.5	内・外) N2/0黒 断) 2.5Y8/1灰白	中世前期	20%	内外面密にミガキ。
16-121	19-2	1-1区 第5層	瓦器 椀	(>14.0) (4.2) —	0.5	内・外) N2/0黒 断) 2.5Y8/1灰白	中世前期	10%	内外面密にミガキ。 底部内面に平行暗文あり。 大和型。
16-122	19-2	1-2区 第5層	瓦器 椀	(>15.3) (4.0) —	0.4	内・外) N3/0暗灰 断) 7.5Y8/1灰白	中世前期	10%	外面粗いミガキ。指頭圧痕残す。 内面密にミガキ。
16-123	19-2	1-1区 第5層	瓦器 椀	(>14.2) (4.3) —	0.5	内・外) N2/0黒 断) 7.5Y8/1灰白	中世前期	10%	内外面密にミガキ。

表3 遺物観察表（土器）6

接着番号	写真回数	調査区分 面・層 遺物名	器種 器形	口径 高さ 底径 底径	最大 厚	色 調	時期	残存率	調整・形態の特徴など
16-124	19-2	1-1区 第5層	瓦器 椀	(1.7) — (7.9)	0.5	外) N3/D 浅灰 内) 10Y2/1 黒 断) 2.5Y8/1 灰白	中世前期	—	底部のみ。外面ナデ 内面ミガキ。ジグザグ状暗文あり。 和室型。
16-125	19-1	1-1区 第5層	黑色土器 椀	(2.0) — (7.0)	0.6	外) 2.5Y7/2 浅黄 内・断) 2.5Y3/1 黒褐	平安時代 後期	—	内外面ミガキ。 底部外面にヘラ記号「×」。 黒色土器 A類。
16-126	19-2	1-1区 第5層	瓦器 椀	(>12.9) (4.4) — —	0.5	内・外) N4/0 灰 断) 7.5Y8/1 灰白	中世前期	15%	内外面密にミガキ。
16-127	19-1	1-1区 第5層	土師器 椀	(>13.5) (4.0) — —	0.6	外) 2.5Y7/3 浅黄 内) 2.5Y7/2 浅灰 断) 10Y8R/2 灰白	平安時代 後期	20%	外面亂いミガキ。指添注痕残す。 内面密にミガキ。
16-128	19-2	1-2区 第5層	瓦器 椀	(>13.6) (4.1) — —	0.5	内・外) 7.5Y3/1 オリーブ黒 断) 5Y8/1 灰白	中世前期	20%	内外面密にミガキ。底部外面に指添注 痕残す。底部内面に格子状暗文あり。 和室型。
16-129	18-1	1-2区 第5層	瓦器 椀	(15.5) (5.5) — (6.9)	0.4	外) N3/D 浅灰 内) N4/0 灰 断) 5Y8/2 灰白	中世前期	50%	内外面密にミガキ。 和室型。
16-130	19-1	1-1区 第5層	黑色土器 椀	(1.9) — (7.2)	0.5	外) 7.5Y2/1 黒 内) N2/D 黑 断) 10Y8T/2 ぶい黄相	平安時代 後期	—	底部のみ。外面ナデ。 内面密にミガキ。 黒色土器 B類。
16-131	18-1	1-1区 第5層	土師器 三つわ 高环	(3.2) — — 3.1	0.7	2.5Y7/3 浅黄	平安時代	50%	脚部のみ。手捏ね。 内外面指ナデ。指添注痕残す。
16-132	19-2	1-2区 第5層	瓦器 椀	(1.7) — (7.0)	0.5	内・外) N3/D 浅灰 断) 2.5Y8/2 灰白	中世前期	—	底部のみ。外面ナデ。 底部外周に線刻り「×」。 内面ミガキ。
16-133	19-1	1-1区 第5層	須恵器 环身	(1.4) — (12.2)	0.1	N4/0 灰	平安時代	—	底部のみ。 底部外面、回転面切り。 内面回転ナデ。
16-134	19-1	1-1区 第5層	土師器 羽釜	(5.5) — —	1.3	2.5Y5/3 黄褐	平安時代 後期	—	内外面ナデ。 脚下部に保付着。 生駒西麓産。
16-135	19-1	1-1区 第5層	土師器 羽釜	(5.1) — —	0.1	外) 2.5Y5/2 浅灰黄 内・断) 2.5Y6/2 灰黄	平安時代 後期	—	内外面ナデ。 脚下部に保付着。 生駒西麓産。
16-136	—	1-3区 第5層	白磁 碗	(16.3) 4.1 — —	0.7	釉) 7.5Y8/1 灰白 断) N8/0 灰白	中世前期	10%	内外面施釉。 気泡あり。
16-137	18-1	1-1区 第5層	土師器 灯明皿	(14.9) 3.3 — —	0.6	内・外) 2.5Y5/2 浅灰黄 断) 2.5Y7/2 灰黄	中世前期	40%	内外面ナデ。底部外面指添注痕残す。 煤・油滴付着。
16-138	19-1	1-2区 第5層	土師器 皿	— — — —	0.5	外) 10Y4/3/にぶい黄褐 内・断) 2.5Y6/3 にぶい黄	—	—	内外面ナデ。 外面底部指添注痕残す。 外面に墨書き「脚」または「安」?
16-139	18-1	1-1区 第5層	土師器 脚付皿	(3.7) — (12.0)	1.0	2.5Y6/2 灰黄	中世前期	—	脚部のみ。外面ナデ。粘土塊付着。底 部外周に工具痕あり。 内面ハケ。
16-140	18-1	1-1区 第5層	須恵器 壺	(3.6) — (10.7)	1.2	内・外) N7/0 灰白 断) N7/0 灰白 内) 10Y6/2 オリーブ灰	平安時代	—	底部のみ。須恵器壺 L 外面回転ナデ。自然輪付着。底部外 面墨書き。転用窓か。
18-147	20-1	1-3区 第6層	須恵器 环蓋	(3.6) (3.6) — —	0.4	外・断) N6/0 灰 内) 5PB6/1 青灰	平安時代	10%	内外面回転ナデ。 縫合の跡跡あり。墨付着。 転用窓?
18-148	20-1	1-3区 第6層	須恵器 小型壺	(3.6) (3.6) — —	0.4	外) N5/0 灰 内・断) 5PB5/1 青灰	平安時代	10%	内外面回転ナデ。

表3 遺物観察表(土器)7

拂団番号	写真回版番号	調査区面・層位名	器種 器形	口径高 径底径	最大厚	色 調	時期	残存率	調整・形態の特徴など
18-149	20-1	1-2区 第6層	須恵器 环	(14.9) 5.2 — (11.0)	0.6	N4/0灰	平安時代	10%	須恵器杯 B。 内外面回転ナデ。
18-150	21-1	1-3区 第6層	須恵器 环	(15.6) 3.5 — 12.3	0.5	2.5GY6/1 オリーブ灰	平安時代	50%	須恵器杯 B。 内外面回転ナデ。
18-151	—	1-2区 第6層	須恵器 环	(3.6) — (7.8)	0.8	内・外) 5PB5/1 青灰 断) 5YR6/4 にぶい相	奈良時代	30%	須恵器環 A。 内外面回転ナデ。 底外側引出転バタケゼリ。
18-152	22-1	1-3区 第6層	須恵器 壺	(18.6) — 4.9	0.7	外) N5/0灰 内) N7/0灰白 断) 7.5R5/3にぶい赤褐	平安時代	70%	須恵器壺 C。 内外面回転ナデ。底部に 自然輪付着。底部底切り未調整。 「堅魚袋汁壺」
18-153	20-1	1-3区 第6層	須恵器 壺	(3.3) — 5.1	0.6	N6/0灰	平安時代 後期	20%	須恵器壺 A。 内外面回転ナデ。 底部外面に縦付着。
18-154	20-1	1-3区 第6層	須恵器 环	(1.3) — —	0.5	N5/0灰	平安時代	—	須恵器杯 B。 内外面回転ナデ。 縦付着。
18-155	20-1	1-3区 第6層	須恵器 环	(0.8) — —	0.6	外) N6/0灰 内) 7.5Y6/1灰 断) SYR2/1 黒褐	平安時代	10%	須恵器杯 A。 内外面ナデ。内面墨付着。外面上に火 ழ기의変色部分あり。
18-156	20-1	1-3区 第6層	須恵器 跡 or 壺	(2.3) — (5.9)	1.3	N7/0灰白	平安時代	—	底部のみ。 外側回転ナデ。底部外面に糸切痕有 り。内面墨ナデ。墨付着。
18-157	20-1	1-2区 第6層	須恵器 短頸壺	(12.2) (2.2) — —	5.5	内・外) N7/0灰白 断) 2.5GY3/1暗オリーブ灰	—	—	短頸壺 A。内外面回転ナデ。 自然輪付着。蓋の着崩し、釉温り有 り。
18-158	21-1	1-1区 第6層	須恵器 台付壺	(4.0) — (18.4)	0.8	内・外) 5Y8/1灰白 断) 5Y7/1灰白	平安時代	—	外面上平行タカキ後ナデ。 内面ナデ。工具あり。 四山がつくタイプか?
18-159	21-1	1-2区 第6層	須恵器 环	(2.7) — (10.8)	0.7	N6/0灰	平安時代	—	須恵器杯 B。 内外面回転ナデ。底部外面にヘラ状工 具痕複数あり。
18-160	21-1	1-2区 第6層	須恵器 提瓶	(6.7) (4.3) —	1.2	内・外) N4/0灰 断) N8/0灰白	平安時代	—	L上縁部のみ開化。 外側回転ナデ後力キロ。 内面當て具瓶後ナデ。
18-161	20-1	1-2区 第6層	須恵器 長頸壺	(8.5) (6.9) — —	1.0	外) 2.5GY4/1暗オリーブ灰 内) N6/0灰 断) N7/0灰白	平安時代	—	長頸壺 or 提瓶。 外側回転ナデ後力キロ。 内面回転ナデ。指頭圧痕。
18-162	21-1	1-1区 第6層	須恵器 横腹	(—) — —	—	NS/0灰 内・断) 5PB5/1 青灰	平安時代	—	L上縁部のみ開化。 外側回転ナデ。カキ目。内面回転ナ デ。底部に削崩圧痕。
18-163	20-2	1-2区 第6層	土師器 製塙土器	(4.5) — —	0.7	外) 2.5YB6/6 橙 内) 10YR7/3にぶい黄褐 断) 2.5Y6/6 明黃褐	平安時代	—	内外面沿ナデ。指頭圧痕残す。 底部裏面に外反。
18-164	20-2	1-2区 第6層	土師器 製塙土器	(3.5) — —	1.0	10YR8/3 浅黄褐	平安時代	—	内外面指ナデ。指頭圧痕残す。 粘土細繊ぎ目残す。
18-165	20-2	1-3区 第6層	土師器 壺	(16.9) 4.1 — —	0.6	10YR7/3にぶい黄褐	奈良～ 平安時代	—	外表面磨滅。 内面ナデ。 体の内面に墨付着。
18-166	20-2	1-2区 第6層	土師器 壺	(14.0) (4.6) — —	0.7	内・外) 2.5Y6/3 にぶい黄 断) 10YR4/4 褐	奈良～ 平安時代	10%	内外面ナデ。
18-167	21-1	1-2区 第6層	土師器 壺	(18.5) (4.3) — —	0.8	外・断) 10YR6/3にぶい黄 内) 10YR7/3にぶい黄褐	奈良～ 平安時代	—	L上縁部内凹して内包にわずかに肥厚し 端部をもつ。 内外面ナデ。指頭圧痕残す。

表3 遺物観察表（土器）8

種類番号	写真回数番号	調査区面・層・遺構名	器種 器形	口径高 削往復	最大厚	色 調	時期	残存率	調整・形態の特徴など
18-168	20-2	1-2区 第6層	土師器 皿	(>9.0) 1.9 — —	0.5	外) 2.5Y6/2 黄 内) 2.5Y4/1 黄灰 削) 10YR7/2/L-5/1 黄褐	平安時代	20%	土師器皿 C。 外面2段ナデ。 内面ナデ。
18-169	20-2	1-2区 第6層	土師器 皿	(9.9) 1.5 — —	0.6	外) 10YR6/2 黄 内) 斜 2.5Y7/2 黄	平安時代 後期	30%未満	内外面ナデ。底部外面指頭圧痕残す。
18-170	20-1 22-1	1-3区 第6層	須恵器 壺	— 2.4 — (9.9)	0.8	N5/0 黄	平安時代 後期	60%	須恵器皿 M. 壺。 内外面凹凸ナデ。底部糸切り痕あり。 内面に墨付着。
18-171	21-1	1-3区 第6層	土師器 三つア 蓋	— 4.7 — 6.4	0.9	内・外) 2.5Y6/3 にぶい黄 削) 5YR4/4 にぶい赤褐	奈良～ 平安時代	80%	内外面指ナデ。指頭圧痕残す。
18-172	21-1	1-3区 第6層	土師器 三つア 高环	— 3.2 — 3.3	0.5	2.5Y7/3 浅黄	奈良～ 平安時代	80%	脚部のみ 内外面指ナデ。指頭圧痕残す。
18-173	21-1	1-3区 第6層	土師器 三つア 高环	— 3.2 — (3.6)	0.4	10YR6/4 にぶい黄褐	奈良～ 平安時代	50%	脚部のみ 内外面指ナデ。指頭圧痕残す。
18-174	21-1	1-2区 第6層	土師器 三つア 高环	(3.5) — (3.5)	1.1	2.5Y7/3 浅黄	奈良～ 平安時代	50%	脚部のみ 内外面指ナデ。指頭圧痕残す。
18-175	21-1	1-2区 第6層	土師器 三つア 高环	— (3.0) 3.1	1.3	2.5Y7/2 黄	奈良～ 平安時代	40%	脚部のみ 内外面指ナデ。指頭圧痕残す。
18-176	20-2	1-1区 第6層	土師器 环	(14.0) (3.0) — —	0.5	外) 2.5Y6/3 にぶい黄 内・斜) 2.5Y7/2 黄	平安時代 後期	20%	内外面ナデ。底部外面指頭圧痕残す。
18-177	20-2	1-2区 第6層	土師器 环	(15.0) (3.5) — —	0.6	2.5Y7/2 黄	平安時代	10%	内外面ナデ。底部外面指頭圧痕残す。
18-178	20-2	1-3区 第6層	土師器 环	(16.9) 4.3 — —	0.7	内・外) 10YR7/4 にぶい黄褐 削) 5YR4/4 にぶい赤褐	奈良時代	20%	土師器皿 A。 外面ナデ。僅かにミガキ。内面磨滅。
18-179	20-2	1-1区 第6層	土師器 环	(12.4) 4.3 (5.8)	0.5	外) 2.5Y7/3 浅黄 内・斜) 5Y7/2 白	平安時代 後期	20%	内外面ナデ。体部外面指頭圧痕残す。
18-180	20-2	1-2区 第6層	黑色土器 椀	(2.8) — (6.8)	0.5	外) 10YR7/3 にぶい黄褐 内) 7.5Y2/1 黒 削) 5Y4/1 黄	平安時代 後期	20%	外面ナデ。指頭圧痕残す。 内面にミガキ。 黑色土器 A 梗。
18-181	20-2	1-1区 第6層	土師器 椀	— (1.7) — (5.3)	0.8	内・外) 2.5Y6/3 にぶい黄 削) 2.5Y7/3 浅黄	平安時代 後期	—	外面ナデ。 内面にミガキ。 工具による搔き傷あり。
18-182	—	1-3区 第6層	須恵器 环或蓋	(12.9) 4.2 — —	0.8	内・外) N5/0 黄 削) 5R5/1 白	古墳時代 後期	50%	外面削ヘラケズリ。 顶部に線刻あり「二」。 内面凹凸ナデ。天井部内面タタキ後ナデ。TK43。
18-183	—	1-2区 第6層	須恵器 环或蓋	— — — —	0.9	5PB6/1 青灰	古墳時代	10%	外面削ヘラケズリ。 顶部に線刻あり「×？」。 内面凹凸ナデ。
18-184	—	1-3区 第6層	須恵器 环或蓋	— — — —	0.8	N6/0 黄	古墳時代 後期	10%	外面削ヘラケズリ。 顶部に線刻あり「×」。 内面凹凸ナデ。
18-185	20-2	1-2区 第6層	土師器 椀	— — — —	0.5	2.5Y7/3 浅黄	—	—	外面ナデ。 内面に漆付着。
18-186	—	1-2区 第6層	土師器 碗？	— — — —	0.6	外) 5YR6/6 桃 内) 10YR3/1 黑褐 削) 10YR5/2 黄褐	—	—	内外面ナデ。指頭圧痕残す。 器壁外面に線刻あり「×」。

表3 遺物観察表（土器）9

捲回 番号	写真 回数	調査区 面・層 遺物名	器種 器形	口径 高さ 側径 底径	最大 厚	色　調	時期	残存率	調整・形態の特徴など
18-187	-	1-1区 第6層	須恵器 环	- - -	0.5	5PB6/1 青灰	-	-	外面回転ヘラケズリ。 頂部に線刻あり「-」。 内面回転ナデ。
18-188	21-1	1-3区 第6層	須恵器 环身	(13.8) (3.6) - -	0.9	N7/0 灰白	古墳時代 後期	20%	外面回転ナデ、ケズリ。 内面不定方向 のナデ。底部内面に擦着あり。 TK10。
18-189	20-1	1-2区 第6層	須恵器 环身	- (3.3) - -	0.6	N7/0 灰白	古墳時代 後期	10%	内外回転ナデ。 保有たは灰付着。 TK10。
18-190	21-1	1-3区 第6層	土師器 甕	5.5 9.3	1.3	外・断) 2.5YR5/6明赤褐 内) 10YR6/4にぶい黄褐	-	-	外面ナデ後ミガキ 内面ナデ。
18-191	20-2	1-2区 第6層	土師器 甕	(16.5) (2.3) -	0.6	外) 2.5Y3/2黒褐 内・断) 2.5Y4/3 オリーブ褐	古墳時代 後期	-	口縁部端部わざかに内包へ肥厚。 内面ナデ。口縁部外指頭圧痕 す。
18-192	21-1	1-2区 第6層	須恵器 高环	(11.7) (5.9) -	1.0	N7/0 灰白	古墳時代 後期	-	外面回転ナデ、ケズリ。 内面回転ナデ。 脚部3方に方形透かし。
18-193	20-2	1-2区 第6層	土製品 土鍋	3.8 -	1.4	外) 2.5Y5/1 黄灰 内) 7.5Y3/1 オリーブ黒 断) 2.5Y8/2 灰白	-	100%	外面磨滅。
18-195	21-1	1-1区 第6層	軒丸瓦	10.8 8.5 -	5.2	7.5Y6/1 灰	白鳳時代	-	複合蓮草文。
20-200	23-1	1-1区 第7層	須恵器 环蓋	(1.8) - -	0.5	5PB6/1 青灰	平安時代	-	須恵器環B蓋。 外面回転ナデ後カキ目。 内面タキナ後ナデ。
20-201	23-1	1-1区 第7層	須恵器 环蓋	- - -	-	外・断) 7.5Y7/1 灰白 内) N3/0 雪灰	-	-	外面回転ナデ。内面ナデ。 横引模跡あり。外面に墨画あり。内面 墨付着。
20-202	23-1	1-1区 第7層	須恵器 环蓋	(14.0) (1.7) -	0.8	外) N6/0 灰 内・断) N7/0 灰白	平安時代 後期	15%	須恵器蓋B。 内外面回転ナデ。 外面に墨書「〇」3点。
20-203	23-1	1-1区 第7層	須恵器 环蓋	(17.1) (2.0) -	0.9	外) 7.5GY3/1 明暗灰 内) N8/0 灰白 断) 5R5/1 赤灰	平安時代	15%	須恵器環B蓋 内外面回転ナデ。自然釉付着。
20-204	23-1	1-1区 第7層	須恵器 环蓋	(19.0) (2.2) -	0.7	内・外) N7/0 灰白 断) 2.5GY7/1 帽オリーブ灰	平安時代	10%	須恵器環B蓋。 内外面回転ナデ。 外面端部に墨付着。
20-205	-	1-1区 第7層	須恵器 环身	(12.0) 2.8 -	0.8	内・外) 5PB5/1 青灰 断) 5YR5/2 赤褐	古墳時代 後期	25%	外面回転ナデ、ケズリ。 内面底部タキナ後ナデ。 TK43。
20-206	-	1-2区 第7層	須恵器 环身	(13.8) (3.9) -	0.6	外) 5Y6/1 灰 内・断) 5Y7/1 灰白	古墳時代 後期	10%	外面回転ナデ、ケズリ。 内面回転ナデ。 TK10。
20-207	23-1	1-3区 第7層	須恵器 环	(3.6) - 3.6	0.7	外) 5Y5/1 灰 内) N5/0 灰 断) 7.5Y4/1 灰	奈良～ 平安時代	-	須恵器杯B。 内外面回転ナデ。 内面に墨付着。転用碗?
20-208	-	1-1区 第7層	須恵器 环蓋	- - -	1.0	N6/0 灰	古墳時代 後期	30%	外面回転ナデ、ケズリ。 内面底部タキナ後ナデ。 底部外面に線刻あり「×」。
20-209	-	1-1区 第7層	須恵器 环蓋	- - -	1.0	外・断) N8/0 灰白 内) 5Y8/1 灰白	古墳時代	30%	外面回転ナデ、ケズリ。 内面底部タキナ後ナデ。 底部外面に線刻あり「-」。
20-210	23-1	1-1区 第7層	須恵器 环蓋	- - -	0.8	5PB7/1 明青灰	古墳時代	15%	外面回転ナデ、ケズリ。 内面底部タキナ後ナデ。 底部外面に線刻あり「-」。

表3 遺物観察表（土器）10

揮因番号	写真版番号	調査区面・層	器種 器形	口径高 脚径底径	最大 厚	色 調	時期	残存率	調整・形態の特徴など
20-211	-	1-1区 第7層	須恵器 环盃	— — —	0.7	外) N5/0 灰 内・断) 5PB6/1 青灰	古墳時代	-	外面回転ナデ、ケズリ。 内面底部タキ後ナデ。 底部外面に縦割り「=」。
20-212	23-1	1-1区 第7層	須恵器 环盃	— — —	0.7	外) N6/0 灰 内・断) N7/0 灰白	古墳時代	30%	外面回転ナデ、ケズリ。 内面底部タキ前ナデ。 底部外面に縦割り「×」。
20-213	-	1-1区 第7層	須恵器 环盃	— — —	0.5	外) N5/0 灰 内・断) N7/0 灰白	古墳時代	-	外面回転ナデ、ケズリ。 内面底部タキ後ナデ。 底部外面に縦割り「—」。
20-214	-	1-2区 第7層	須恵器 环盃	(15.4) (4.0) —	0.8	外) N4/0 灰 内・断) N7/0 灰白	古墳時代 後期	30%	外面回転ナデ、ケズリ。 内面回転ナデ。 施着あり。TK10。
20-215	-	1-1区 第7層	須恵器 环盃	(13.0) (3.7) —	0.8	内・外) 5PB5/1 青灰 断) 5RP5/1 黑灰	古墳時代 後期	20%	外面回転ナデ、ケズリ。 内面回転ナデ。 TK43。
20-216	23-2	1-1区 第7層	須恵器 环身	(11.8) 5.2 — —	1.0	5PB6/1 青灰	古墳時代 中期	80%	外面回転ナデ、ケズリ。 内面底部タキ後ナデ。 TK47。
20-217	-	1-1区 第7層	須恵器 环身	(12.0) 4.3 — —	0.9	外) 5PB6/1 青灰 内・断) N7/0 灰白	古墳時代 中期	30%	外面回転ナデ、ケズリ。 内面底部タキ後ナデ。 TK208。
20-218	22-2	1-2区 第7層	須恵器 平瓶	(6.4) — —	0.8	N6/0 灰	平安時代	-	内外面回転ナデ。
20-219	22-1	1-3区 第7面	須恵器 壺	— 2.4 — (9.0)	0.8	N5/0 灰	平安時代 後期	60%	須恵器壺 M. 壺。 外面回転ナデ、内面回転ナデ。頸部に 絞りあり。内外面ともに施着。
20-220	21-1	1-2区 第7面	土師器 高环	(14.3) — —	1.3	2.5Y7/2 灰黄	平安時代	30%	脚部のみ。 外面へナデ面取り。内面へラ状工具 による粘土掻き取り。
20-221	22-2	1-2区 第7層	土師器 环	11.8 4.6 — —	0.5	内・外) 2.5Y7/3 浅黄 断) 7.5Y4/4 灰	飛鳥時代	100%	土師器杯 A. 外面ヘナデ面取り。ミガキ。 内面ヘナデ。段状模様ミガキ。
20-222	22-2	1-2区 第7層	弥生土器 甕	— (2.5) — 4.2	1.0	外) 7.5YR5/4 にぶい褐 内) 10YR6/6 明黄褐 断) 5YR5/6 明赤褐	弥生時代 飛鳥～古墳時代 初頭	-	底部のみ。 外側タキ。 内面ナデ。指跡痕残す。
20-223	22-2	1-1区 第7層	弥生土器 壺	— (2.3) — 8.4	1.5	外) 10YR5/2 灰黄褐 内・断) 10YR4/2 灰黄褐	弥生時代 中期	-	底部のみ。 信誠のため調整不明。
20-224	22-2	1-3区 第7層	弥生土器 甕	— (5.2) — (9.4)	1.6	外) 7.5Y5/3 橙 内) 2.5Y7/3 浅黄 断) 10YR7/2/にぶい黄褐	弥生時代 前頭～中期	-	底部のみ。 調離のため調整不明。
20-225	23-1	1-3区 第7層	弥生土器 甕	— 5.0 — (7.0)	1.0	外) 7.5YR5/3 にぶい褐 内・断) 10YR6/3 にぶい黄褐	弥生時代 前頭～中期	-	底部のみ。 調離のため調整不明。
20-226	22-2	1-2区 第7層	須恵器 甕	(26.0) (7.9) —	1.0	外) 5PB5/1 青灰 内・断) NG6/灰	奈良～ 平安時代	-	外面平行タキ後カキ目。 自然剥付着。 内面同心タタキ。ナデ。
20-227	-	1-1区 第7層	黒色土器 椀	(14.4) (2.8) —	0.4	外) 10YR7/3/にぶい黄褐 内) 7.5Y2/1 黑 断) 5Y2/1 黑	平安時代 後期	-	外面磨滅。 内面密にミガキ。
20-228	-	1-1区 第7層	土師器 組	(14.9) (3.4) —	0.6	2.5Y6/3 にぶい黄	平安時代	15%	外面ナデ。指跡痕残す。 内面磨滅。
20-229	22-2	1-2区 第7層	土師器 小型丸底盆	(10.8) (6.5) —	0.7	外) 2.5YR5/6 明赤褐 内・断) 7.5YR6/6 棕	古墳時代 前期初頭	50%	庄内式(末期) 外面ミガキ。 内面ナデ。

表3 遺物観察表(土器)11

拂団番号	写真回版番号	調査区面・層道構名	器種 器形	口径高 径底	最大厚	色 調	時期	残存率	調整・形態の特徴など
20-230	22-2	1-3区 第7層	秀生土器 甕	(2.8) — (8.8)	1.1	外) 7.5YR5/4 にぶい黄 内) 10YR6/4 にぶい黄相 断) 10YR4/2 灰黄褐	秀生時代 前期	10%	底部のみ。 剥離のため調整不明。
20-231	23-1	1-1区 第7層	土師器 甕	(5.2) — —	0.8	内・外) 2.5Y6/3 にぶい黄 断) 7.5YR4/4 黄	奈良 ～ 平安時代	—	内外面ナデ。指頭圧痕残す。
20-232	22-2	1-3区 第7層	土師器 甕	13.1 (6.8)	0.5	内・外) 2.5Y6/3 にぶい黄 断) 5Y7/3 浅黄色	平安時代 後期	10%	外面ハケ後ナデ。 内面ナデ。
20-233	23-1	1-3区 第7層	縄文土器 深鉢	— (7.7) —	0.6	外) 2.5Y5/2 暗灰黄 内・断) 2.5Y5/1 黒灰	縄文時代 晚期終末	—	内面磨滅。指頭圧痕残す。 口縁部に刻目突帯文。放射状の線割あり。 長原式。235と同一個体?
20-234	23-1	1-3区 第7層	縄文土器 深鉢	— 3.7 —	0.6	外) 2.5Y5/3 黄褐 内) 10YR5/2 灰黄褐 断) 10YR3/1 黒褐	縄文時代 晚期終末	—	内面磨滅。指頭圧痕残す。 放射状の線割あり。 長原式。
20-235	23-1	1-3区 第7層	縄文土器 深鉢	— (7.7) —	0.6	外) 2.5Y5/2 暗灰黄 内・断) 2.5Y5/1 黒灰	縄文時代 晚期終末	—	内面磨滅。指頭圧痕残す。 口縁部に刻目突帯文。放射状の線割あり。 長原式。233と同一個体?
20-236	23-1	1-1区 第7層	縄文土器 深鉢	(4.5) —	0.5	外) 10YR4/2 灰黄褐 内・断) 2.5Y2/1 黑	縄文時代 中期	—	口縁部端部外面に巻貝による圧痕。 船元式
25-244	23-3	1-2区 第8層	土師器 甕	(16.0) 3.5 —	0.5	外) 10YR6/2 灰黄褐 内) 10YR7/3 にぶい黄相 断) 10YR5/1 褐灰	古墳時代 前期	10%	口縁部のみ。 内外面ナデ。 布留式
25-245	23-2	1-2区 第8面 302溝	土師器 甕	(16.8) (10.1) —	0.6	内・外) 5YR6/8 相 断) 10YR5/3 にぶい黄褐	奈良 ～ 平安時代	25%	内外面ナデ。体部外面指頭圧痕残す。
25-246	23-3	1-2区 第8層	土師器 环	(15.2) 2.4 —	0.5	2.5Y7/3 浅黄	平安時代	10%	土師器杯C。 内外面ナデ。底部外面指頭圧痕残す。
25-247	24-1	1-2区 第8層	土師器 製陶土器	— 4.4 —	0.9	2.5Y8/3 淡黄	平安時代	—	内外面指ナデ。指頭圧痕残す。
25-248	23-3	1-1区 第8層	土師器 皿	(13.3) (2.7) —	0.5	外) 2.5YR5/8 明赤褐 内・断) 2.5Y7/2 黄褐	奈良時代	10%	内外面ナデ。底部外面指頭圧痕残す。 口縁部内面に沈線1条あり。
25-249	23-3	1-1区 第8層	土師器 环	(13.2) (3.5) —	0.7	2.5Y7/3 浅黄	飛鳥時代	10%	土師器碗C。 内外面ナデ。指頭圧痕残す。 内面ナデ。
25-250	23-3	1-1区 第8層	須恵器 蓋	(8.2) (2.0) —	0.8	外・断) 7.5Y4/2 反オリーブ 内) N6/0 灰	古墳時代 後期終末	20%	外面部回転ナデ。 自然輪付着。巻貝あり。 内面回転ナデ。摘みあり?
25-251	23-2	1-3区 第8層	土師器 皿	22.4 2.7 —	0.6	10YR7/4 にぶい黄相	奈良時代	50%	内外面ナデ。口縁部内面に沈線1条。 放射状ミガキあり。
25-252	23-3	1-1区 第8層	土師器 环蓋	(14.4) (4.1) —	1.0	5PB6/1 青灰	古墳時代 後期	10%	外面部回転ナデ、ケズリ。 内面部回転ナデ。 TK43。
25-253	—	1-1区 第8層	須恵器 环蓋	(15.0) (3.7) —	0.7	外) N4/0 灰 内・断) 5PB6/1 青灰	古墳時代 後期	10%	外面部回転ナデ、ケズリ。 内面部回転ナデ。 TK43。
25-254	—	1-3区 第8層	秀生土器 甕	(3.4) — 4.1	0.7	外・断) 2.5Y5/3 黄褐 内) 5Y4/1 灰	秀生時代 前期～中期	—	内外面ナデ。 内面ヘラナデ。
25-255	—	1-1区 第8層	秀生土器 甕	— 5.3 —	0.7	外・断) 5YR5/6 明赤褐 内) 10YR7/3 にぶい黄相	秀生時代 前期	5% 未満	内外面ナデ。 口縁部に刻目あり。

表3 遺物観察表（土器）12

種類番号	写真回数番号	調査区面・層・遺構名	器種	口径高 削頂底径	最大厚	色 調	時期	残存率	調整・形態の特徴など
25-256	24-1	1-1区 第8面	縄文土器 深鉢	(3.7) — —	0.5	10YR3/2 黒褐	縄文時代 中期	—	口縁部端部外側に登貝による条痕。 船元式
25-257	24-1	1-1区 第8層	縄文土器 深鉢	(4.3) — —	0.6	外) 2.5Y6/3 に赤い黄 内) 5Y3/2 オリーブ黒 断) 2.5Y3/1 黒褐	縄文時代 後期	—	外面登貝による条痕。 北白川上層式1～2期
25-258	24-1	1-1区 第8層	縄文土器 深鉢	(4.2) — —	0.8	10YR6/3 に赤い黄褐	縄文時代 後期	—	外面ナデ。口縁端部と突帯下端に刻 目(D字)あり。 滋賀型IV式。
25-259	24-1	1-2区 第8層	縄文土器 深鉢	(5.9) — —	0.8	外) 10YR4/3 に赤い黄褐 内) 2.5Y5/4 黄褐	縄文時代 後期	—	外面ナデ。口縁端部と肩部に刻目突 帯2部なり。指痕は残す。 長原式。
25-260	24-1	1-2区 第8層	縄文土器 深鉢	— — —	0.5	9系) 2.5Y5/2 暗灰黄 内) 2.5Y5/3 黄褐	縄文時代 後期	—	外面ケズリ。内面磨滅。 滋賀型IV式。
25-261	24-1	1-2区 第8層	縄文土器 深鉢	(5.1) — —	1.0	10YR4/3 に赤い黄褐	縄文時代 後期	—	外面ナデ。口縁端部に刻目突帯(D 字)あり。 長原式。
25-262	24-1	1-2区 第8層	縄文土器 深鉢	— — —	0.9	外) 2.5Y4/3 オリーブ褐 内) 2.5Y3/3 暗オリーブ褐 断) 2.5Y3/1 黒褐	縄文時代 後期前半	—	外面ナデ。口縁よりやや下に突帯1 条。 船橋式。
25-263	24-1	1-1区 第8層	縄文土器 深鉢	(5.3) — —	0.8	2.5Y5/4 黄褐	縄文時代 後期	—	外面ナデ。 内面磨滅。口縁先端に刻目突帯あり。 長原式。
25-264	24-1	1-1区 第8層	縄文土器 深鉢	(3.6) — —	0.9	外) 10YR4/3 に赤い黄褐 内) 2.5Y4/3 オリーブ褐 断) 2.5Y3/1 黒褐	縄文時代 後期	—	外面ケズリ。内面磨滅。 肩部突起あり。 滋賀型IV式。
25-265	24-1	1-1区 第8層	縄文土器 深鉢	(4.0) — —	1.0	5Y3/2 オリーブ黒	縄文時代 後期	—	外面ナデ。 肩部突起あり。 滋賀型IV式。
25-266	24-1	1-2区 第8層	縄文土器 深鉢	— — —	0.8	外) 2.5Y4/3 オリーブ褐 内) 2.5Y3/2 黒褐	縄文時代 後期	10%	外面ナデ。口縁よりやや下に突帯(肩 部不明)あり。内面ナデ。 長原式。
25-267	24-1	1-1区 第8層	縄文土器 深鉢	(5.0) — —	0.9	内・外) 2.5Y3/3 断) 5Y2/1 黒	縄文時代 後期	—	外面ナデ。口縁端部に刻目あり。口 縁よりやや下に突帯あり。煤付着。 船橋式。
25-268	—	1-3区 第8層	弥生土器 壺	(4.2) — 8.2	1.4	2.5Y7/2 灰黄	弥生時代 前期	—	底部のみ。 外面ハッキミガキ。底部外面指痕直 張す。内面ヘラナデ。黒斑あり。
25-269	24-1	1-2区 第8層	弥生土器 甕	— — (4.9)	1.0	外) 10YR4/2 灰黄褐 内) 10YR5/3 に赤い黄褐 断) 2.5Y5/2 灰黄	弥生時代 後期	—	底部のみ。 外面タタキ。内面ナデ。指痕直張す。
25-270	—	1-2区 第8層	弥生土器 甕	(2.6) — (4.6)	1.2	外) 5YR5/3 に赤い黄褐 内) 断) 2.5Y3/1 黒褐	弥生時代 後期	—	底部のみ。 外面タタキ。 内面剥離。
25-271	24-1	1-2区 第8層	弥生土器 甕	(2.3) — (5.1)	1.0	外) 5YR5/4 に赤い黄褐 内) 2.5Y4/3 オリーブ褐 断) 10YR3/2 黒褐	弥生時代 後期	—	底部のみ。 外表面磨滅。 内面ヘラナデ。
25-272	24-1	1-3区 第8面 415溝	弥生土器 甕	(3.5) — (7.7)	1.0	外・断) 2.5YR5/6 明赤褐 内) 7.5YR6/6 棕	弥生時代 前期	—	底部のみ。 内外面ナデ。
25-273	24-1	1-3区 第8面 415溝	弥生土器 甕	(3.2) — 9.2	1.1	外・断) 2.5Y3/2 黒褐 内) 10YR6/2 灰黄褐	弥生時代 前期	—	底部のみ。 内面ナデ。
45-278	—	1-2区 第9面 225溝	土器器 甕	(20.6) (3.5) — —	0.7	5Y7/1 白	古墳時代 前期初期	—	外面ハケ。ナデ。指痕直張す。 内面ナデ。口内式。生剥き壁。

表3 遺物観察表(土器)13

掲番号	写真回数	調査区面・層構名	器種	口径高 径底径	最大厚	色 調	時期	残存率	調整・形態の特徴など
45-279	24-2	1-3区 第9面 32溝	弥生土器 甕	(3.4) 4.1	0.7	10YR3/1 黒褐	弥生時代 前期	-	外面ハケ、ナデ。内面ナデ。 口縁端部に削目。頸部に沈線3条。 外側に煤付着。
45-280	24-2	1-3区 第9面 19溝	弥生土器 甕	- -	0.7	外) 10YR7/4 にぶい黄褐 内) 断) 2.5Y7/3 淡黄	弥生時代 前期	-	外面ナデ、ミガキ。内面ナデ。 削出突部上沈線3条。
45-281	-	1-2区 第9面 202土坑	弥生土器 甕	2.3 (4.0)	1.5	外) 5YR5/4 にぶい赤褐 内) 2.5Y5/2 削灰黄 断) 2.5YR5/4 赤褐	弥生時代 後期	-	外面タタキ目。底部ナデ 内面工具痕残る。生駒西館産。
45-282	24-2	1-2区 第9面 32溝	弥生土器 甕	(3.3) -	0.8	外) 10YR5/1 褐灰 内) 断) 10YR6/4 にぶい黄褐	弥生時代 前明	-	外面ミガキ。内面ナデ。 削出突部上沈線5条+α。
45-283	24-2	1-3区 第9面 432溝	弥生土器 甕	- -	0.8	外) 10YR3/1 黒褐 内) 10YR6/3 にぶい黄褐 断) 2.5Y6/3 にぶい黄	弥生時代 前期	-	外面ミガキ。内面ナデ。 沈線4条間継杉文。
45-285	24-2	1-3区 第9面 69溝	縄文土器 深鉢	- -	0.7	10YR3/1 黒褐	縄文時代 晩期	-	外面貝殻斑痕。内面ナデ。口縁部上 端部に削目あり。口縁部に削目突部あり。 滋賀里IV式。生駒西館産。
45-286	24-2	1-3区 第9面 40溝 25溝	縄文土器 深鉢	- -	0.6	10YR2/1 黒	縄文時代 晩期	-	内外面磨滅。口縁部上端面に削目あり。 口縁部に削目突部あり。 滋賀里IV式。生駒西館産。
45-287	24-2	1-1区 第9面 解穴建物1	縄文土器 深鉢	9.0 -	1.2	外) 10YR5/3 にぶい黄褐 内) 断) 2.5Y4/2 削灰黄	縄文時代 晩期	-	内外面磨滅。口縁部と肩部に削目突 部2番あり。肩部に継文文あり。 長原式。
45-288	24-2	1-2区 第9面	縄文土器 深鉢	5.0 -	0.7	外) 10YR5/3 にぶい黄褐 内) 断) 2.5Y5/3 黄褐	縄文時代 晩期	-	内外面磨滅。口縁上端面に削目あり。 口縁部に削目突部あり。 船橋式。生駒西館産。
45-289	24-2	1-2区 第9面 208溝	縄文土器 深鉢	5.0 -	1.0	外) 5Y2/1 黒 内) 断) 5Y3/1 オリーブ黒	縄文時代 晩期	-	内外面磨滅。口縁上端面に削目あり。 口縁部に削目突部あり。 船橋式。生駒西館産。
45-290	-	1-2区 第9面	縄文土器 深鉢	4.5 -	0.7	2.5Y5/2 削灰黄	縄文時代 晩期	-	内外面磨滅。 口縁や下に突部あり。 船橋式。生駒西館産。
45-291	25-3	1-2区 第9層	縄文土器 深鉢	3.8 -	0.9	外) 10YR3/2 黒褐 内) 2.5Y4/3 オリーブ黒 断) 5Y3/1 オリーブ黒	縄文時代 晩期	-	外面ナデ。内面磨滅。 口縁や下に突部あり。 船橋式。生駒西館産。
45-292	25-3	1-1区 第9層	縄文土器 深鉢	13.7 (5.0)	1.2	外) 7.5YR5/4 にぶい褐 内) 7.5YR4/3 褐 断) 10YR3/1 黒褐	縄文時代 後期	10%	内外面ナデ。継文文・継刻上に巻貝に よる扇状压痕文2か所あり。宮浦式。 生駒西館産。
45-293	25-1	1-1区 第9面 91土器群	縄文土器 深鉢	(30.0) 14.9 -	0.7	外) 断) 10YR5/1 褐灰 内) 10YR3/1 黑褐	縄文時代 晩期	10%	体表面に墨痕文あり。内面磨滅。 滋賀里III b式。
45-294	25-1	1-1区 第9面 92土器群	縄文土器 深鉢	11.7 -	0.8	内) 外) 10YR4/2 灰黄褐 断) 10YR5/2 灰黄褐	縄文時代 後期	-	外面体部貝殻条痕。屈曲部に沈線3 条。宮浦式。
45-295	-	1-2区 第9層	縄文土器 深鉢	4.6 (5.0)	1.3	外) 断) 2.5Y5/3 黄褐 内) 10YR4/1 褐灰	縄文時代 後期	-	外面磨滅。 内面貝殻条痕。
45-296	-	1-1区 第9層	縄文土器 深鉢	13.7 (5.0)	1.2	外) 7.5YR5/4 にぶい褐 内) 7.5YR4/3 褐 断) 10YR3/1 黒褐	縄文時代 後期	-	外面貝殻による貝殻条痕。内面ナ デ。底部上げ成。
45-297	25-3	1-2区 第9-2面 360土坑	縄文土器 深鉢	(35.9) 14.3 -	0.6	内) 外) 10YR3/2 黒褐 断) 2.5Y5/2 削灰黄	縄文時代 晩期	15%	外側全体ケズ。内面ナデ。 口縁部や下に突部あり。 船橋式。生駒西館産。
45-298	25-3	1-2区 第9-2面 360土坑	縄文土器 浅鉢	(4.0) -	0.4	内) 外) 10YR3/2 黒褐 断) 10YR5/3 にぶい黄褐	縄文時代 晩期	-	内外面ナデ。口縁部に突部あり。 滋賀里IV式。生駒西館産。

表3 遺物観察表（土器）14

接着番号	写真回数	調査区分 面・層 遺構名	器種 器形	口径 高 底径	最大 厚	色 調	時期	残存率	調整・形態の特徴など
45-299	25-3	1-2区 第9-2面 360土坑	縄文土器 浅鉢	(11.5) (6.9) —	0.6	外) 7.5YR6/4 にぶい・橙 内) 断) 10YR6/2 灰黄褐	縄文時代 晩期	10%	外面磨滅。 内面ナデ。 道賀里型 b ~ IV式?
304	15-2	1-2区 第2層	土師器 三足釜	— — —	—	7.5Y8/1 灰白	中世	—	手筋ね。 内外面磨ナデ。指頭圧痕残す。
305	15-2	1-3区 第2層	陶器 鉗皿	— — —	—	外) 2.5Y7/1 灰白 内) 10YR6/4 にぶい・黄橙	中世後期	—	内外面磨輪ナデ。僅かに釉付着。 鉗目あり。 瀬戸・美濃窯。
307	20-1	1-2区 第6層	須恵器 环蓋?	— — —	—	外) N6/0 灰 内) 5PB7/1 美濃灰 断) N7/0 灰白	平安時代	—	内外面磨輪ナデ。 内面に漆付着。
308	20-1	1-2区 第6層	須恵器 壺	— — —	—	10Y7/1 灰白	平安時代	—	内外面磨輪ナデ。 外面上墨付着。 内面に墨画あり。
309	23-1	1-1区 第7層	土師器 羽釜	— —	4.3 1.5	外) 10YR2/1 黒 内) 10YK3/3 黑褐 断) 7.5YR5/4 にぶい・褐	平安時代	—	内外面ナデ。 内外面ともに焼付着。
310	23-3	1-1区 第8層	須恵器 蓋	(8.2) (2.0) —	0.8	94) N5/0 灰 内) N6/0 灰 断) 7.5Y4/2 灰オリーブ	古墳時代 後期	20%	内外面磨輪ナデ。 自然釉付着。250と同一個体。

表4 遺物観察表（石器）

排図番号	写真 図版 番号	調査区 面・層 遺構名	器形	最大長／最大幅／最大厚	重量(g)	材質	残存率	調整・形態の特徴など
8-14	15-1	1-3区 第1面	砥石	4.9／3.8／1.6	50.8	砂岩	—	上下欠損。表面・側面に研磨痕あり。 一部に壊付着。
8-19	15-1	1-2区 第1層	砥石	4.2／4.5／1.2	43.1	凝灰岩	—	上下欠損。表面・側面に研磨痕あり。 刃物痕あり。
8-20	15-1	1-1区 第1層	砥石	5.7／3.6／1.1	24.7	粘板岩	—	表面・側面のみ残存。 研磨痕あり。刃物痕あり。
12-48	16-1	1-3区 第3面	砥石	3.4／3.6／0.7	10.0	粘板岩?	—	表面・側面のみ残存。 研磨痕あり。刃物痕あり。
12-80	—	1-1区 第3層	砥石	(8.4)／5.2／4.6	271.3	凝灰岩	—	下部欠損。側面に研磨痕あり。刃物痕あり。
12-81	25-2	1-1区 第3層	石鏃	2.8／1.8／0.4	1.5	サヌカイト	98%	無茎石鏃。滴形。 表面基部の一部を欠損。
16-141	—	1-2区 第5層	砥石	8.8／7.4／3.5	156.8	軽石	—	上下欠損。表面・側面に研磨痕あり。 刃物痕あり。
20-238	25-2	1-1区 第7面	石鏃	2.1／1.5／0.3	0.7	サヌカイト	99%	平基式無茎石鏃。三角形。
20-239	25-2	1-3区 第7層	石鏃	2.1／1.8／0.3	0.9	サヌカイト	99%	平基式無茎石鏃。三角形。 押圧剥離
20-240	25-2	1-2区 第7面	石鏃	2.3／1.2／0.4	1.6	サヌカイト	90%	有茎石鏃。 先端と基部の一部が欠損。
20-241	25-2	1-3区 第7層	石鏃	3.9／1.1／0.6	2.5	サヌカイト	99%	柳葉状有茎石鏃。
20-242	25-2	1-2区 第7層	削器?	9.2／4.0／1.2	46.4	サヌカイト	—	自然面残存。石肌鱗状。 表面に縦かいじり・削れあり。未完成。
20-243	25-2	1-3区 第7層	石鏃	4.0／0.9／0.6	2.0	サヌカイト	89%	基部の表面が一部欠損。 先端部は砸く穴。
25-274	25-2	1-1区 第8層	磨製石器	10.8／2.7／13.0	58.1	?	90%	上部欠損。左側面は平坦。 右側面は棱鏡状に加工。 付着物、表面剥離あり。
25-275	25-2	1-1区 第8層	石鏃	2.3／1.3／0.3	0.9	サヌカイト	99%	無茎石鏃。 先端部欠損。
25-276	25-2	1-2区 第8面	石鏃	3.0／2.1／0.5	3.1	サヌカイト	98%	先端部欠損。
25-277	25-2	1-3区 第8層	剥片	6.7／3.5／1.2	22.6	サヌカイト	—	未完成か。
45-284	—	1-1区 第9面 37ビット	叩石?	13.5／14.3／7.0	1466.2	砂岩?	—	側面加工。表面・下下面是丸い。底面平滑。 表面に凹みあり。打撃痕あり。
45-300	25-2	1-1区 第9層	石鏃	2.2／1.7／0.3	0.9	サヌカイト 金山産	—	平基式無茎石鏃。五角形。
45-301	25-2	1-2区 第9面 220溝	剥片	2.5／2.2／0.4	2.1	サヌカイト	—	刃状に加工。 自然面あり。
45-302	25-2	1-2区 第9面 230溝	剥片	2.5／2.2／0.5	2.7	サヌカイト	—	刃状に加工。 側縁部剥離。石肌鱗状。
45-303	25-2	1-1区 第9面 33溝	投弾?	4.5／3.2／2.5	49.1	?	—	表面平滑。 加工の有無は不明。
311	25-2	1-2区 第9面 270溝	剥片	5.0／3.5／1.1	13.7	サヌカイト	—	側辺の一部を刃状に加工?

表5 遺物観察表(木器)

排図番号	写真 図版 番号	調査区 面・層 構成	器形	口径／器高／胴径／ 底径	最大長／最大幅／最大厚	材質	残存率	調整・形態の特徴など
8-3	26-1	1-2区 第0層	板材	-	29／28／0.3	ヒノキ	90%	四隅を切り穂く、全面加工。 片面の一部破損あり。「○」字の焼印あり。
8-4	26-1	1-2区 第0層	部材	-	7.6／4.0／3.6	スギ	100%	L字状に切欠きあり。芯持ち削材。
8-13	26-1	1-2区 第1層	漆器 棚	-／3.3／-／5.9	-／-／1.2	カエデ属	-	全面朱漆塗布。剥離あり。底部破片。
8-21	26-2	1-3区 第1層	板状 木製品	-	19.2／3.0／0.9	スギ	-	上部欠損？。一部破損。 下端部を2方から削り出す。
8-22	26-2	1-3区 第1層	曲物 底板	-	22.0／4.5／0.7	コウヤマキ	20%	周縁に加工。左右欠損。下部に圧痕あり。
10-34	26-1	1-1区 第2層～ 第3層	漆器 棚	-	5.1／3.1／0.4	ヤマグワ	-	内・外側黒漆塗布。内面に赤漆で文様を 描く。跡跡残る。
10-35	26-1	1-1区 第3層	棒状 木製品	-	21.7／1.8／1.1	ヒノキ	95%	上端部欠損？。下面平坦で。上面の両半 部を平面に作り出し、下半部をわずかに 彫く丸くする。下端部にグリップあり。
10-36	26-1	1-2区 第2層	部材	-	5.0／3.1／1.7	アカガシ・亜属	-	上欠損。 2か所に方形孔あり。
12-49	26-2	1-1区 第3層	部材	-	8.3／5.5／-	クリ	-	芯持材。常端部に平坦面あり。有頭部を作 り出す。
12-50	26-1	1-1区 第3層	著	-	15.0／6.0／0.5	ヒノキ	-	上端部欠損。 表面は削取り加工。
12-74	26-2	1-1区～ 第2層～ 第3層	板状 木製品	-	24.7／6.3／2.3	スギ	-	上部および左側縁欠損。全面削除な加工 あり。抉り部に角舟残存。下端部2方向 に削り出す。
12-75	26-1	1-1区 第3層～ 第4層	曲物 底板	-	11.8／2.8／0.7	ヒノキ	-	側面は削取り加工。 表面にキズあり。
12-76	26-1	1-3区 第3層	下駄	-	17.0／4.1／1.1	ヒノキ	40%	両側縁破損。駄孔の周辺は磨滅により黒 化。両孔は破損。両を削り出した傷痕残 存。右足用。
12-77	26-1	1-3区 第3層	漆器 棚	-	3.7／2.3／0.6	ヤマグワ	-	内・外側ともに黒漆塗布。
12-78	26-1	1-3区 第3層	板状 木製品	-	6.4／1.7／0.8	ヒノキ	-	両側縁破損。下端部炭化により欠損。
12-79	26-1	1-1区 第3層	板状 木製品	-	8.8／2.3／1.0	スギ	-	上部に穿孔あり。下端部折損。両側縁欠 損。一部炭化。
14-103	26-1	1-3区 第4層	棒状 木製品	-	4.6／1.3／1.3	ヒノキ	-	両側縁欠損。上端部・下端部加工。
14-104	26-1	1-1区 第4層	刀子鞘	-	11.0／2.0／0.4	ヒノキ	-	上端・下端部とともに加工。下面欠損。 抉り部墨塗塗布か。
16-144	26-1	1-2区 第5層	有頭棒状 木製品	-	6.6／2.9／-	マツ科	-	上端部のみ残存。全面加工。芯持材
16-145	26-2	1-2区 第5層～ 第7層	下駄	-	16.8／9.4／2.0	コウヤマキ	-	上部破損失。裏面炭化あり。 磨滅のため歯は僅かに残存。 左足用。

表6 遺物観察表（金属器）

掲図番号	写真図版番号	調査面・層構成名	器形	最大長／最大幅／最大厚	材質	残存率	調整・形態の特徴など
10-37	15-2	1-2区 第2層	金具	5.0／0.9／0.2	鉄	-	鉄板を逆U字状に曲げ、一方の先端部を逆方向にわずかに折り曲げた。鉄銷付着。
10-38	15-2	1-1区 第2層	馬鍐の盾	20.0／2.4／1.7	鍛鉄	-	全体に鉄銷付着。
12-73	16-2	1-3区 第3層	鍔先？	8.9／4.4／0.4	鍛鉄	-	一部のみ残存。右側部付近か、全体に鉄銷付着。
14-101	17-2	1-3区 第4層	鍔先	7.0／9.7／0.9	鍛鉄	-	先端部のみ残存。全体に鉄銷付着。
16-142	18-1	1-1区 第5層	鍔先	7.6／6.1／1.2	鍛鉄	-	刃先の一部残存。全体に鉄銷付着。
16-143	18-1	1-2区 第5層	金具	12.1／1.0／0.4	鍛鉄	-	頭部は平たく作り出し、孔を穿つ。先端部細く尖らせる。銷付着。
16-146	18-1	1-1区 第5層 鉄溝	飾り金具	3.2／4.4／0.1	真鍮	100%	表面に植物文様の浮き彫りと飾り打ちがあり。中央部がわずかに膨らむ。相対位置に2対風形の透かしがあり。釘孔上方の両側および下端中央部に3点あり。
18-194	22-1	1-1区 第6層	-	10.6／4.0／0.6	鍛鉄	-	鍔の中央部の突起付近のみ残存か。
18-196	22-1	1-3区 第6層	銅 和印押印	2.2／2.2／0.1	銅	90%	土圧により変形。
18-197	22-1	1-1区 第6層	雁頭繩	4.5／3.3／0.4	鉄	-	基底部欠損。全体に鉄銷付着。
18-198	22-1	1-1区 第6層	鉤	2.6／2.0／0.1	銅	95%	土圧により変形。一部赤銅残存。研孔に擦痕あり。
18-199	22-1	1-3区 第6層	耳環？	2.2／2.2／0.3	銅	100%	表面剥落。
20-237	22-1	1-2区 第7層	銅 和印押印	2.4／2.4／0.1	銅	100%	残存状態良好。
306	15-2	1-2区 第2層	板状	4.0／2.2／0.1	鍛鉄	-	刃先の一部か。全体に鉄銷付着。
312	15-2	1-2区 第2層	鍔先	9.0／6.2／0.4	鍛鉄	-	全体に鉄銷付着。

【参考文献】

- 泉 拓良 1996 「近畿地方の縄文土器」 大川 清・鈴木公雄・工業善通編『日本土器事典』 雄山閣出版
- 森井貞夫・寺沢 薫 1989 「河内」 寺沢 薫・森岡秀人『弥生土器の様式と編年 近畿編I』 木耳社
- 田辺昭三 1981 「須恵器大成」 角川書店
- 松村恵司 1996 「近畿地方の7世紀後半の土器」 大川 清・鈴木公雄・工業善通編『日本土器事典』 雄山閣出版
- 巽淳一郎 1996 「近畿地方の8世紀中頃の土器」 大川 清・鈴木公雄・工業善通編『日本土器事典』 雄山閣出版
- 小森俊寛・上村薰章 1996 「京都の都市道路から出土する土器の編年の研究」『研究紀要』 第3号
- （財）京都市埋蔵文化財研究所
- 鶴柄俊夫 1995 「瓦質土器〔2〕」 各地の瓦質土器」 中世土器研究会編『概説 中世の土器・陶磁器』 真陽社
- 山本信夫 1995 「貿易陶磁器〔2〕」 中世土器研究会編『概説 中世の土器・陶磁器』 真陽社

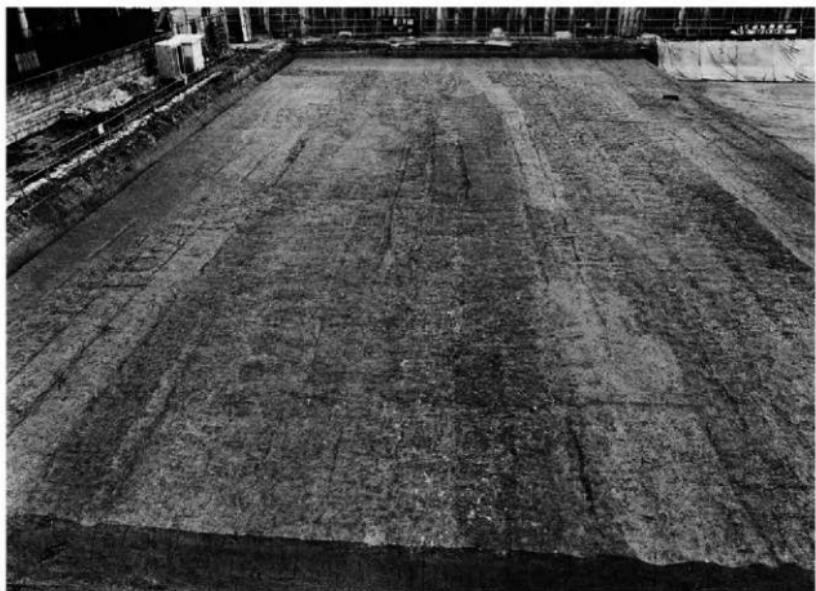
写 真 図 版



1. 1区 第1面 全景（東から）



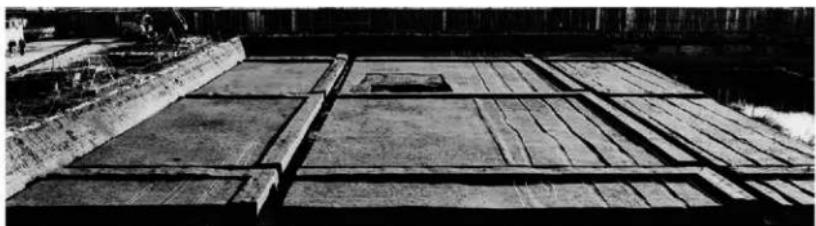
2. 2区 第1面 全景（南東から）



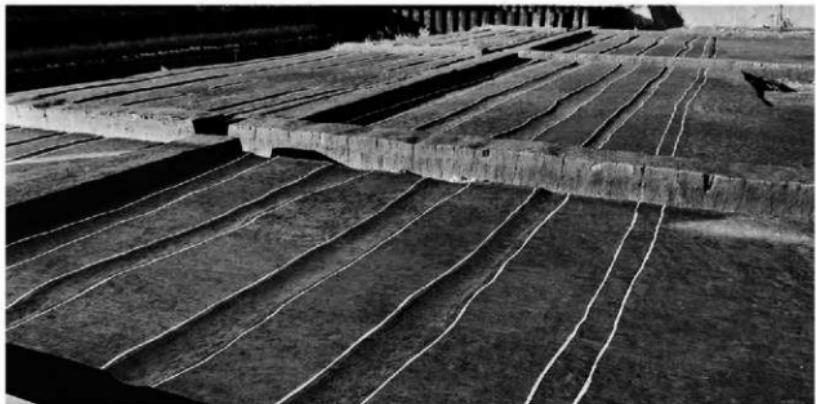
1.3区 第1面 全景（北から）



2.1区 第2面 全景（東から）



1. 2区 第2面 全景（北から）



2. 2区 第2面 欠間溝完掘状況（南東から）



3. 3区 第2面 全景（北から）



1. 1区 第3面 全景（東から）



2. 2区 第3面 全景（北から）



3. 3区 第3面 全景（北から）



4. 3区 第3面 404 土坑完掘状況（南西から）



1. 1区 第4面 全景（東から）



2. 2区 第4面 全景（北から）



3. 3区 第4面 全景（北から）



4. 3区 第4面 全景（南東から）



1. 1区 第5面 全景（東から）



2. 2区 第5面 全景（北から）



3. 3区 第5面 全景（北から）



4. 3区 第5面 全景（南東から）



1. 1区 第6面 全景（東から）



2. 1区 第6面 全景（北東から）



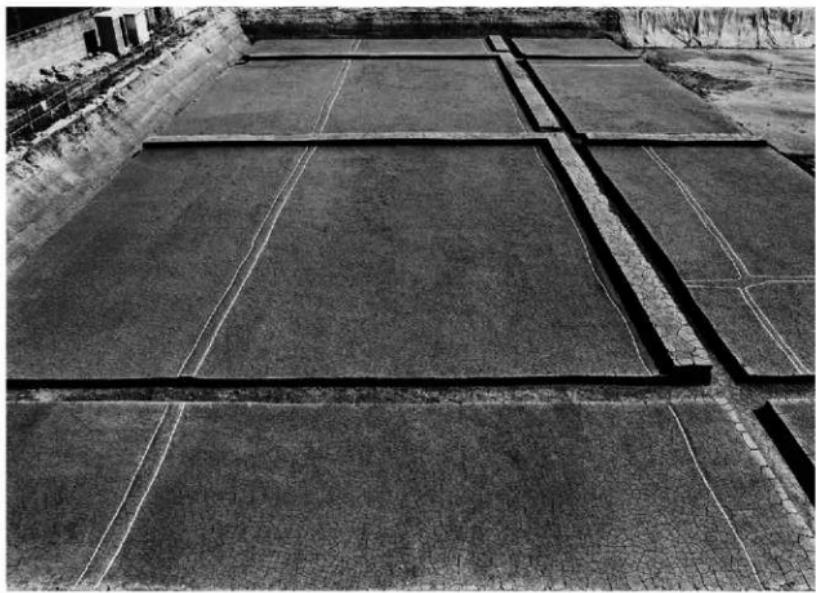
1.2区 第6面 全景（北から）



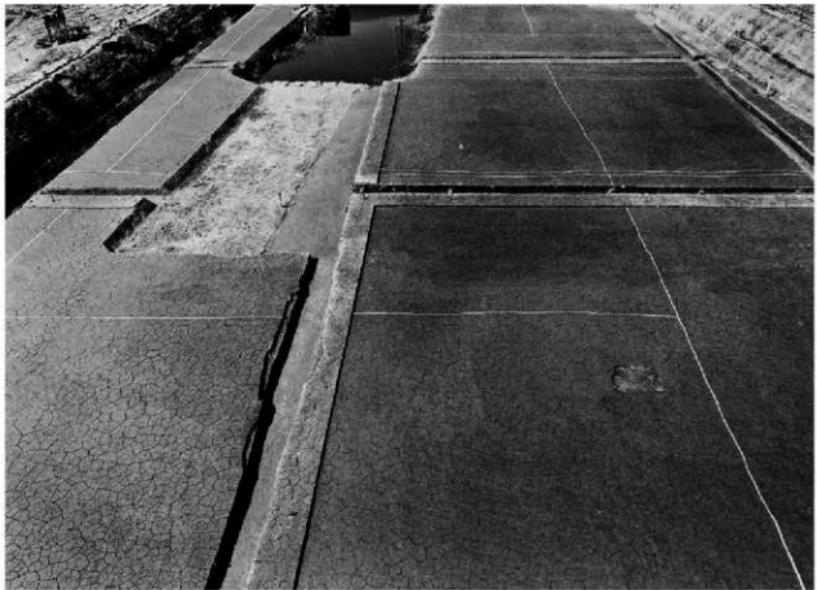
2.3区 第6面 畦畔検出状況（南東から）



3.3区 第6層 耳環出土状況（北から）



4.3区 第6面 全景（北から）



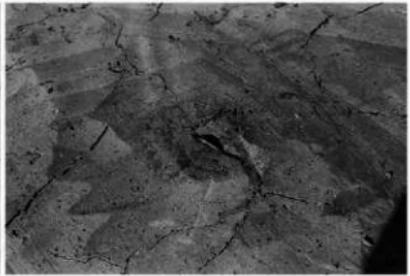
1. 1区 第7面 全景（東から）



2. 2区 第7面 全景（北から）



3. 2区 第7層 土師器环出土状況



4. 2区 第7面 和同開拵出土状況



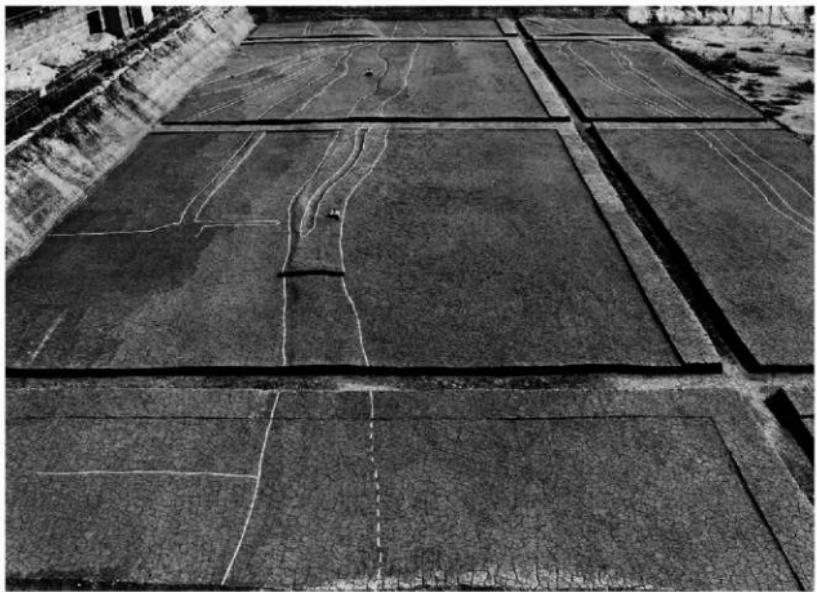
1.3区 第7面 全景（北から）



2.1区 第8面 全景（東から）



1.2区 第8面 満群完掘状況（南東から）



2.3区 第8面 全景（北から）



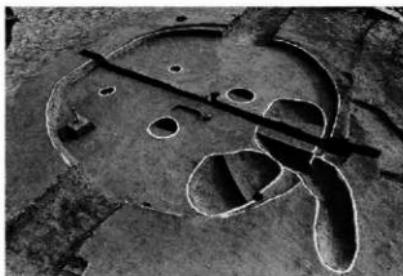
1. 1区 第9面 全景（東から）



2. 1区 第9面 竪穴建物1検出状況（南東から）



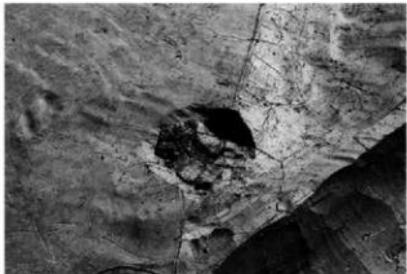
3. 1区 第9面 竪穴建物2完掘状況（南東から）



4. 1区 第9面 竪穴建物1完掘状況（北西から）



5. 1区 第9面 竪穴建物1遺物出土状況



1. 1区 第9面 91 土器群遺物出土状況（北西から）



2. 1区 第9面 101 土坑・102 土坑完掘状況（北東から）



3. 2区 第9面 ピット群検出状況（南東から）



4. 2区 第9面 ピット群・溝検出状況（南東から）



5. 2区 第9面 溝群完掘状況（東から）



1. 2区 第9面 全景 (北から)



2. 3区 第9面 全景 (北から)



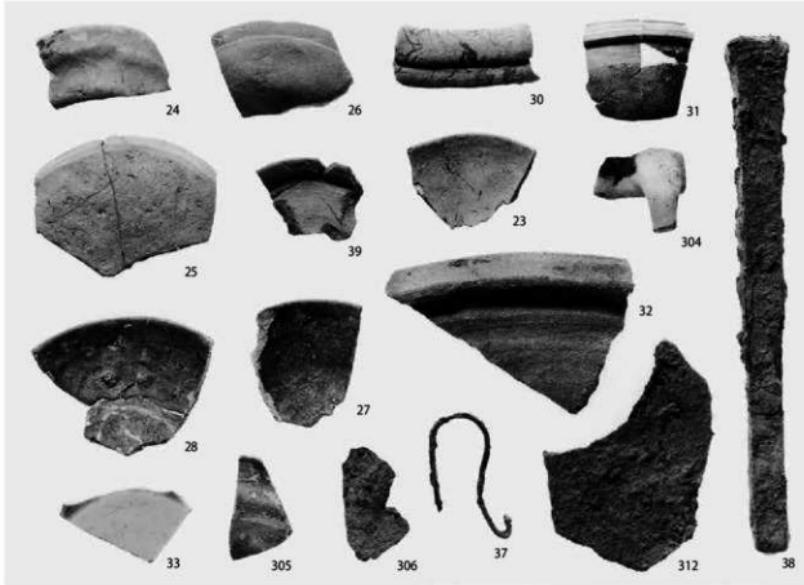
3. 2区 第9-2面 360 土坑遺物出土状況 (南西から)



4. 3区 第9-2面 全景 (北から)

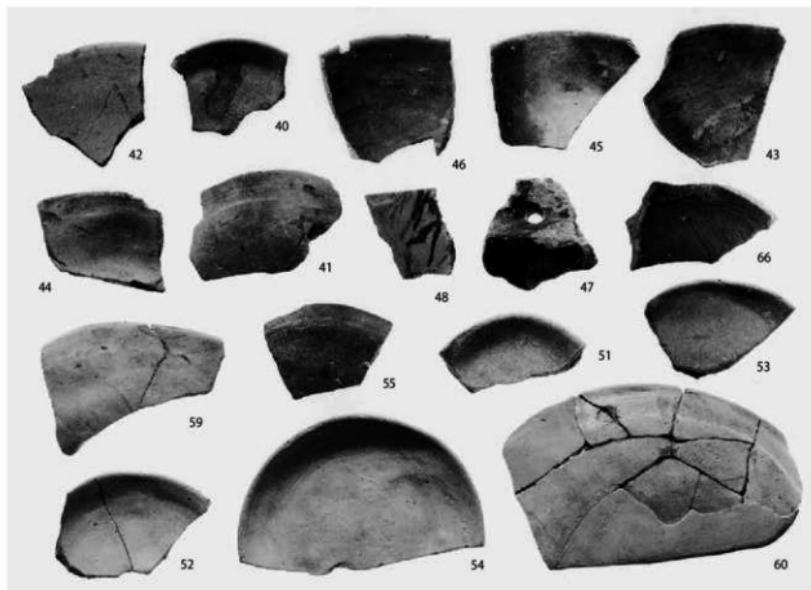


1. 第0層・第1面・第1層 出土遺物（土器・石器・金属器）

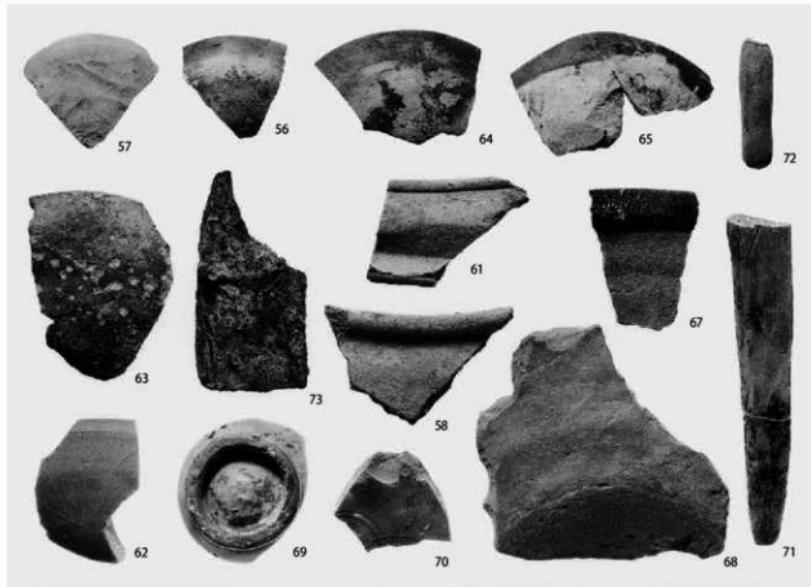


2. 第2層 出土遺物（土器・金属器）

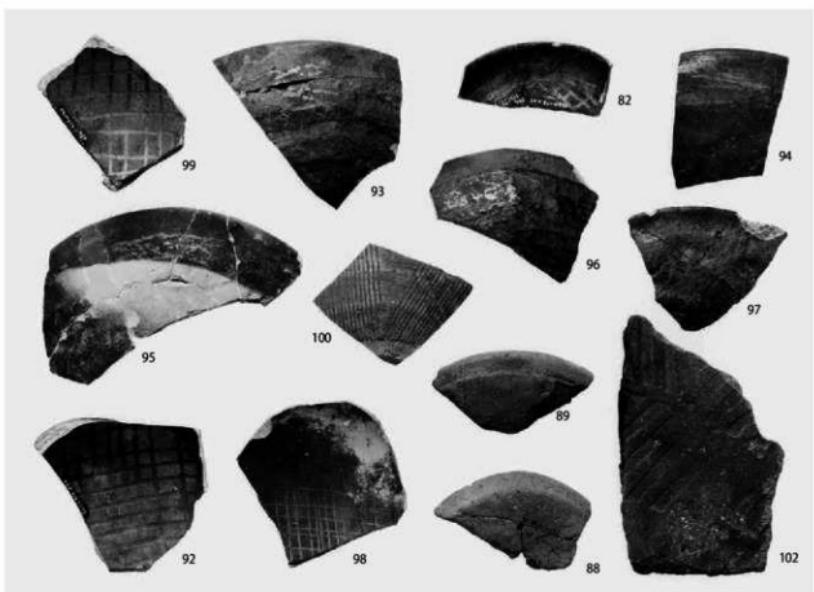
図版 16
第3面・第3層
出土遺物（土器・石器）



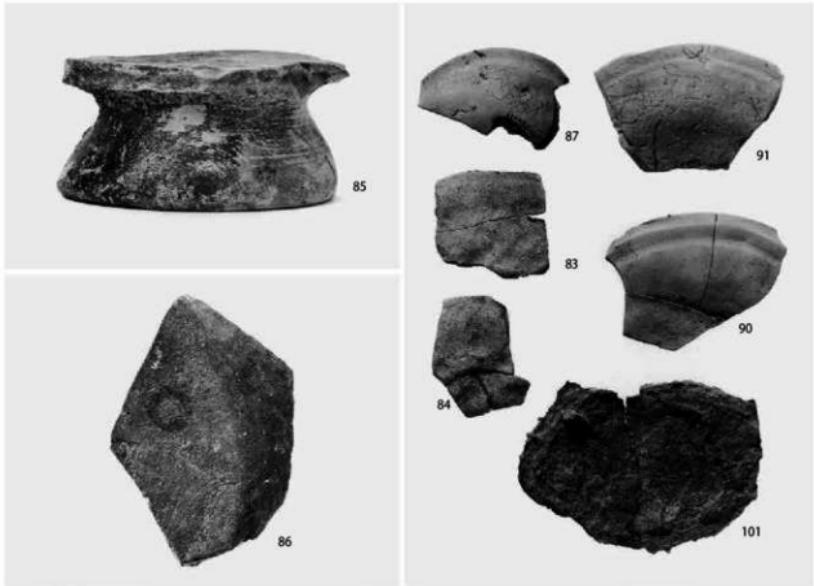
1. 第3面・第3層 出土遺物（土器・石器）



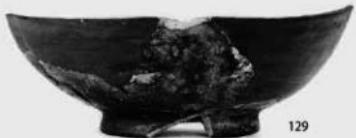
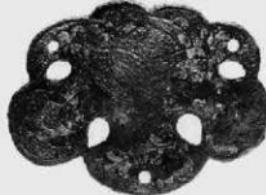
2. 第3層 出土遺物（土器）



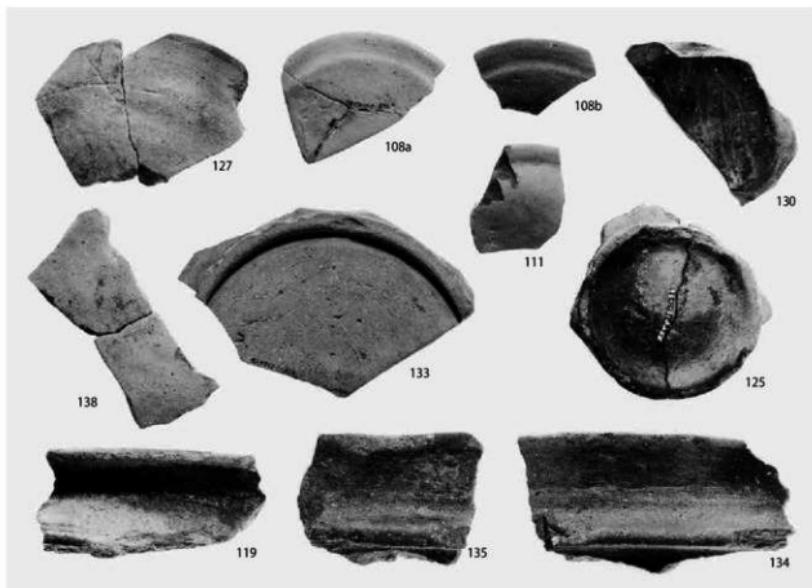
1. 第4面・第4層 出土遺物（土器）



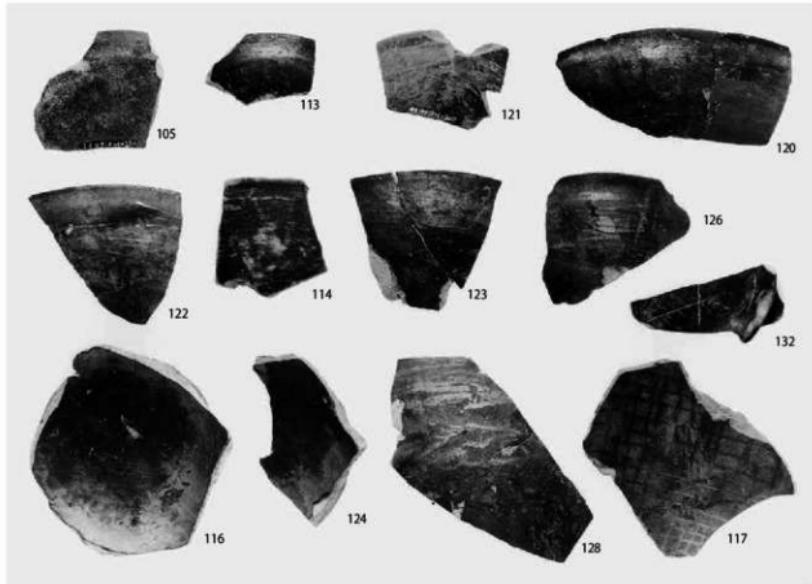
2. 第4層 出土遺物（土器・金属器）



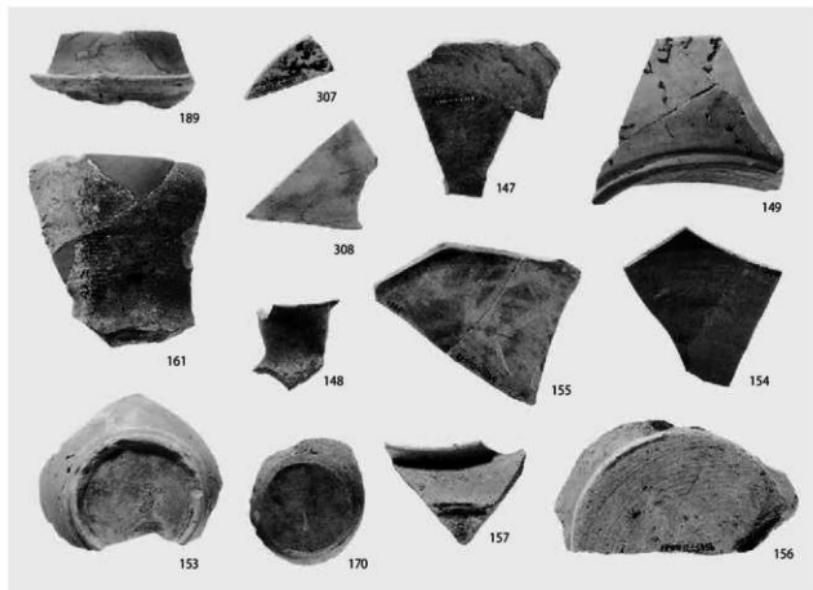
1. 第5面・第5層 出土遺物（土器・金属器）



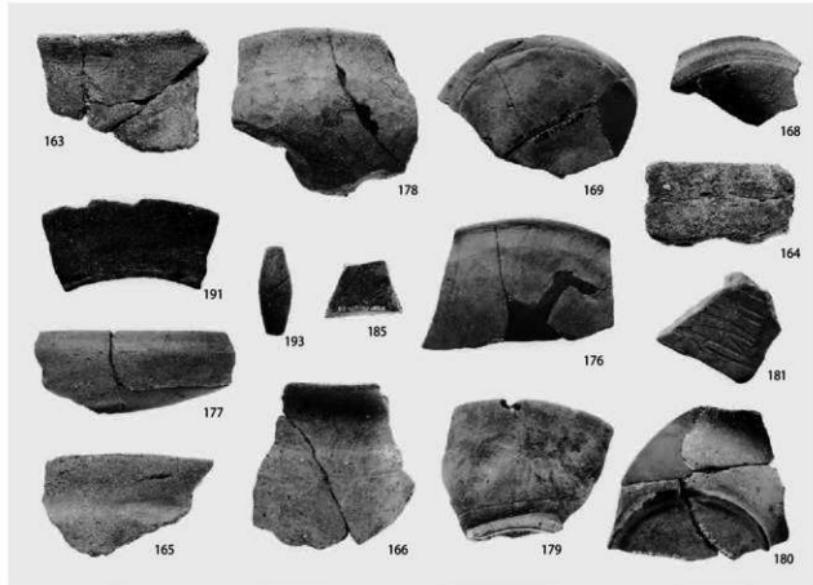
1. 第 5 層 出土遺物（土器）



2. 第 5 層 出土遺物（土器）



1. 第6面・第6層 出土遺物（土器）

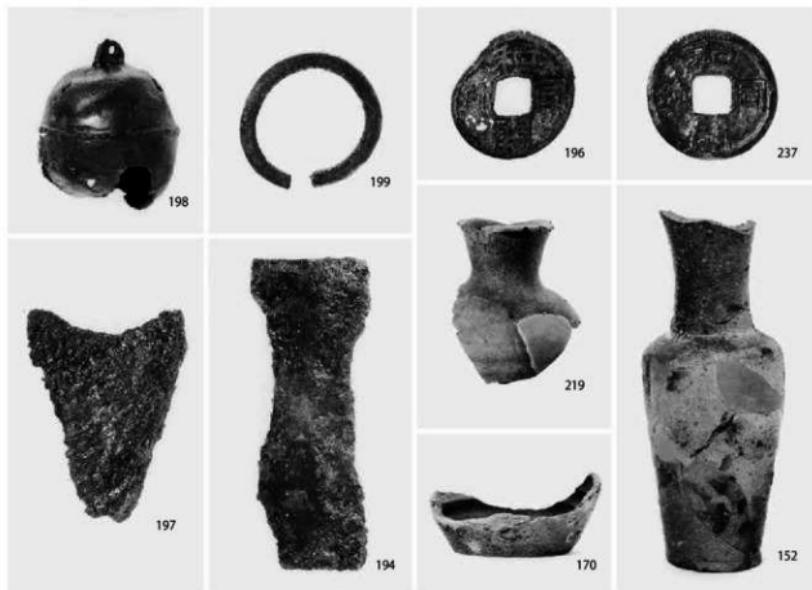


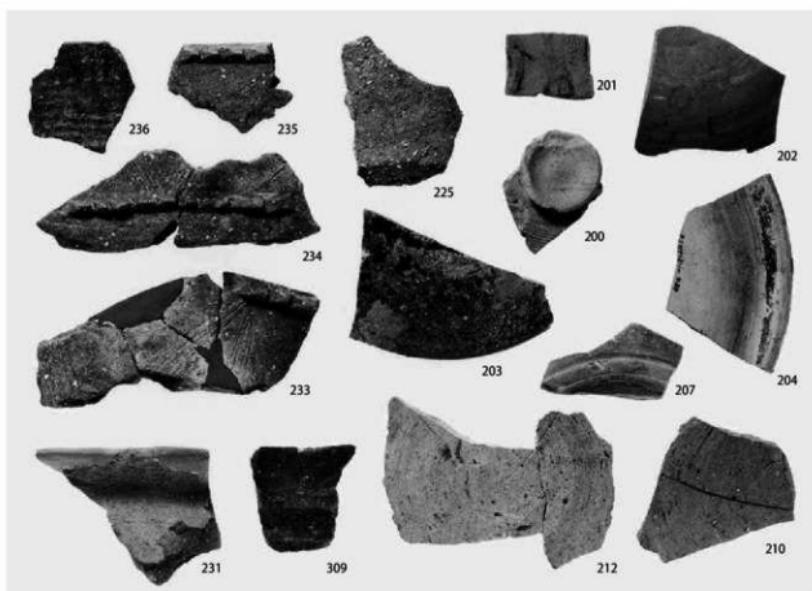
2. 第6面・第6層 出土遺物（土器）



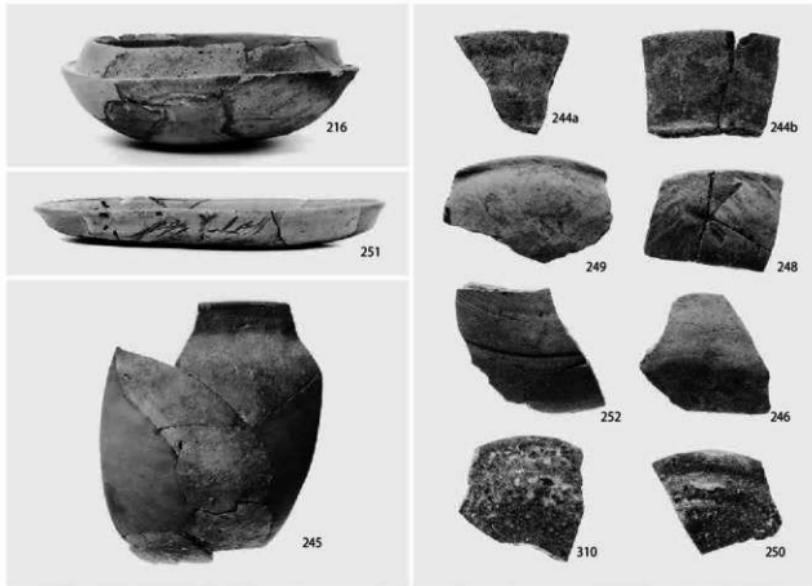
1. 第6層・第7面 出土遺物（土器）

圖版22
第6層・第7面・第7層
出土遺物（土器・金属器）



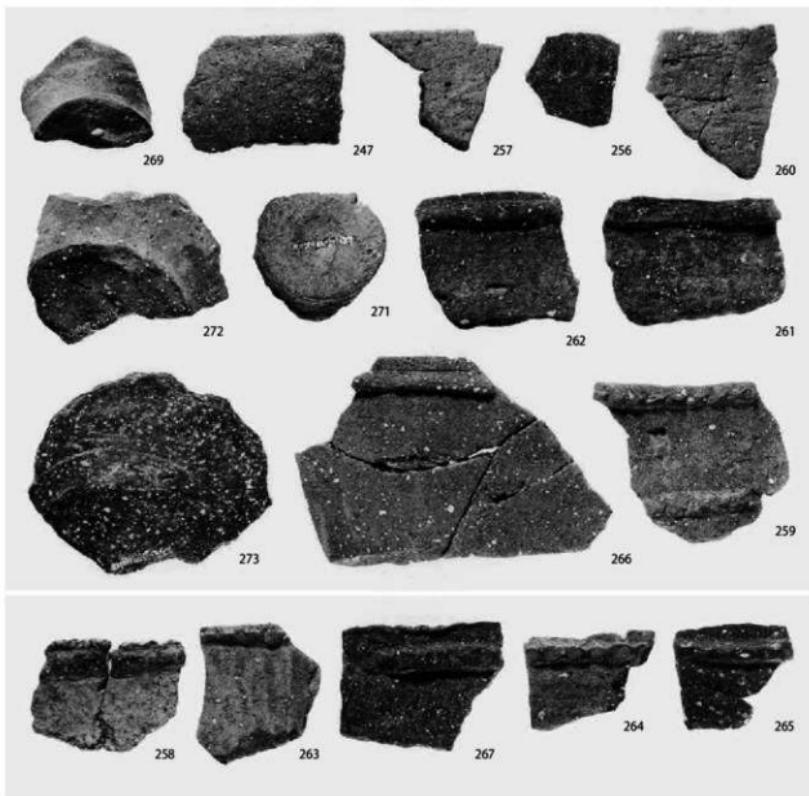


1. 第7層 出土遺物（土器）

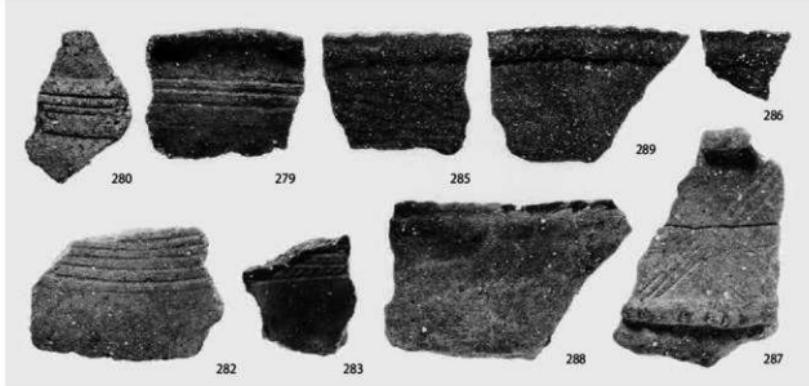


2. 第7層・第8面 出土遺物（土器）

3. 第8層 出土遺物（土器）



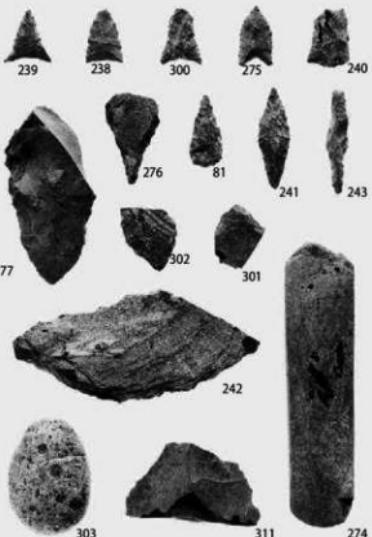
1. 第8面・第8層 出土遺物（土器）



2. 第9面 出土遺物（土器）



1. 第9面 出土遺物(土器)



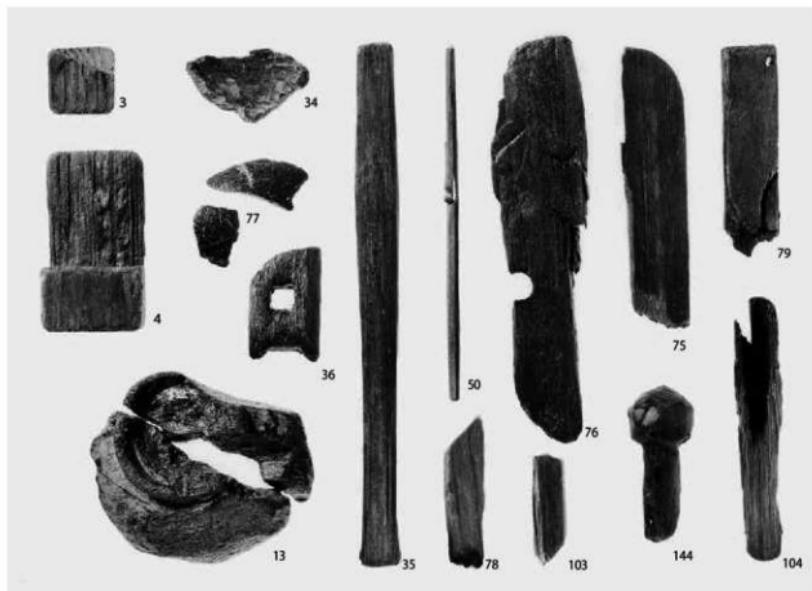
2. 第3層～第8層 出土遺物(石器)



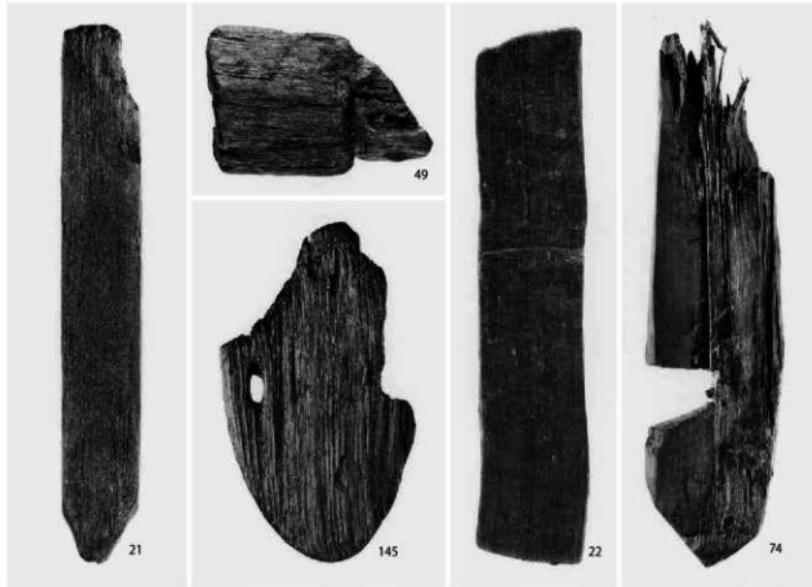
299

297

3. 第9層・第9-2面 出土遺物(土器)



1. 第0層～第5層 出土遺物（木器）



2. 第1層～第5層 出土遺物（木器）

報告書抄録

ふりがな	おおがたぐんじょうりいせき2						
書名	大県郡条里遺跡2						
副書名	寝屋川水系改良事業（一級河川恩智川法善寺多目的遊水地）伴う埋蔵文化財発掘調査報告書						
巻次数							
シリーズ名	公益財団法人 大阪府文化財センター調査報告書						
シリーズ番号	第258集						
編著者名	黒須亜希子・福佐美智子（編集）						
編集機関	公益財団法人 大阪府文化財センター						
所在地	〒590-0105 大阪府堺市南区竹城台3丁21番4号 TEL／072-299-8791						
発行年月日	2015年7月31日						
所収遺跡名	所在地	コード		緯度・経度	調査期間	調査面積 m ²	調査原因
		市町村	遺跡番号				
大県郡条里 遺跡	大阪府柏原市法善寺 4丁目 地内	27221	69	北緯 34° 35' 58" 東経 135° 37' 37"	20130410 ～ 20140930	5.694	恩智川法善寺多目的 遊水地
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物		特記事項	
大県郡条里遺 跡	生産	中世～古墳時代	水田・畠	上部器・須恵器・黑色土器・瓦器・瓦質土器・ 陶磁器・瓦・木製品・石製品・鐵製品・銅製品・ 錢貨	須恵器の一部に墨書きあり 錢貨「和銅開基」		
	集落	縄文時代晚期	竪穴建物・ピット・土 坑・溝	縄文土器・弥生土器・打製石器・サヌカイト 剝片			
要約	縄文時代晩期は微高地にあたる東半部では竪穴建物や土坑が検出され、居住域として利用していたことが推測される。弥生時代前期から古墳時代後期になると調査区南東部から北、西北方向へ流れる溝を多数検出した。溝は複数切り合っており、幾度も掘りなおされていた。奈良時代から中世にかけては水田が営まれ、中世後期には水田と共に畠も営まれていた。						

公益財團法人 大阪府文化財センター調査報告書 第258集

大県郡条里遺跡2

寝屋川水系改良事業（一級河川恩智川法善寺多目的遊水地）に伴う
埋蔵文化財発掘調査報告書

発行年月日／2015年7月31日

編集・発行／公益財團法人 大阪府文化財センター

大阪府堺市南区竹城台3丁21番4号

印刷・製本／株式会社 近畿印刷センター

大阪府八尾市志紀町南2-131番地

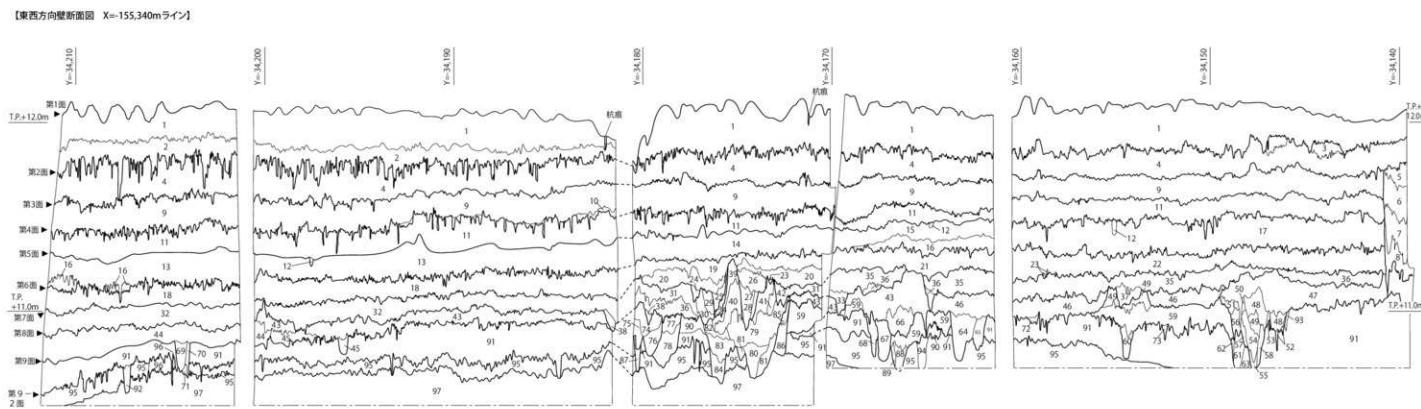
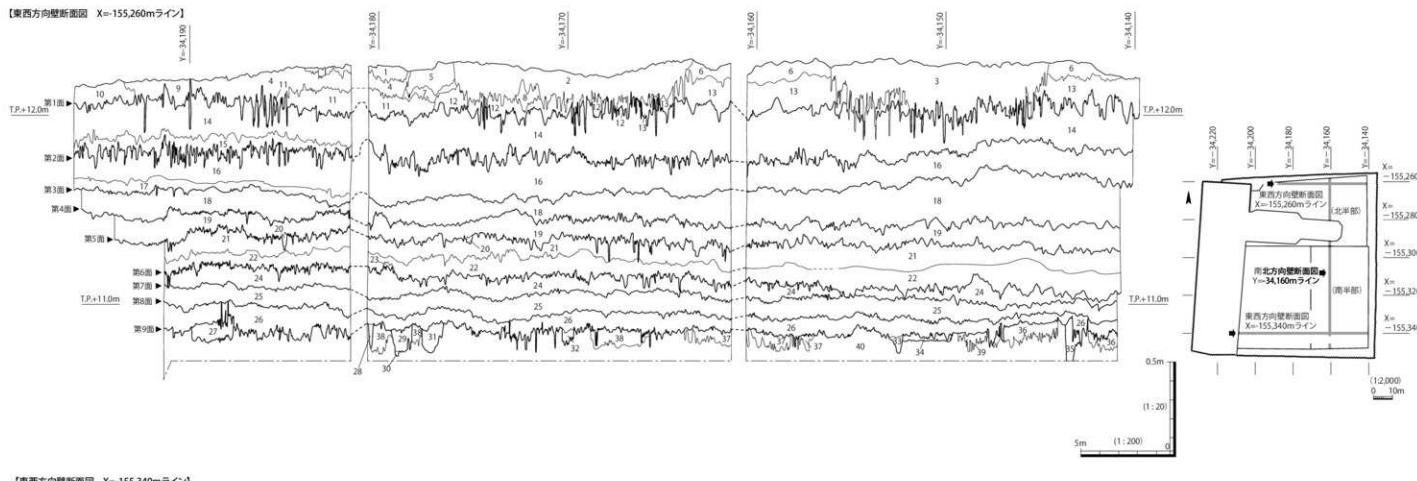
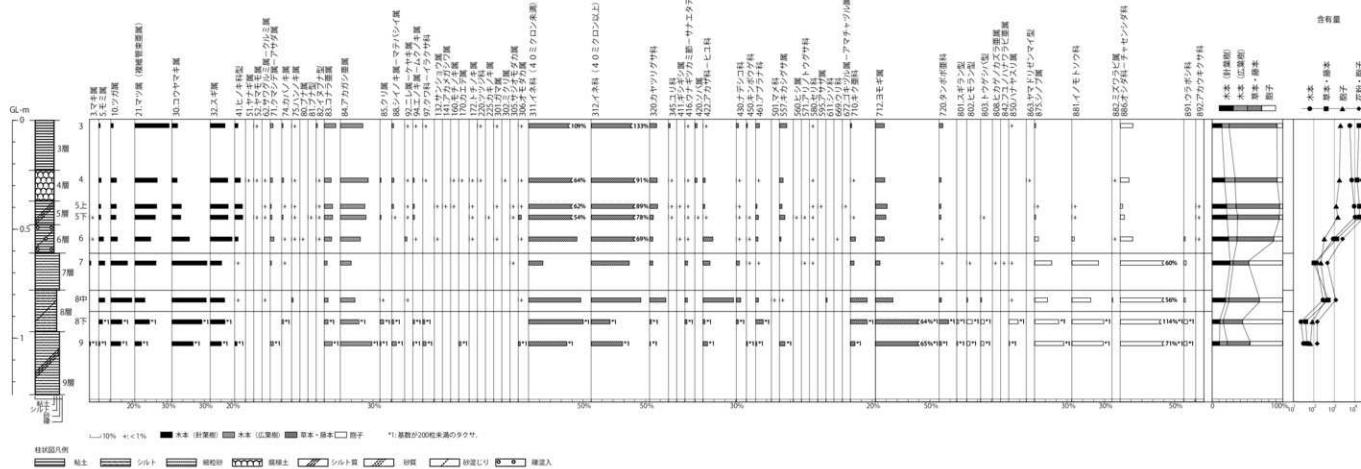


図5 調査区東西方向壁断面図

【3区 南壁地点】



【3区 トレンチ壁地点】

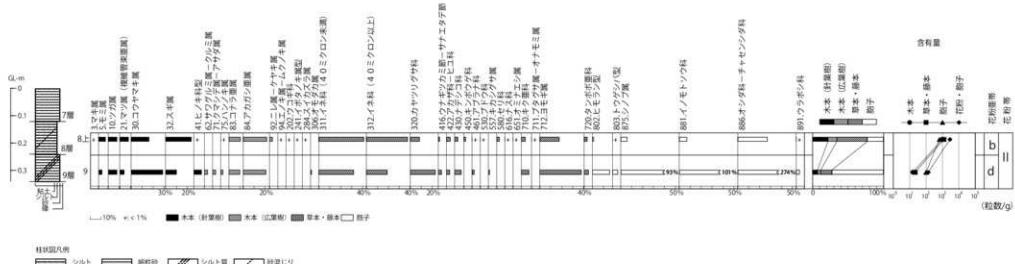
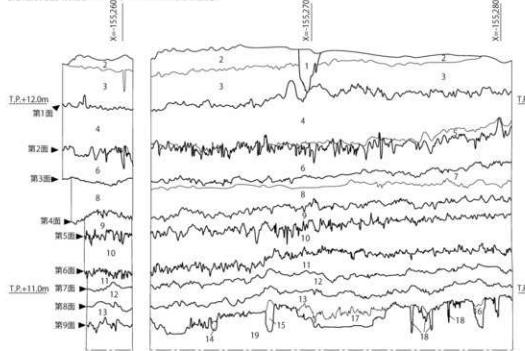


図47 花粉分析ダイヤグラム

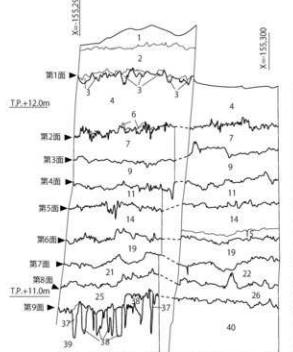
「南北方向断面図 Y=-34.160mライン(北岸部)」



「南北方向軸断面図 Y=34.160m ライン（北側部）」

「南北方向健診範囲 Y=34.160m ライン (南北部)」

【南北方向壁断面図 Y=-34,160mライン(南半部)】



m=1-55,320

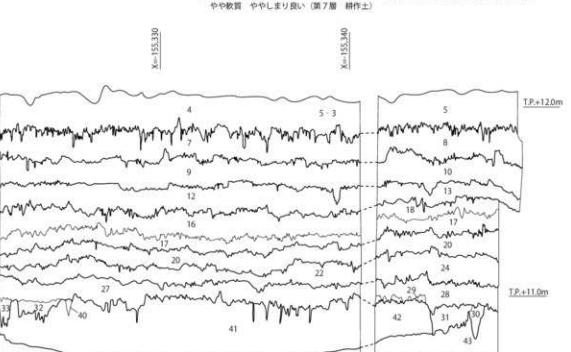


図6 調査区南北方向壁断面図